

丹波市オンデマンド史料叢書2

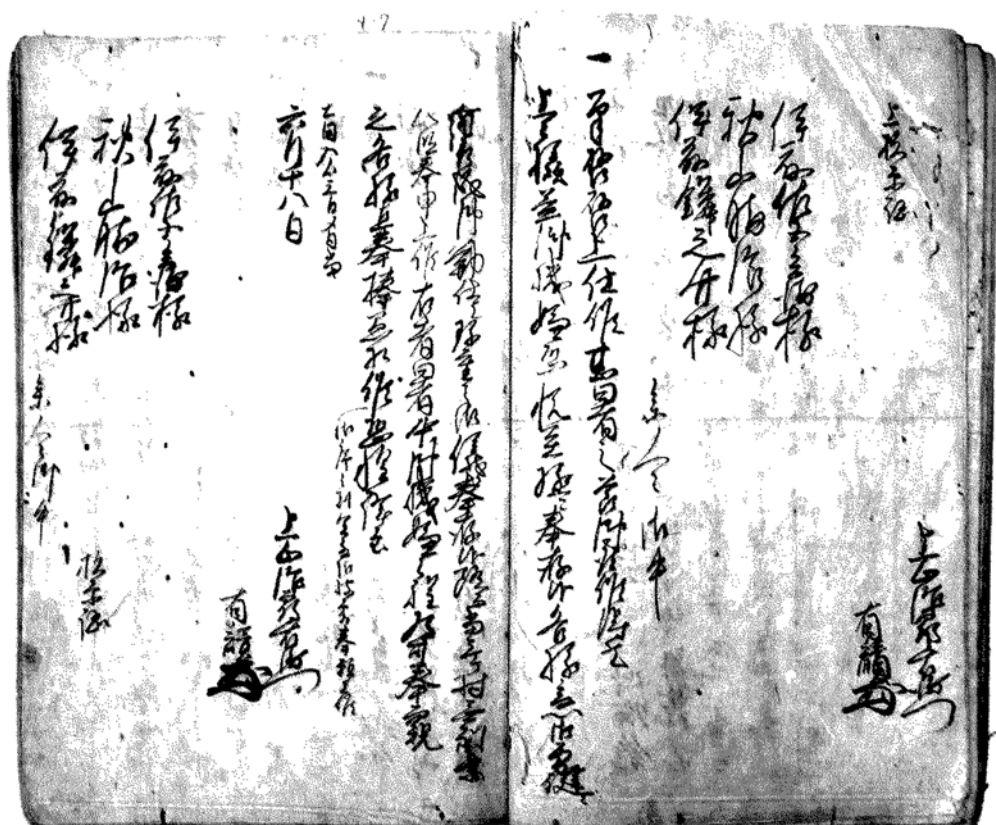
上山治郎右衛門 幕末用状控帳

二〇一七（平成二九）年三月

丹波市教育委員会

神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター

発行



丹波市オンデマンド史料叢書 2

上山治郎右衛門

幕末用状控帳

ごあいさつ

丹波市と神戸大学大学院人文科学研究科は、平成一九（二〇〇七）年八月二四日に地域活性化の連携協力に関する協定を結び、それ以降市内の古文書等文化財の調査を共同研究として進めてまいりました。そうしたなか、わたくしたちは完成された研究成果を発表するだけではなく、市民の皆様が自ら地域の歴史について調べることできる環境を整えることが必要だと考えました。歴史に関する未知の事実を発見し、独自の歴史理解を深めるためには、何よりもまず史料にあたらなければなりません。ですが、そうした史料は草書体（くずし字）で書かれたものが多く、「本物の」史料にあたるには、さまざまな困難がともないます。

そこで、わたくしたちは丹波地域の歴史に関する基礎的、かつ解読の困難な史料を活性化し、またそれになるべく多くの皆様にご利用いただけるよう、丹波市教育委員会のホームページから入手できるようにしました。ここに生まれたのが、『丹波市オンデマンド史料叢書』です。今回は丹波市立柏原歴史民俗資料館に保管されている「上山家文書」のうち、幕末期の丹波の様相がうかがえる史料を厳選してお届けします。よろしくご利用ください。

平成二九（二〇一七）年三月

丹波市教育委員会

神戸大学大学院人文科学研究科地域連携センター

目次

史料解説・・・・・・・・・・・・・一頁

1 「文久二歳 大坂御船手御役御用状扣并二諸役所要状扣」・・・・・・・・・・・・・一一頁

2 「文久三亥年 大坂御船手御役所并役向書状下案扣」・・・・・・・・・・・・・三五頁

3 「文久四子年 大坂御船手御役所并諸役向書状下案扣」・・・・・・・・・・・・・六一頁

4 「慶応三年 江坂并諸所要書扣」・・・・・・・・・・・・・九五頁

史料解説

神戸大学大学院人文学研究科学術研究員

前田 結城

一 旗本佐野氏知行所と上山家

本書を読まれる方々へ、まず収録史料の作成者である上山治郎右衛門とは何者かということ解説しておきたい。なお本節「一 旗本佐野氏知行所と上山家」の叙述の多くは大高八三郎氏のすぐれた業績に依拠している。旗本佐野氏と上山家に関する大高氏の論稿は、安蘇史談会（栃木県）刊行の『史談』に収録されており、同誌は丹波市立柏原歴史民俗資料館の学習室に配架されている。そちらも参照されたい。

江戸時代（近世）には、徳川將軍家直属の家臣のうち、所領が一万石未満の集団として旗本と御家人と呼ばれるものがあつた。このうち旗本は將軍に謁見することが可能であり、御家人はそれができなかった。

この旗本には「知行所」と呼ばれる所領が与えられた。近世期の丹波国氷上郡は、知行所が数多く散在する地域のひとつであつた。そして、氷上郡に知行所を有する旗本のひとりが佐野氏であつた。

佐野氏は、寛永一五（一六三八）年御書院番（將軍直属の護衛隊のひとつ）に取り立てられた初代久綱を祖とし、天和元（一六八一）年に正行が禁裏附に昇進、そのさい丹波国氷上郡三カ村一〇〇〇石が増されたのである。宝永二（一七〇五）年には直行がさらなる加増により三五〇〇石を領するにいたつた。この石高は旗本のなかでは高い方に入ると考えてよい。時代はかなり下つて嘉永二（一八四九）年、時行は大坂船手奉行に就任し、大坂川口役所にて執務することとなつた。以降、佐野氏は、元治元（一八六四）年五月に大坂船手奉行が廃止されるまでのあいだこの職を勤めており、幕末動乱期における業務の繁忙さは、上山氏との書簡等のやりとりから、その一端をうかがうことができる。

ところで、氷上郡における佐野氏知行所は大新屋・鴨野（現柏原町大新屋・鴨野）・稲継（現氷上町稲継）の三カ村であつた。このうち知行所の行政を管轄する役所兼上山氏の居宅は大新屋村に位置していた。なお、参考までに、三カ村の村高（村の石高）は、大新屋村が約五三四石、鴨野村が約二四七

表1 『旧領旧高取調帳』にみる旗本佐野家知行所の分布と村高

	国名	郡名	村名	旧高(石)
1	相模国	高座郡	倉見村	626.96698
2	相模国	高座郡	上溝村	327.550598
3	下野国	都賀郡	片柳村	339.475006
4	下野国	安蘇郡	下津原村	425.692993
5	下野国	安蘇郡	新里村	154.705994
6	下野国	足利郡	寺岡村	1000
7	丹波国	氷上郡	鴨野村	246.556
8	丹波国	氷上郡	大新屋村	533.56897
9	丹波国	氷上郡	稲継村※1	385.828613
計				4040.345154

* 国立歴史民俗博物館『旧高旧領取調帳』データベースをもとに作成。

※1: 稲継村は安房鶴牧藩(水野家)と相給。

石、稲継村は安房鶴牧藩(現千葉県)との相給(ひとつの村を複数の領主が領有する)であったことに注意を要するが、村高じたいは約三八六石であった。佐野氏知行所は相模国(現神奈川県)・下野国(現栃木県)・丹波国(現兵庫県・京都府)に計九カ村を領有していた。詳しい内訳については表1をみられたい。ここまでみてきたように、旗本佐野氏の知行

所は関東・関西に散在していた。したがって、知行所内の日常的な支配・行政は現地の者を利用して代行させるなどの措置がとられた。氷上郡三カ村の場合、その職務を担ったのは大新屋村の上山家であった。

上山家は、宝永元(一七〇四)年第六代勘兵衛(宗寿)のとき、領主佐野直行より名字帯刀が許可された。本来上山家は百姓身分の家であったが、支配業務を代行する見返りとして名字帯刀が許されたのである。ここで、上山家文書のうち、同家の身分が当時としてどのように理解されていたかを知りうる史料(整理番号八―二三)を掲げてみたい。

一 当所上二階町渋谷善兵衛妹とみ義、此度大新屋村郷士上山孝之進俸治郎右衛門江縁付参り候二付、是迄一向宗拙寺旦那二御座候処、向後貴寺旦那二御加へ可被下候、宗旨送り一札、仍而如件

丹州多紀郡笹山下立町

安政五年三月 尊寶寺 ㊦

丹州氷上郡大新屋村

三寶寺

御知事

(傍点は筆者による)

これは、宗旨送り状と呼ばれる種類の史料である。これに

表2 上山孝之進(成績)・治郎右衛門(有績)の身分格式・役職の変遷を中心とした年譜

年(西暦)	事項	典拠
文政2(1819)	孝之進父治郎右衛門(以下先代治郎右衛門)、64歳で苗字帯刀御免。	上山家文書8-3「永代帳」
文政3	孝之進惣領吉藏誕生。	「永代帳」
文政5	孝之進、先代治郎右衛門辞米次に分家。	「永代帳」
文政7	領主佐野義行(善行)京都大番を御勤により、先代治郎右衛門城内拜見。	「永代帳」
文政10	先代治郎右衛門、69歳で没。	「永代帳」
文政11	孝之進、三カ村収納取立方(三カ村頭取)に就任。	「永代帳」
文政13	孝之進、鴨野村騒動の取り収めにより苗字帯刀御免、三カ村取締就任につき一人扶持を与えられる。	「永代帳」・上山家文書8-25「役用早引集」
天保元(1830)	孝之進、玄米二人扶持、御小姓格(中小小姓格)に仰せ付けられる。	「永代帳」
天保8	分家米次没。	「永代帳」
天保9	孝之進、御給人格御簾印御扶持方に仰せ付けられる。	「永代帳」
天保10	孝之進、武澤定吉出役の節、勤め柄よろしく一人扶持を増される。	「永代帳」
弘化3(1846)	孝之進母没、73歳で没。	「永代帳」
嘉永2(1849)	孝之進俸吉次郎、治郎右衛門と改名のうえ、見習役に仰せ付けられる。	「永代帳」
嘉永6	孝之進、御用人席に仰せ付けられ、玄米二十石二人扶持を与えられる。	「永代帳」
嘉永7	孝之進、63歳にして公用方に仰せ付けられ、大坂役録武鑑に名前が記載される。	「永代帳」
安政2(1855)	孝之進、ただ一人で公用方勝手内外とも勤めた褒美として5石加増、都合役高25石となる。	「永代帳」
安政3	治郎右衛門、御取次に仰せ付けられ、大坂役録武鑑に名前が記載される。	「永代帳」
安政4	治郎右衛門、近置次席に仰せ付けられる。	「役用早引集」
安政5	治郎右衛門、表役となり、一人扶持公用方他向用向に仰せ付けられる。	「永代帳」
万延元(1860)	治郎右衛門、三カ村支配・二人扶持を仰せ付けられる。	「永代帳」
元治元(1864)	4月、孝之進、治郎右衛門に家督相続。 治郎右衛門、給人格に仰せ付けられる。	「永代帳」 「役用早引集」

よれば、安政五(一八五八)年三月、丹波篠山二階町のとみが
 大新屋村在住の「郷士」上山治郎右衛門へ嫁入りをするの
 で、今後とみは同村三宝寺の旦那にくわえられたい、とされ
 る。ここでは、「上山家は「郷士」、すなわち在村武士として把
 握されていることがみてとれる。

右に引用した史料にある「上山孝之進」は、上山治郎右衛

門の父にあたる人物である。上山家文書中にある「永代帳」
 「整理番号八一三」および「役用早引集」(整理番号八一三五)
 という史料によれば、孝之進(成績)は三カ村の支配・行政
 において、目覚ましい業績を残したことがわかる。その詳細
 は表2に掲げておいたが、これによれば、「三カ村収納取立方」
 や「三カ村取締」などの在村支配者的な職務から、最後は「三



▲上山孝之進の名が刻まれた灯籠

千五百石惣支配」という、佐野氏知行所の行政総責任者のな役職にまで就くこととなった。こうした職務遍歴と軌を一にして、孝之進は、旗本佐野家のなかでも「用人」と呼ばれる高い格席を与えられるにいたった。上山家文書のある史料によれば、佐野家の身分格式は上から年寄―用人―物頭―給人―近習―中小姓の順となっている〔勅使西園寺様御巡行二付次第書〕整理番号八―一〕。つまり、上山家は在村武士、三カ村惣支配者であるだけでなく、旗本佐野家の高位の家臣でもあったのである。なお、旧大新屋・北山（現柏原町北山）兩村の境界には現在も「大坂御船手勤番中／上山孝之進／藤原

成績」と刻まれた灯籠が建っている（上掲写真）。建立の詳しい経緯は不明であるが、上山の功績を記録する目的で建てられたことが推測される。

上山治郎右衛門（有績）は孝之進の倅である。安政四（一八五七）年に「公用方他向用向」に任命され、万延元（一八六〇）年には孝之進より家督を相続、元治元（一八六四）年には給人格に昇格した。「公用方」とあるように、治郎右衛門もまた、佐野氏の大坂船手奉行職の業務を側面支援する役割を担った。その詳細については今後さらに分析をする必要があるが、本書に収録した史料からもその一端は知りうるはずである。

二 本書収録史料の内訳

上山治郎右衛門は、職務上の出来事おもに佐野家の重臣宛てに報告していた。それらは史料上、「御用状」「役向書状」などと呼ばれているが、その内容をあらかじめ控えておき、帳面化して上山の手元に残しておいたのが、本書に収録した用状控帳（形状はすべて縦帳）である。同種類の史料の内訳は、つぎのとおりとなる。

- ① 嘉永三（一八五〇）年
- 「大坂川口御用状（一）控帳」〔整理番号四―二四〕

②嘉永四（一八五二）年

「大坂川口書状控帳」〔整理番号四―一八〕

③文久二（一八六二）年

「大坂御船手御役御用状扣并ニ諸役所要状扣」〔整理番号四―一〇〕

④文久三（一八六三）年

「大坂御船手御役所并役向書状下案扣」〔整理番号四―二七〕

⑤文久四・元治元（一八六四）年

「大坂御船手御役所并諸役向書状下案扣」〔整理番号四―一七〕

⑥慶応三（一八六七）年

「江坂并諸所要書扣」〔整理番号四―二二〕

以上の六冊となるが、このうち、本書では紙幅等の都合により③～⑥の四冊を掲載した。⑤・⑥は佐野氏が大坂船手奉行の職を解かれた後の時期を含むが、この四冊が書かれた当時は、尊王攘夷論の隆盛や対外危機、また倒幕直前の社会・経済の混乱など、文字通りの「動乱」期であった。本書収録の史料には、時代の緊迫感を生々しく伝える記述が多々みられ、その意味で本史料は、当該期通史と丹波史が接続しているさまを、見事に伝える史料だといえるのである。

三 本書収録史料のみどころ

本書に収録された四冊の用状控帳は、何といっても丹波幕末史の基本史料であるとともに、当該期の農村の社会秩序ないし農村の行財政のありようを具体的に知りうる史料でもある。本書は、活用者の関心によって、多様な文脈から読み解きが可能なのである。

したがって本節では、幕末維新政治史を専攻する筆者の関心に沿って、ささやかなみどころの紹介をおこないたいと思う。

（１）文久二、三年の対英開戦危機・将軍上洛

本書に収録した用状控帳四冊のうち、全国レベルの政治事象と連動した記事の初出は、文久二（一八六二）年一月における外国勢力の「打ち払い」に関するものである。これは、同年同月、幕府内で攘夷の勅旨（天皇の意思）に従うことが決定したことに関連すると思われるが、この決定からまもない一月二七日付佐野家老伊藤佐五兵衛他宛用状の別紙控によれば、大坂船手奉行所は、上山に対して「いよいよ外夷御打ち払い仰せ出されそうう趣につき、模様に寄り若・奥方様、そのほか御家中向き御家内方、当村（大新屋村）迄御立ち退き成さるべきや、計り難」いので、「当分御手当米三、四十石用意仕り置」け、との指示を出していた。この家老の

指示を現代語風にいうならば、『いよいよ外国勢力を打ち払うことが決まったため、場合によれば佐野家の若殿様と奥方様、その他家臣の身内の者が大新屋村まで退避してくるかもしれないので、「御手当米」三〇石を用意しておけ』というものであった。これに対して上山は、同じ用状のなかで、米相場の上昇は不安であるが「精々都合よく買い調べ申したく存じたてまつりそうろう」と返事し、米の調達を請け負った（以上、本書三二頁）。しかし、翌二八日付の伊藤他家老宛用状控によれば、同月二六日、米の調達のため大新屋村の承（庄）三郎という人物に「諸処相尋ね」させたところ、「もはや百姓家においては払い米これなく、この節にては多く商人の手に相渡りこれあり（中略）相庭より買い上げ申さずては売りくれ申」さないことが判明したという（本書三三頁）。つまり、大新屋の百姓は、ことごとく商人に米を売り払ってしまうので、相場どおり高値をつけなければ「御手当米」用の米を売ってくれない、というのである。ちなみに、その後「御手当米」の調達に関する記事は見受けられなくなる。理由としては、調達そのものの必要がなくなったことが考えられるが、少なくとも文久二年末の段階において、実行途中にあった「御手当米」調達計画が完遂しなかったことはたしかであろう。

こえて文久三年三月、前年八月に発生した生麦事件（薩摩藩主の父島津久光の従者が行列を横切ったイギリス人を殺傷した事件）の賠償をめぐる対英交渉がゆきづまったことにより、「速やかに戦

争相開き申すべき旨御達し」があった。これについて、上山は同年三月二四日付伊藤他家老宛の用状控のなかで、「御屋敷様」（佐野時行）へ、「大坂近海御警向」への「御大丈夫御手当の程」を「願ひ上」げている（本書四一頁）。

また、同年は、天皇へ「攘夷」の実行を約束するなどの目的で將軍徳川家茂が上洛した。將軍の上洛は三代將軍家光以来二二九年ぶりの珍事であった。これと関連して將軍家茂は大坂湾岸の視察もおこなった。五月一二日付の伊藤他家老宛用状控の記述に従えば、家茂は四月一日に大坂入城、同二六日には大坂湾岸の視察に回っていた將軍による「当御役宅」（大坂川口船手奉行の役宅）での「御小休」がにわかにおこなわれた。これまで將軍を直々に迎えたという前例はなく、役宅では「畳替」や「障子御張替」などの作業に追われたという。これについて上山は、「私共村役人・惣代登坂（大坂に登る）の上、恐悦申し上ぐべくそうろうところ、おいおい田植えにも差しかかりそうろう儀につき」、書状のみの挨拶となる旨、用状のなかで断りを入れた模様である（以上、本書四二頁）。いずれも、大坂船手奉行所が、攘夷実行の決定や將軍上洛などの未曾有の事態に翻弄されていることがよくわかる記述である。

くわえて、五月二五日付伊藤他家老宛用状控には、前述の生麦事件の賠償交渉をめぐる、「江戸・横浜のほかこの節（イギリスとの）応接御手切り共噂」を聞きつけたことが記されて

おり、これに関して上山は「御役向き御非常御手当のみ御心配との御事」と、佐野氏の職務激化を懸念する旨をしたためた（本書四七頁）。これを読む限り、旗本家臣の一員としての上山は、「攘夷」実行に積極的な考えは有しておらず、イギリスとの関係悪化についても、それを危惧する立場にあったと考えられる。

（2）元治期の諸騒動と上山の意識

元治元（一八六四）年五月一日、佐野時行は大坂城に登城し、老中水野忠精より「大坂御船手」の廃止を申し渡された（『川越藩松平家書類』『大日本維新史料稿本』東京大学史料編纂所維新史料綱要データベース、GE〇一八―五六五―七）。これによって、在坂していた佐野家家臣一行は、六月初旬に大坂の地より退くこととなった。これと入れ替わるように、長州藩の軍隊が、前年八月十八日政変（長州藩士などの急進的攘夷論勢力が京都から追放されたクーデター事件）で失われた名誉を挽回すべく、京都ならびにその周辺地域に押し寄せてきた。そして翌七月、京都御所周辺で長州藩兵と御所を守護する諸藩兵との間での戦闘、いわゆる「禁門の変」が発生した。上山は、元治元年六月二四日付伊藤他宛用状控のなかでこの変について触れており、そこで「大坂御引き取り誠に御幸福の御事と三カ村一同恐悦まかりありそうろう」とのべた（本書七〇―七二頁）。「大坂御引き取り」とは、佐野家一行の退坂を指していると考えられ、

このことを「誠に御幸福の御事」としたのだ。上山は、佐野家が禁門の変発生寸前に退坂したため、軍事動員をかけられずに済んだことを喜ばしく思っていたのである。さらに想像をたくましくすれば、上山はこの思いを佐野家重臣とある程度共有しうると考え、右の一文を書いたのではなからうか。

同年七月二一日には、大坂四ツ橋掛屋植村大蔵に対し、前年一〇月の生野の変（尊攘論浪士らが生野代官所を襲撃するなどした事件）の「再乱」を懸念するとともに、「引き続き丹州へ（浪士が）乱入の取り沙汰これあるにつき、織田（柏原藩）にも深く御心配成され居」るので、同藩の「奉行役人方まで菓子料（を）持参（し）、右御挨拶申し出置」いたという。つまり、生野の変のような騒動が再発する懸念を上山のみならず柏原藩も抱いているので、もしもの時を想定して同藩奉行役人へ「菓子料」をもって「挨拶」しておいた、というのである。

なぜ上山は柏原藩に「挨拶」をしたのか。この理由は、上山の植村に対するつぎの質問から推察しうる。上山いわく、佐野家知行所は「もし騒乱出来そうろうとも、当陣屋手切の防ぎ方身力に及ばず、柏原屋敷（柏原藩の陣屋）より相頼み置きそうろうてはいかが御座そうろうや、御相談申し上げそうろう」（以上、本書七六頁）。すなわち上山は、仮に騒動が発生した場合、佐野家知行所のみでこれに対応する能力はないとみており、そのため柏原藩との連携の可能性が模索されていたのである。

この件の補足として、慶応三（一八六七）年一月～二月初旬ごろの宛先不明の用状控もみておきたい。これによれば、上山は「近年人気変、内心むつかしく相成り、折々諸所に騒々しき儀これあり、とかく物事不安そうろうにつき、柏原屋敷へたびたびまかり越し、何か御世話相成る事もこれあり、その都度挨拶等」もしてきたが、今春も柏原藩の「奉行両人方へ扇子料として金二朱ずつ」を贈った、とした（本書九六頁）。社会不安の広がりに対して、佐野家知行所のみでは対応力をもたないと考えた上山は、もっぱら柏原藩を頼みに思っていたようである。

話を元治元年に戻す。「野州筑波山浪人騒動」（天狗党の乱、水戸藩尊攘派の挙兵事件）の発生をうけて、上山は、九月二四日付伊藤藤佐五兵衛他宛用状控のなかで「非常御警衛御厳重、殿様にも非常御人数御操り出し仰せ付けられ成されそうろうとの御事」とし、くわえて「評判（風評）にては、〔佐野時行が〕大坂御帰役御奉行・町奉行兼ね仰せ付けられもこれあるべくや、御当節御除き成されたくそうらえども、上（幕府）の儀御計らい難く心配との御儀、ごもつとも（と）存じたてまつりそうろう」と記した（本書八〇～八一頁）。このうち後段（評判にては：ごもつとも（と）存じたてまつりそうろう）は伝聞調になっているので、先に上山が受け取っていたと思われる佐野家重臣発の用状にあった記述に対して、「ごもつともです」と上山自身の意見を付けくわえたのであろう。とすると、佐野家重

臣はつぎのように考えていたことになる。すなわち、《世間では、佐野家の大坂船手奉行への復帰、あるいは同職と町奉行との兼任という噂も聞く。困難な時節柄それらは逃れたいものだが、この件についての幕府の意向は予測不可能であり、心配だ》、である。かかる「心配」に対して上山は「ごもつとも」と答えたのである。

結果的には、佐野の大坂船手奉行復帰および町奉行との兼任は実現しなかった。とはいえ、上山も佐野家重臣も、これ以上佐野家が軍事出動や在坂の要職を勤めることについて、それを忌避する意識を有していたことは、注目に値しよう。

以上、筆者の関心にそくして若干の内容紹介をおこなってきた。

幕末期は、いわゆる「幕末の志士」と呼ばれる若者の沸騰が、時代を象徴する事象とみなされがちである。それもたしかであろう。だが他方で、大身の旗本、しかも政治・軍事上の要所をおさえる諸職の一端を担う佐野家と、その家臣の一員である上山治郎右衛門は、動乱の社会状況を憂慮し、そのなかで主体的な役割を演じることについて、えてして消極的ともとれる意識を有していたのであった。

十

ご覧のように、上山治郎右衛門筆の幕末用状控帳には、じ

つに豊富な史実が散りばめられている。それはなにも愉快なことや喜ばしいことばかりではない。むしろ、そこからわかることの多くは、シビアな出来事なのかも知れない。であるからこそ、本書収録史料がわたしたちに教えてくれるのは、幕末維新は一部の英雄のロマンや栄光の物語なのではなく、当時の日本人民三〇〇〇万の苦渋や逡巡の連続、文字通りの苦闘の歴史だったのではあるまいか？ ということなのである。

わたしたちに貴重な史実を教えてくれた上山治郎右衛門をはじめ、彼の史料を長らく大切に保存されてきた上山家の方々には、心から感謝を申しあげたい。

【参考文献】

大高八三郎「江戸時代の佐野家」(『史談』八、安蘇史談会、一九九二年)

大高八三郎「幕末・維新期の旗本佐野氏の動向」(『史談』一〇、一九九四年)

凡例

- 一、本書は、上山家所蔵丹波市立柏原歴史民俗資料館寄託「上山家文書」のうち、「文久二歳 大坂御船手御役御用状扣并ニ諸役所要状扣」・「文久三亥年 大坂御船手御役所并役向書状下案扣」・「文久四子年 大坂御船手御役所并諸役向書状下案扣」・「慶応三年 江坂并諸所要書控」の計四冊を翻刻したものである。
- 二、史料の漢字は原則常用漢字を用いたが、一部の固有名詞などは原文のまま使用した。
- 三、かなは現行のひらがな・カタカナに改めたが、江（え）・而（て）・与（と）・者（は）・茂（も）・方（より）などの助詞は、原文のまま使用した。
- 四、当て字の場合、原則として初出のみ注記（ルビ）。ただし同一の当て字がかなりのページ数を隔てて再登場した場合は改めて注記を付した場合もある。
- 五、読みやすさに配慮し、適宜読点（・）および並列点（・）を補った。
- 六、破損・虫損などにより判読不能な箇所は「」を、また解読者の能力上により判読不能であった箇所には■をそれぞれ挿入した。
- 七、闕字・平出は原文のままとした。
- 八、見せ消ちの箇所は原則トルツメとした。ただし、内容的に重要と判断した見せ消ちについては、削除せずそのまま残した。
- 九、解読者による傍注はすべて（ ）にくくり入れた。
- 十、現代的観点からすれば不適切と思われる表現もあるが、本書は歴史的資料であるため、そのままとした。
- 十一、本史料の解説および解説・翻刻・校正作業は神戸大学大学院人文科学研究科地域連携センターの前田結城が担当した。なお、1の翻刻には同研究科博士課程後期課程学生・加藤明恵の協力を得た。

1 「文久二歳

大坂御船手御役御用状扣并二諸役所要状扣」

(表紙)

「 文久二歳

大坂御船手御役御用状扣

并ニ諸役所要状扣

戊正月吉日

藤原有績 』

一 正月八日出立十一日川口着御礼年玉左ニ

金百匹杉原紙二ツニ折三ツニ折抱白木足付台ニ載ル

長熨斗三本入扇子

右殿様江奉献御礼ハ御大書院諸士同様之間ニ奉申上候、

村役人者右大書院縁側也、徒士ハ大書院口の廊下也、

村役人御徒士抔者御立懸ケ也

伊藤氏江年玉金千十匹秋山へ同断し右御用人限へ其余

只礼致計也

一 相州多右衛門儀拙子引取之上三ヶ村方御歎願為致大新

屋村任候処ニ而赦免相成候筈ニ御内談申上候、柳原川

才助佐藤多吉方□々江戸帰宅赦免願候ニ付其段願候得

共御聞届無御座候

十三日夕船ニ而伏見へ登ル

一 筆啓仕候余寒退兼候得共

上々様益御機嫌能被為在 御座恐悦至極ニ奉存候、

各様ニ而者御勇健ニ可成与御勤仕珍重之御儀ニ奉存候、

然者拙子十四日昼後京姉大宮町米定旅宿へ着仕候、退

刻近江屋甚兵衛へ菓子箱一、新七郎・平七へ松■一袋

ツ、持参候所、宜敷御礼申上呉候様申聞候、尤講一条

相願候所、委細承知致呉候間此段奉申上候、翌十五日

中川善右衛門方へ参り、右昨年中御咄被為成候 東御

役所御拝借金之儀ニ付、飛脚到来致候訳申入候所、夫

者全ク間違ト存候間、最早右ノ儀ニ付村役人共差出ニ

不及、委細之儀者取調之上中川氏方御屋敷様へ御答可

被成由ニ付、此段御承知可被成下候、且講一条之儀八

百屋惣助方へ参り委細相願候処、尤孝之進様方前度之

願在之候次第ニ而承知候得共、近年雜穀直段高ク気欠

不宜、旁甚々六ツヶ敷存候得共、新七共談事之上精々

骨折見ハ「」与申聞候、猶又松■遣し候所大ニ悦び、

宜敷御礼申上候様申之右之段奉申上候、最早用事相済

候間早々引取可申積奉存候恐々謹言

京都姉大宮米定旅宿方

二月十五日申之刻認

上山治郎右衛門 印

伊藤佐五兵衛様

秋山勝治様

猶々、余寒退兼候得共、折角御厭御勤仕之程奉願上候、
扨先過中御年頭之節段々御厚情ニ預リ難在奉存候事

一筆啓上仕候、春寒退兼候得共

上々様益御機嫌能被為遊 御座恐悅至極ニ奉存候、各
様愈御勇健ニ可被成御勤仕与珍重之御儀ニ奉存候、随
而当三ヶ村相替儀無御座候、此段奉申上候

一相州多右衛門儀改心仕候由ニ而、三ヶ村方歎願書差出
候ニ付取次奉差上候、尤多右衛門儀実ニ自徳仕り候間、
何卒御憐愍ヲ以右御囲入御赦免、於大新屋邑閑住被
仰付候様口上ヲ以願出候間、右願之通り御聞届ヶ被成
下候様奉願上候

一当辺儀濃業專一之場所ニ付、最早三月下旬ニも相成候
ハ、手伝人者勿論、諸職人共濃事ニ違間なく候間、右
太右衛門儀大新屋住御聞濟相成候ハ、早々職人共申
付閑家為建度、此段御聞濟奉願上候

一御免札之儀、先達帰宅後早速三ヶ村役人共呼出し委細
申聞候所、尤村方へ難渋相掛ヶ候訳に者無之候得とも、
御如案之通り人氣開キ兼候土地柄ニ付、前後心配可仕
様子ニ而、書附ヲ以断願出候ニ付、利解申聞候（得其力）
一統進兼候間、右書付取次奉差上候、委細之儀者久兵
衛方御聞取可被成下候、右之次第ニ付三ヶ村へ聊懸り

合不相成様御高考奉願上候、いつれ御出役ニ付其節御
内談可奉申上候、恐惶謹言

二月五日

上山治郎右衛門 印

伊藤佐五兵衛様

秋山勝治様

一筆啓上仕候春暖相催候得共

上々様益御機嫌能被為遊 御座候条恐悅至極ニ奉存
候、各様愈御勇健ニ可被成御勤仕与珍重之御儀ニ奉存
候

一兼而御内談被 仰聞候御開札之儀、三ヶ村儀本書附ヲ
以御断奉申上候所、御聞濟被成下、則其趣村役人共へ
申達候所、難在奉安悦候

一相州多右衛門儀心妙ニ慎罷在候所、兎角病氣相勝不申、
此度三ヶ村惣代甚七文兵衛ヲ以奉歎願候処、御慈悲ヲ
以一ヶ所家作取立、為養生猶予御差置被成候旨被 仰
聞、早速其旨申聞候所一同難在恐悦仕候、此段奉申上
候

一京都近甚方へ兼而頼置候積金（金）甲之儀被 仰聞、則此間
右講仕法根帳ニタ通り并ニ書状等差越呉候間、三ヶ村
役人共并多兵衛・新重郎呼出し申談候所、京都儀大坂
与者違一同表向温厚にして内心薄情也、只自分勝手ニ
而已心を寄申候、乍併不勝手之儀も最初者請宜敷見せ

掛ケ候ニ付、皆人惑之ニ進物ヲ遣し、或ハ遊里ヘ招寄酒喰^食等出し多分入用費候儀在之候得共、敢之を氣之毒与存不申、却而樂之族多し、右様為致置其後瓢箪鯨ニ而、追々逸退仕り候様相成、丁度先年武沢氏之様諸家方御役人衆難儀被致候方不鮮、且於京都ニ近甚方外御主且力度候者も無之、右薄情之土地柄故、売買之馴染位ニ而者迺も取合呉申間敷奉存候処ヲ以、近甚書状相考見候所是者実意之儀与相見ヘ心配仕候、折角大金ヲ遣捨候上、若右講口数不相揃候節、私共者勿論多郎兵衛・新蔵様も最早老分之身として申訳無之様奉存候之間、何卒浅野氏御手先并当方手先、且三ヶ村之所も来月御出役之上口数相定メ仕候上、御重役様御供申上ヶ上京仕り度様申之候間、立飛脚ヲ以御窺奉申上候、右甲仕法帳并ニ甚近書状共封入奉差上候間、御高考之上宜敷御報奉願上候

一 融通米手形之儀、三ヶ村無構ニ而御開札之儀思召ニ付、早々右札引替候所、家作取立候儀久兵衛ヘ御申伝被成下候ニ付、新建敷又古家ニ而も算当宜敷方出来可申与奉存候、此段奉申上置候

一 右御開札之儀、三ヶ村無構相成候得者、金子之儀大心配仕候間、何レに茂兩三ヶ年之間ニ於金一ト箱位者御差下し相成不申而者、迺茂融通不仕候間、此段御承知奉申願上候、右之段御窺申上度如此ニ御座候、恐惶謹

言

二月廿日巳ノ刻認

上山治郎右衛門 印

伊藤佐五兵衛様

秋山勝治様

猶々

一 筆啓上仕候、暖和相催候得共愈御勇健可被成御勤珍重之御儀ニ奉存候、然ハ早春推参仕、其 御役所御用銀之内当村方江拝借仕居候儀ニ付、旧冬中米定方飛脚差越候儀如何哉御伺奉申上候所、早速御間届ヶ被成下難在奉存候、右ニ付御夫々御取調被成下候由、全ク間違之趣ニ而、則米定方書状相添、旧冬飛脚賃差戻し候旨村方方申出候、誠ニ御厚情ハ「」恐入難在奉存候、委細重役共江申聞、貴着^貴可奉万謝候、猶此上諸事御行過之程宜敷御頼申上候、乍序粗葉一箱奉進覽之候、御笑領可成候、恐惶謹言

二月廿二日

上山治郎右衛門 印

中川滋右衛門

猶々、未タ寒暖打交候得共、折角御厭御保養可被成候

鴨野邑多郎兵衛落文之事

落文扣

一多郎兵衛人をすきにする太郎内をくち^(杓ち)する十日方廿日迄にくちにする也

右之通り落文在之、尤鴨野地藏堂杉并かやかり坂裾新蔵宅の傍なる道端なるけん^(一)の木ニ張付在之候、右之趣廿三日八ツ半頃多郎兵衛直ニ届ケ出、尤伊藤氏有馬に滞留被致居候ニ付、此処へ直ニ訴へ出申度段願候ニ付赦、則書状相添遣^(一)申上候、書状左ニ

一筆啓上仕候、薄暑之砌御座候得共

上々様益御機嫌能被為遊 御座恐悦至極ニ奉存候、貴将様愈御勇健ニ被成 御座珍重之御儀ニ奉存候、三ヶ村相替儀無御座候、此段奉申上候

一貴将様御儀、先達中方御出役被為成下万事御都合能御用済、昨十一月御発駕被遊、今日有馬江御着宿被為遊候様^(一)恐奉安悦候、然ルに今日未之下刻鴨野村多郎兵衛罷出、同人申様鴨野村字萱刈坂裾の木ニ張付在之候趣、右ニ付此由直ニ言上仕り度由申出候ニ付、差赦申候、依而添書奉差上候、宜敷御差図奉願上候

四月十二日

上山治郎右衛門

伊藤佐五兵衛様

猶々、右之次第ニ付、京行之儀少々延引相成候得共、廿日頃迄見合、何之事茂無之候得者、右多郎兵衛・新

重郎召連上京仕り候而者如何御座候哉、奉御窺候、右様落文等之儀連年当辺二度々在之候得共、火焼等之儀者中々無之、只人ヲ為令成恐惑取計候儀ニ奉存候間、宜敷御差図奉願上候、以^(マ)

一右之次第ニ付、即刻勘七・庄三郎呼出し夜番等并ニ味吟^(マ)等申付置候、勿論惣吉江吟味方等急度申付置候、此条本^(一)申上置候

一筆啓上仕候、薄暑之節御座候得共、益御機嫌被成御勤役珍重之御儀奉存候、然者昨十二日鴨野村多郎兵衛落文之儀御窺奉申上置、惣吉江申付吟味仕居候所、今日午ノ刻惣吉罷出候様、織田様領応形村ニおいて昨十二日落文式ヶ所在之候趣ニ付、同村大騷致居候趣、谷屋ト申所之下役方惣吉方へ申出候趣、右文ニ言曰

多郎兵衛内をくちニするや十日十五日迄又ハ廿日迄ともかきらず 太郎兵衛人をいのすすきまを見てやくいなむ共

右之通り之落書持参ニ付大ニ騷キ、惣吉倅良助、右谷屋の下役同道、柏原小頭重兵衛方へ申出候由申出驚入候、只昨日之通鴨野邑斗之落文ニ在之候得者、穩便差治可申与奉存候所、右様御他領ニ相懸り候ニ付、当方而已之取計ニ者難及大心配仕候、尤柏原表江茂惣吉方穩便申込為置候、乍併他領江相懸り候儀ニ付、殊ニ心

配仕罷在候、委細之儀者惣吉方御（ ）上宜敷御
差図奉願上候、恐惶謹言

（ ）月十三日認

上山治郎右衛門

伊藤佐五兵衛

一筆啓上仕候、向暑之節御座候得共

上々様益御機嫌能被為遊 御座恐悅至極ニ奉存候、各
様愈御勇健（ ）被成御勤仕与珍重之御儀ニ奉存候、
随而当地三ヶ村相替儀無御座候、此段奉申上候

一田植之儀無滞三ヶ村共六月（ ）迄二日出度植仕舞
ニ而、此段御届ヶ奉申上候

一平年田植之儀、大新屋・鴨野者五月十五日迄ニ夏至在
之節者夏至中与いたし、又廿日頃方後ニ夏至在之年ハ
夫迄ニ植仕舞候也、又稻繼邑ハ古来方右両村植仕舞候
頃方植始メ候事定例也、然ル処当年儀者七八拾年無之
五月早魃ニ而、近郷共一同根付相成不申、いつ村も様々
之雨乞等嚴重仕候、中ニも織田様大ニ御心配ニ而、櫟
権言社江御直参ニ而、無例之雨乞等被成候次第、既ニ
当方方も飛脚ヲ以御注進可申上奉存候所、五月廿六日
夕立、同廿八日九日（ ）等雨、猶又六月朔日夜方
二日昼（ ）中雨無、日本雨（ ）漸山寄田迄無余
根付相片付安心仕候、乍併当年儀五月中廿五日ニ相当
り候間、夫迄ニ植付仕舞可仕、大ニ延引相成心配存候

得共、一同十分肥灰等仕込致置候間、（ ）豊作祈度
奉存候

一 大新屋邑御收納米御藏之儀、近年奉申上候通り大破相
成候処、四月下旬新郷村ト申所ニ古藏在之候間、買求
メ之由書附ヲ以申出候間、其段聞届ヶ置候、早速可奉
申上候所、麦刈前ニ而飛脚在兼延引相成候得共、此段
御察許奉願上候、則右入用積書封入、奉入 御高覧ニ
候、宜敷御取計奉願上候

一 稻荷保或者易者人、相（ ）相見杯ト申、世間廻行之
族止宿為致候儀者勿論、近付申間敷旨触渡可申様先達
上坂之節被為 仰置候ニ付此頃触可申与奉存候此段奉
申上候

一 稻繼邑心違在之ニ付、去ル四月御出役中被為 仰置候
御趣意金七両之所、去五月中持参仕候間受取置候、此
段奉申上候、右之段申上度此之如ニ御座候、恐惶謹言
六月五日 上山治郎右衛門 印

伊藤佐五兵衛様

秋山勝治様

猶々向暑御座候得共、折角御厭御勤仕可被成候様奉願
上候

一 多右衛門儀、当二月中早速別宅可仕様申上置、其後等
閑ニ付度々如何哉相尋候所、早速出来可致様乍申尔今
出来不申、又今日も相尋候所、少々手当致懸リ在之候

様申居候得共、是迄之次第二而者迎茂益迄ニも出来無
覺速^(速)、私迎も申開キ無之心配奉存候

一 乍内分奉申上候、三宝寺方拳田邑武助其外三四人江貸
付金之儀、昨年中方度々久兵衛へ催促及候所、当春至
り候得者直ニも相片付可申様申居候得共、濟方不相成
当春方も度々相尋候得共、尔今濟方不相成、今日も相
尋候得者、同様早速相片付ケ可申様申居候得共、急速
之濟方難^(一)「心配仕候、尤当村始三ヶ村与拳田村ト
彼是之儀^(一)」治兼候得共、是ハ村合之儀、右銀子
者三宝寺方拳田村四五人之者人々別借用証文差入在之
候得者、縦令公訴相成候共不苦候儀、然ルニ^(一)「隙
入之儀不面目奉存候、其上右三宝寺方拳田邑之者共へ
貸金証文之内平八方へ三ヶ村方預ケ置候内、一通文兵
衛願ニ付平八方同人江鳥渡為見置候所、右証文平八方
へ不通、剩久兵衛方右智山江相渡候由、右ニ付平八方
催促及候所、偽書ヲ以平八江相戻し之由、右之次第ニ
付、平八三ヶ村役人共江申訳無之、心配いたし居候由
難心得奉存候

一 極々御内分ニ而候得共、相州多右衛門儀病為平癒之ニ
而可^(可)在之候得共、先達私共上京前方久兵衛進ニ寄、右
拳^(前村)「智山并ニ播州瀧野辺歟出生之稻荷保、右智
山住庵為引寄、始終祈祷為致候様子、風評不宜、私共
「^(一)」も久兵衛江相尋申度存候得共、返答方ニ寄而者

其俾差置之儀難相成様之儀出来難計心配候間、尔今為
見合居申候、若故障在之筋も候ハ、内伺之上追而可奉
申上候

一 多右衛門方へ落文之儀、先達上坂之節奉申上候通り風
評不宜之者在之、帰村之上惣吉親子之者江吟味方申付
置候得共、尔今聡与相分り不申由、此段奉申上候、以
上

大新屋邑

御収納蔵建ニ付願書差出候写左ニ

本紙者 上へ差上申置候

一 是直用来候御収納米御土蔵之儀、近年奉申上候通り
追々大破ニ相成、此節ニ而者柱之根毎ク朽チ候ニ付、
最早何時相崩候儀も難計心配奉存候所、於新郷村与申
所ニ、古土蔵ニ者候得共材木栗一色ニ而大丈夫之土蔵
ニ候間、村方談事之上精々直段押合候而、漸此少々年
柄立直り候迄延納願上度段、去ル四月中申出候得共、
理解申聞ケ猶又早々上納申付置候所、又々当月六日役
人共罷出、当正月方四月迄之所組頭以上之分相納、下
方之所者は悲共延納願上呉候様書附ヲ以願出候ニ付、
先ツ考弁之上追而沙汰可致与預り置申候、如何取計可
申哉奉御伺候、宜敷御憐察之上御報奉願上候

一 昨十月多郎兵衛罷出、相州太右衛門儀病氣全快致兼候
ニ付、但馬紀之崎^{城崎}へ為養生入湯致度段願出候ニ付、乍
内分奉御窺候、恐惶謹言

六月十日

上山治郎右衛門 印

伊藤佐五兵衛様

秋山勝治様

猶々

一 極々内相州太右衛門儀、久兵衛進ニ寄拳田邑智山并ニ
播州瀧野辺出生稻荷保杯相願、病氣平治并ニ歸里之為
度々長ク祈禱為致候而已不成、風評不宜候趣相聞へ不
埒之事ニ候、乍併表立候而者難差置、心配仕候ニ付、
工風ヲ以当方方吟味ニ及様子為響候所、去五月ハ一
頃方同人等心配仕居候様子相聞江、何卒都合能為致申
度奉存候、以上

一 三ヶ村一同月懸ヶ積金之儀、近年打続キ不作ニ付、組
下一統年柄立直り候迄延納願上候所、組下一統ト申儀
御聞届ヶ難相成候間、組下之内ニ而も吟味之上、ヶ成
相立可申様之者者上納為致可申御沙汰ニ付、右取調之
上差出候書附之写、本紙者川口表へ奉差上候ニ付、右
写左ニ

乍恐奉差上候口上書

先達而ハ一之積金三ヶ村役人組頭之外年延ニ奉歎願
候処、組頭之外ニ茂積金可致様被為 仰聞奉畏候、

村々段々相調候所、稻繼邑弥之三・茂平・ハ一右衛門
ヅ三人、鴨野村新次郎・勇助・治右衛門・利兵衛ヅ四
人、大新屋村平四郎・弥助・忠二・兵右衛門・文三郎・
周次ヅ六人、惣ヅ拾三人之者成丈積金御上納仕候間、
其外難渋之所右願通御用捨被為成下候様奉歎願候、依
之御請書奉差上候、以上

稻繼村

年寄 新蔵 印

庄屋 庄三郎

鴨野村

年寄 庄三郎

庄屋 甚七

大新屋邑

年寄 孫助

庄屋 嘉七

文久貳戌六月

御地頭所様

御役所

右

一 相州多右衛門儀家作延引相成、且入湯願御聞濟相成不
申ニ付、差出候書付之写左ニ

乍恐書附ヲ以奉願上候口上書

相州ハ一村太右衛門事御糺明被為 仰附置候、然
ル上ハ一行分破損につき判読不能ハ段々奉願候ハ一

申上候所、格別之取計ハ、
〔共江ハ〕聞
濟ニ相成、為保養三ヶ村歩行御高免被為成下、本人者
不及申上ニ、我々共迄一同難在冥加極恐入奉存候、乍
不行届万端心附仕居候事ニ御座候、何等ニも本人病氣
難心得候間医師相替、當時相本氏江相ハ、
〔藥用仕
候得共、何分根込病氣不輕趣被申聞、本人者不及申上
ハ〕共迄実ニ心配仕罷在、入湯ニ而も如何与医師
ニ相尋候所、腰足病歩行六ヶ敷、引籠居候而已ニ而者
不開氣、養生ニ茂可相成与被申聞候ニ付、兩人之内附
添不申候ハ、御上様江対シ申訳無御座奉恐入候得
共、根揃中殊照統他行難仕ニ付、上山氏江御窺申置、
慥成仁相頼申度所々聞合候得共、睨与可頼仁も無御座
日送罷在候所、今般御用書ニ付上山氏江召出之上被為
仰渡、誠ニ以奉恐入候、且又太右衛門儀神妙ニ慎ミ罷
在候、同人住家出来可仕心組ニ而、色々粉骨致居候得
共、程宜敷品不出申、彼是仕候内農業ハ、世話敷相
成、誠ニ以奉恐入候得共、慥成幸便御座候ニ付、国元
類中談事之上早々一兩人可參旨申遣置候、
〔盆
後早々相登り可申与奉存候間、着次第ハ一行分破損に
つき判読不能〕得共ハ、
〔ハ〕願ハ、
〔候、
且又太右衛門六月ハ〕鴨野ハ、
〔内与被為 仰
聞奉畏候得共、屋敷地借用不申而者、小家ニ而も出来
不相成御座候間、恐多与奉存候得共、両村之内可然御

差図之程奉願上候、聊以女才^{（如）}二者相心得申居候訳ニ者
無御座候間、格別之御憐愍ヲ以ハ、
〔今少々之
所御猶予被為 成置候様奉願上候、右御聞濟ハ〕為
成下置候様、偏ニ奉願上候、右御聞濟被為 成下候ハ、
難有仕合可奉存候、以上

文久二戌六月廿七日

御地頭所様

御役所

鴨野村

鈴木多郎兵衛

稲継村

金門新重郎

一筆啓上仕候、甚暑之節御座候得共
上々様益御機嫌能被為在 御座恐悦至極ニ奉存候、
各様愈御勇健ニ可被成御勤仕与珍重之御儀ニ奉存候、
随而三ヶ村相替儀無御座候、此段奉申上候
一六月十一日出愚状御披見被成下、同月十六日御報書難
在奉拜見候、然者積金軒別月納之儀再応申達、村一同
承服致居候得共近年打続不作ニ付、下方一同困窮ニ付、
村役人組頭方如何様致取立候而も味ハ、
〔立兼候次第ニ付、難及自力、依之少々手扨立直り候迄
延納願上度段、当四月中願出候得共、理解申聞早々上
納候様申付置候所、六月六日村役人共罷出、正月方四
月迄之所組頭以上之分相納、下方之儀者是非延納願度

段願書差出候ニ付、勘考之上沙汰可致旨申聞、願書預り置、右願書奉入御高覧ニ候所、御承知被成下候得共、右者兼々御申達之通り、格別之御憐ヲ以御手当米等被下置候儀ニ付、農隙余業を以出精積立可申筈、乍併実々難渋ニ而余業を以今日を送り、積金難行届儀ニ候ハ、無余儀次第ニ付、御聞届ケ可相成候得共、一ヶ月聊ツ、之積金ニも有之、何と歟勘弁出精いたし候ハ、積立出来可申、御前条之通り実々難渋之者ハ無余儀次第、下方一同難行届儀ニも有之間敷候間、御趣意柄得与理解申聞、実々困窮之者取調之上、其者江者御聞濟之儀申渡、其外之者精々積金致候様取計可申、小前之者の中ニ者心得違ニ而難渋申立候者茂可在之哉、若左様之者も候ハ、急度御申付方之儀可有之候間、兼而不束之儀無之様理解可申聞ト之御儀、奉畏候

相州太右衛門儀、病氣為養生之但馬江入湯ニ罷越度段願出ニ付、奉御窺候所御承知被成下、右者格別御憐慇ヲ以廉々御手緩之御沙汰ニも相成居候所、三ヶ村之内者格別、他行等之儀者難相成、村内ニ而相応之手当いたし療養仕候様可申渡、且又兼御聞濟相成居候家作、尔今取立不申由、如何之所存ニ在之候哉、得と理解可申渡様被為、仰聞奉畏候、依而右之段多郎兵衛・新重（新重）呼出し委納申渡候所、恐入承伏仕り引取、其後書附ヲ以右兩人願出候間、取次奉差上候、尤文意違文面不都

合之所在之候得共、其俟預り置候段、御仁免奉願上候、
〔一〕披見之上宜敷御差図奉願上候

一積金軒別月納之儀、実々難渋人之儀者延納御聞濟〔一〕相成候得共、其余精々積立候様被為、仰聞候ニ付、其旨急度理解申渡候所、村役人共承伏仕り引取り、組頭談事之上取調候得共、近年不作打続候ニ付、当御知行所ニ不限当辺一同分限不相応多分之借財在之候者勝ニ而、漸三ヶ村組下ニ而上納可仕者十三人撰出し、則書附差出候間、封入奉差上候、右之余難渋人之儀者当春正月分方延納奉願上呉候様申出候、右之段御聞届ケ之程奉願上候

一暑中御機嫌窺書狀奉差上候所、御承知被成下、其節御披露可被成下様被為、仰下、難在奉存候

一大新屋邑郷藏取立之儀、積書相添先便委細奉申上候所、御承知被成下、右入用御下銀之所、当節柄御行届キ難被成候得共、是迄割合ヲ以少々御下ケ相成候間、左様相心得取計可申様被、仰聞奉畏候

一孫九郎借財之儀、巨細取調早々奉申上候様被為、仰聞、奉畏候、則取調書封入奉差上候間、御高覧〔一〕成下候

一京都近甚懸り借用金之儀、四月中方京都彼是之儀ニ付、御公辺ニも諸事御入用多ニ付、掛屋中江御預ケ金夫々御取立相成候間、五條掛屋方も早々返金致呉候様申出

候間、最早年限ニも在之、一ト先口々返済致呉候様、五月十九日書状ヲ以申越候間、早速可奉申上苦候得共、迎も急速返済杯不思寄候儀ニ付、序之節ト延引相成り候得共、此段御仁免可被成下候、右京都江返事之儀者、余り六ツケ敷様申候而者、返而嚴敷催促可及ト奉存候間、手廻金ヲ以返済等之儀者難及、彼是何卒先外方ニ而借替返済致度存居候位之事ニ申遣候、右之段申上度如此御座候、恐惶謹言

七月二日

上山治郎右衛門 印

伊藤佐五兵衛様

秋山勝治様

猶々甚暑御座候得共、折角御厭御勤仕候程奉願上候一御本文御申述之通り、太右衛門儀未タ家作等出来不申、病氣とは乍申、当時身分ニ而遠方入湯等之儀願出候次第如何心得候哉、久兵衛兼而世話致在之候所ヲ以等心添も不致、且家作等も其尽差置候儀、存意相分りかたく、其外彼は風聞之趣も在之、御取締ニも相抱候間、品ニ寄急度御沙汰可被為 成候間、其外心得違之者も在之候哉、下番惣吉江申付内蜜巨細取調早々可奉申上様、惣而何事ニ何事ニ不寄新規取立之儀其表方御達し無御座候御儀者、御聞済不相成候付、右之心得ニ而取

計可申上様被為 仰聞奉畏候、諸事内蜜取調之儀惣吉へ申付置候、此段奉申上候、以上

一筆啓上仕候、残暑之節御座候得共上々様益御機嫌能被為遊

御座恐悦至極ニ奉存候、各様愈御勇健ニ可被成御勤仕与珍重之御儀ニ奉存候、随而当地三ヶ村相替儀無御座候、此段奉申上候

一三宝寺并ニ大新屋・鴨野・北山右三ヶ村与拳田一ヶ村与三ヶ年以前申年八月方差縄一条、元拳田邑不当之儀申ニ付、三ヶ村方何事ニ不寄三宝寺ニお申て拳田村之者共与同席不致旨、右同寺へ届ヶ出候処、右ニ付三宝寺方拳田邑寺役之儀者不得勤段（一）達候所、同村方同寺を申掠、又寺役相勤候様相成居候処、西七月初旬三ヶ村方先達届出候通り、弥拳田村与同席之儀者不得致段押而申立候所、また同寺方拳田村役人共呼出し、重て寺役得勤不申段申渡候所、同村役人共引取り、昨西七月十日頃、本田陣屋方添書ヲ以本山久下恵日寺へ訴出候所、右本山役寺玉泉院預リニ相成、且恵日寺方御頼ニ而、北山村西方寺、中村成徳寺、柏原恵傳寺右三ヶ寺被扱候得共、拳田村承知不致、剩扱寺之内、成徳寺・恵傳寺等拳田村味方へ傾候様相成益強盛、右三宝寺方寺役ニ差支候儀法外ニ付、同寺方拳田村江断、一札可致様ト申立候ニ付、元来同村上下合体不致罷在

候儀を見込、内々工風ヲ以、拳田村下組之者十五軒言
摩、同村役人へ届ケなく三宝寺并ニ三ヶ村へ一致為致
候、書写左ニ

右書附文言の儀者、役用旧規書載帳ニ委ク記
置候間此前略す、此後皆如此

右書附取之、三ヶ村方三宝寺へ侘いたし一致為致置候
所、拳田邑役人共大二憤り、右十五人之者共同村役人
へ無届三宝寺へ随候段、言語道断ニ付、陣屋表へ訴出
可申様与嚴敷申候由ニ候得共、右十五人之者兼而覚諭
致居候事候得者、驚者無之、元三宝寺方寺役差支申達
候儀、且本山恵日寺方寺役兼帶相成居候儀等迄村役人
が一統へ披露無之儀を元し、其外村役落度在之を申立、
猶又右十五人之者右様談事之、三ヶ村へ随候儀者決而
不申、只銘々自分一了を独ツ、追々随ひ候段申立、毎
ク言開為致候ニ付、村役人共致方無之、(一)拳田村同
寺檀那之分廿八軒之所、右拾五軒引難シ同寺へ随候上
者、残纔二十三軒ニ相成、然ル処当辺儀死亡在之節、
互ニ世話致合葬送致来候処、右様村方引分候而者、跡
十三軒之者甚た迷惑相成ニ付、段々大二弱り、右ニ付
三ヶ寺方取扱早速取済し呉候様追々願出候由ニ付、十
分引寄取済候、書附写左ニ

書附略す

右之通り書附取之、和談事申候間、此段御案慮可被成
下候、然ル上者最早久兵衛懸り銀事一条相済候ハ、
右智山手難シ相成可申候

一 三宝寺先代病中尼僧へ遺言有無差纏ニ付、右為扱之、
久兵衛相懸り居候処、右遺言之儀者差置、右三宝寺先
代方拳田邑武助始メ四、五人之者共江貸付被置(一)
銀子取立而已ニ打懸り、入金在之候丈者久兵衛・智山
分ケ遣致、三宝寺并村方へ者未タ聊茂相渡し不申由、
尤銀子一条六月(一)ニ而奉申上候通り、其節早速
可相片付様申居候得共、今以訳立不申、右者久兵衛薄
智ニして智山を手ニ入候様存居候得共、智山邪智深ク
して、却而久兵衛を為服候、右僧借用人之裏へ廻り、
事為長引置、其隙ニ入金在之分借用杯与名付、いつと
なく自分(一)手ニ入可申積ニ無相違無之哉、奉愚察
候、最早久兵衛方借用杯与申、智山の手へ金子引入候
儀者、余程之事ニ御座候、此上長ク久兵衛杯ニ為任置
候ハ、取立候金子ハ不残久兵衛・智山之成餌ト、近
年多分相懸り候入用者、皆村方之難渋ト可相成哉与心
配仕候、惣吉茂此儀深ク心配仕居候

一 鴨野村与申者、(名別欠カ)同国多喜郡青山因幡守殿領分へ入込夜
盗相働、既ニ土蔵七戸前竊ニ而吹破り、品物多分盗取
候所、当四月同領ニ而被召捕入牢致居候所、段々下役
方御手入相成、然ル処近年入帳相成居候得共、左様

申立候而者、大成難題引受不申者難相濟訳柄出来候間、村方内含ニ而未タ入帳致無之方ニ為通置候所、今廿二日午時（一）山町奉行箕浦又市・駒沢三九郎右両人方者使ヲ以被申越候、其文言之内、五郎衛門与申もの当領分ニおゐて悪事いたし候ニ付召捕逐吟味候所、元播州多可郡（一）町吉兵衛忤與三郎与申者ニ而、五ヶ年以前午年十一月頃、同人弟同国同郡因路村萬藏ト申者、御知行所同国同郡鴨野邑五郎衛門娘のふ方ニ聳養子ニ罷越、五郎衛門与改名、三ヶ年以前申年六月男子出生いたし罷在候旨申立候、五郎衛門申通り右のふ聳養子ニ而、當時妻子在之候者ニ相違無之哉、及御問合ト廿二日午時頃申来り候間、使者為待置、鴨野村役人并右五郎衛門妻のふ呼出し、内実申聞置、於 白砂ニ相糺候上、勿論村役人迄戸_ベ申付置、同日申ノ刻返書差出候、文面之趣意ハ委細御申越之趣奉承知候、右ニ付早刻鴨野邑役人共呼出し相糺候所、尤五ヶ年以前方同村江罷越、右のふ方ニ同居致居ノ由申之、右様之もの村役人内含ヲ以差置候段、不行届之儀御座候ニ付、咎申付置候、乍併帳外之儀ニ付、当方ニおゐて一切差構無御座候間、可然御取計可被成下候旨返書遣し置候、此段奉申上候

一 極難洪人源助持畑之内、三宝寺門前茅畑之儀、作米■五拾匁替位之節者、右茅代銀ニ而上納相濟候位之場所

ニ而、荒畑与申内ニ而者一番宜敷処ニ而御座候、然ルを私共江耽与談事不致、村方江茂無相談、只久兵衛一了を以開発致かけ候ニ付、呼遣し委細相尋候所、大坂表ニ而御窺申上ヶ候所、右地所者御上様江御引上ヶニ相成候間、向後上納米源助方心配ニ不及、猶普請料之儀者上ヶ御下ヶ相成候筈御承知ニ付、普請相始候与申聞候間、其意ニ任せ置候、然る処開発相成候場所、尔今何等之植物も不致、又艸生茂り罷在候次第、不埒之事ニ候、依之呼出し早々植物いたし候様可申付与奉存候得共、床病ニ而引籠り居候間、全快次第急度可申付与奉存候、且右畑明年方茂余程入用不相懸ヶ而者、三四年相立候共元茅畑之節、上り候程之物茂六ツヶ敷奉存候、右之段奉申上度愚札ヲ以如此ニ御座候、恐惶謹言

七月廿四日

上山治郎右衛門 印

伊藤佐五兵衛様
秋山勝治様

猶々残暑御座候得共、折角御厭御勤仕之程奉願上候
一 多右衛門住所之儀惣吉へ相尋候所、同人申ニ多右衛門家作之儀者、大新屋ニ為建申度ト多郎兵衛申居候由ニ付、当村可然哉ト申聞候、以上

一筆啓上仕候、秋冷相催御座候得共

上々様益御機嫌能被成 御座恐悦至極ニ奉存候、各様愈御勇健ニ可被成御勤仕与珍重之御儀ニ奉存候、随而当地三ヶ村相替儀無御座候、此段奉申上候
一庄三郎借財取調書、此度惣吉江為持奉差上候間、御披見可被成下候

一京近甚銀事掛合方之儀、三宝寺并二檀中差纏一条事済之儀、鴨野村五郎衛門盜一条、源助荒畑開発之儀、奉畏候

一相州太右衛門儀、御状面之通り多郎兵衛・新重郎呼出し委細申達候所、右多右衛門家作建所之儀、大新屋邑へ被為 仰付畏奉承状候、同人妻子共之儀者、心願在之由ニ而、先頃中方能勢妙見宮へ参詣仕候由ニ付、帰宅次第心底相尋候而委細申出度由、且太右衛門家作大小之儀者、此頃相州ニも相州方親類共之内一人可参答候間、右親類江談事之上、取計申度由ニ付、夫迄御猶予願上度段申出候間、此段御含置可被成下候

一 大新屋邑平八儀、心違之儀在之先達方彼是心配仕居候、委細之儀者惣吉方「」奉申上候間、御聞取可被成下候、同人儀今日仕度次第出立上坂致度段「」出候間、取急キ大略御高免可被成下候、恐惶謹言
八月九日巳ノ上刻認

上山治郎右衛門 印

伊藤佐五兵衛様
秋山勝治様

一猶々秋冷相催可申候得共、折角御厭御勤仕之程奉願上候

一 乍内々久兵衛儀前後無構自尽之取計多ク在之候得共、教諭仕候得者却而立腹致し候儀在之、又申間候儀茂不用同様之儀茂在之心配仕候、折角拙村へ参候者之儀ニ付、何卒永住為致度奉存候、以上

一 当月十四日御認之御状、同十七日到着難在拝見候、秋冷相催候得共

上々様益御機嫌能被為在 御座候条恐悦至極ニ奉存候、各様愈御勇健ニ可被成御勤仕与珍重之御儀与奉存候、随而三ヶ村相替儀無御座候、此段奉申上候、然ハ惣吉江申含置候廉々、御承知被成下、難在奉畏候、扱平八儀年老、殊ニ大病ニ而、当春中願之通退役申付、然ル処同人是迄風聞柄茂在之候処、不軽心得違言語斷之事、右ニ付嚴重御取調被為成候得者、不容易之事ニ成行可申、深く御勘弁ヲ以御序ニ急度御取計被成度候様被 仰聞、奉畏候

一 孫九郎跡庄三郎借財取調書、惣吉へ為持奉差上候所、御披見被成下候所、殊外大借ニ付歎歎次第、右ニ付兼

而申述置候通り、厚キ御憐愍ヲ以追而可及沙汰、右ニ付而者、外借財之处年賦同様ニも勘弁無之而者取続キ難出来、右ニ付惣吉江委細御申含被成置候間、猶御勘弁も被為在御座候間、同人取続キ候様精々取計可申様ト之御儀、難在奉畏候

一 三宝寺智山一条、承引候而者不取締而已不成、村方難渋にも可相成、全三宝寺方ニ而も心違在之趣ニ付、格別勘弁ヲ以早々濟方候様、取計可申様、是又惣吉へ取扱御申含奉承知候

一 久兵衛義二付、惣吉方茂御内々御聞取、無夫与久兵衛江御利解御申聞被成置候間、若心得違聞取候ハ、同人呼出し篤与筋柄相尋、弥無腹臆理解可申聞候様ト之御儀、奉畏候

一 惣吉儀、段々は迄隱蜜方骨折候ニ付、格別以思召、金貳百疋被下置、扨同人着坂之砌、不図中見ニ而御心配被成下、御早速御申付被成下候所、御預ニ而速ニ全快御安慮被成下候様ト之御事、難在奉存候、右同人帰村之上早速罷出委細申聞、私共方宜敷御礼申上呉候様申出候間、此段奉申上候

一 平八心得違之儀、不輕言語同断之事御座候得共、御嚴重御取調相成候而者、不容易儀御座候ニ付、御序之刻急度御取計相成候様被 仰聞、右ニ付此俣差置候而者、人氣合之程茂難計、依而惣吉中含ニ而、西方寺和尚取

扱ニ而中濟致置可申様、惣吉方申出候間、此段奉申上候

一 三宝寺智山一条、是迄久兵衛取扱罷在候得共、埒明不申、依而此度惣吉へ取扱御申付奉畏候、右ニ付久兵衛呼出し委細申聞置、乍併内実如何哉相尋候得者、同人儀今俄ニ引放相成候而者、同人智山差纏之儀出来難計、いつれニも私共身分之儀、磨不申而者難相濟心配仕候処申候ニ付、勘弁ヲ以表向者仰之通り惣吉江取扱申付候得共、乍内分同人下世話ニ久兵衛取扱候様申付候所、惣吉・久兵衛共難在御請仕候、尤右智山方彼は申立候儀者、元三宝寺不行届儀在之候方事起り候儀ニ付、惣吉ヲ以三宝寺へ理解為申聞、智山承服仕候様、檀中ニ

不抱同寺方挨拶為致候而、事済候様申付候、且又三宝寺先住方拳田村武助始五、六人之者共へ貸附金取立之儀者、久兵衛・惣吉共一切不携、檀中方取立候様申付候、右様相成候ハ、惣吉穩便相治り可申哉ト奉存候、乍併是迄永引候儀も在之、勿論智山儀不法六ツケ敷、公事坊主ニ付、急速ニ者治り申聞敷候得共、いつれニも右之筋合ニ而治り可申哉与奉愚札候、恐惶謹言
八月廿八日認
上山治郎右衛門 印

伊藤佐五兵衛様
秋山勝治様

一 猶々秋冷相催候得共、折角御厭御勤仕之程奉願上候
一 当年者五月以来方近年無之天氣都合宜敷降繼よく、乍併後日如何与安じ居候処、二百日、二百十日共無刻、十七日大雨御座候得共、格別之損耗ニも相成不申、外々之咄承り候様へ、無之候得共、豊作ニ而難在一同衆相悦罷在候、稻繼邑者大豊作ニ而御座候、実ニ当年者御引老石茂無之、何卒米直段御都合能御弘相成候へ、難在奉存候、以上

一 筆啓上仕候、秋冷相催御座候得共、益御機嫌能被成御勤仕与珍重之御儀へ、存候、然者昨酉年■（けものへんに南）上胡麻之儀、延引相成ニ付、催促及候得共、平八病氣ニ而彼是取紛候哉、差出不申候内終ニ月迫、及当春至り候而者、私共不図跡忘失仕り、一言之申訳無御座候、然ル処惣吉江御伝言被成下、実ニ驚入奉恐拝候、余り之事御座候ニ付、只今至り御断之申上方も無御座、大心傷仕候、甚恐多儀御座候得共、何卒御取成ヲ以御内赦被成下候様奉願上候、則此度右胡麻奉差上候間、是又御請納相成候様、御執成之程奉願上候、右御聞濟被成下候へ、難在仕合冥加至極可奉存候、恐惶謹言

八月廿八日

上山治郎右衛門

伊藤鱗之介様

猶々秋冷相催可申候得共、折角御厭御勤仕之程奉願上候、乍末筆其 御館内各様へ宜敷御伝■奉願上候
一 毎度御願上置候亡父碑文之儀、若御認相成候へ、御下ヶ被成下候様奉願上候、以上

一 筆啓上仕候、秋冷御座候得共

上々様益御機嫌能被為遊 御座恐悦至極ニ奉存候、各様愈御勇健ニ可被成御勤仕与珍重之御儀ニ奉存候、随而當三ヶ村相替儀無御座候此段奉申上候

一 相州多右衛門儀、大新屋邑久兵衛方へ御預ヶ被為 仰付、則同入方ニ預り居候所、先達中々鴨野村多郎兵衛方ニ而遊留仕居候所、多右衛門儀又々衣類無之ニ付買求度由ニ而、多郎兵衛内含ヲ以、柏原町迄罷越候所、夕方ニ至り右太右衛門妻しけ并ニ盼彦太郎、右兩人計立歸り候得共、多右衛門儀歸り不申ニ付、多郎兵衛方如何与相尋候所、太右衛門儀者稻繼村へ罷越候ニ付、左も可在哉与存居候所、昨十五日ニ至り、右しけ方申様、多右衛門儀大病ニ而命寿難計、当地之土ニ相成候儀者残念至極ニ付、何卒国元へ引取相果度段申立、打歎キ候ニ付、見るに不忍、依而太右衛門儀者、右柏原方早駕ニ而為引取置、私共并ニ彦太郎兩人儀者為身替之立戻り候様申ニ付、驚き即刻追手差出可申様、同十

五日夕前、多郎兵衛が届出候ニ付、不取敢即刻惣吉江申付下調為致、其上太右衛門妻子并ニ多郎兵衛・新重郎・久兵衛、尤三ヶ村役人共夜中即刻召申達候所、村役人共之内他行等在之、今十六日五ツ時頃罷出候間、相糺候処、前書之通り国元之土ニ相成申度与打歎候ニ付、多右衛門儀為引取、私共親子相残り候間、為身替宜敷取計呉候様申立、一向ニ泣沈申候、勿論太右衛門儀、余り相歎き候ニ付、俄ニ工風仕り候儀ニ付、敢謀叛心懸ケ等之儀者決而無之候間、何卒歎願致呉候様申ニ付、右しけ儀、手鎖宿預ケ申付、昼夜共二人番嚴重申付置候、其外多郎兵衛・新重郎・久兵衛右三人共他行留申付置候、右三人之内別段可申付儀も在之候得共、先御窺之上与右一樣ニ申付置候、御考厚之上宜敷御差図奉願上候、恐惶謹言

壬八月十六日午時認

上山治郎右衛門 印

伊藤佐五兵衛様

秋山勝治様

猶々秋冷御座候得共、折角御厭御勤仕之程奉願上候

一 太右衛門儀、前文之通り赦し、謀叛企等之儀者決而無之様申立候得共、実否難定、御考厚之上宜敷御差図奉願上候、願ク者御屋敷様ニ而御取計之程願上度奉存候、以上

一 筆啓上仕候、秋冷相催候得共

上々様益御機嫌被為遊 御座恐悅至極ニ奉存候、各様愈御勇健ニ御勤仕可被成与珍重之御儀与奉存候、随而三ヶ村相替儀無御座候、此段奉申上候

一 相州多右衛門儀、先日者糺之通り同人夫婦俄思案（一）右様之儀仕出し候様奉申上候得共、当春方度々催促仕候得共、彼は延引致置候儀、且同人親類之者当春引取之節者、益迄之内一人参丹可申咄、又多郎兵衛・久兵衛咄ニいつれなん盆後早々右親類之内方誰かとり可来ト申居候得共、尔今不来、又太右衛門妻繁儀、道中江州迄者供二人連来候所、一人者途中方差返し候様、当着之砌申候由、其後繁、妙見参ト申数日他行仕、京都迄も罷越候由、是ハ太右衛門引取之手当ニ罷越候与被存候、又繁僕一人当地迄連来候所、其僕共心得違致候由、十日前偽追出し在之候、然ル処当十三日太右衛門儀逃去候節、右十日前方追出し在之候僕与右繁、道方差返し候与申候、僕らしく被思候様之者与外ニ忒人雲助様之者、都合四人ニ而右太右衛門早駕ニ而逃退候由、尤同十三日午ノ下刻柏原出発、同日申ノ刻福溜迄罷越、饗事迄候由、尤外ニ親類之者二、三人茂罷越、当方様子相窺候様子ニ付、其手当致置候、中々容易之所業ニ者在之間敷ト奉存候

一 太右衛門逃退候跡、落物等久兵衛方取調候所、何茂外ニ手懸りハ手懸りハ無之候得共、怪敷封箱一ツ在之候ニ付、奉入 御高覧ニ候、又久兵衛方繁へ段々相尋候候所、右繁儀御屋敷様ニおいて入牢仕候儀者覺語之由、又森本庄助へ面会致し、口角可致所存之由、当方ニ而委細嚴重可相糺筈候得共、私共ニ而者行届キ不申、余り手強ク致候而も御屋敷様へ差送り候節、道中心配ニ茂候間、格別取調不仕候得共、此段御憐許可被成下候、恐惶謹言

壬八月十八日

上山治郎右衛門 印

伊藤佐五兵衛様

秋山勝治様

一 乍極内太右衛門儀ニ付、久兵衛儀者何茂存居不申候様子ニ相見へ候得共、多郎兵衛儀如何与申候噂在之候、以上

右封箱名当写

龍 善右衛門様

西村三郎衛門

右之通り名当在之封箱ニ紙を張て其紙ニ

丹州ニ而佐藤太右衛門様 從 江戸 ト在之候

右者西村三郎衛門方方龍 善右衛門方を相頼、龍善右衛門方方蜜書太右衛門へ差越候ニ付、右様相成候儀与

被存候

一 筆啓上仕候、秋冷相催候得共

上々様益御機嫌能被為^{（寵々）}御座恐悅至極奉存候、各様愈御勇健ニ可被成御勤仕与珍重之御儀ニ奉存候、随而當三ヶ村相替儀無御座候、此段奉申上候

一 相州太右衛門妻繁儀、廿一日呼出し段々相糺候得共、先達申候通り、親類杯江談事等致候而参り候ニ者無之、只太右衛門儀国元へ為帰度而已俄ニ思寄候儀、何卒御憐愍奉願上候ト而已落涙ニ而申居候得共、引取候得者平氣之様子ニ付、いつれ国元方深ク談事之上右様取計候儀与奉存候

一 太右衛門僕儀、去ル十九日鴨野村多郎兵衛方へ書状持参立歸り候得共、右繁ニ者為合不申、多郎兵衛方ニ預ケ置、翌廿日取調可申与存候得共、惣吉親子共居不申、右惣吉ニ男儀御他領田路村へ参、番人職相勤居候ニ付、是呼ニ遣候得共、是茂役用ニ而他行仕居候ニ付、拷問等難致、無抛呼出し口門仕候所、右僕佐吉儀、江州守山ニ而雲助三人雇来り、金田与申所之宿迄連来り置、十三日太右衛門儀、金田方早駕ニ而十五日七ツ頃守山迄付置、夫方右繁為安心、書状持参立歸り候様申之候而已ニ而、其余何も不申候

一 鴨野多郎兵衛口上書、同断久兵衛書附外ニ太右衛門道中方差越候書状共奉入 御高覧ニ候

一しけ女儀、先達相糺候節者多右衛門見替りニ相残り候様申、此度之儀者多右衛門ニ取計被相殘候様申之、右繁并ニ僕共拷問仕候ハ、事柄相分り可申与奉存候、繁儀右様輕ク申成候得共、いつれ国元方趣段仕罷出候儀ニ奉愚察候、右之段申上度如此ニ御座候、恐惶謹言
壬八月廿二日
上山治郎右衛門 印

伊藤佐五兵衛様
秋山勝治様

猶々

一右二付、酒田又右衛門殿御出役罷成候儀、其外書向等在之候得共、役向旧記書載帳ニ出し置候得者略仕候

一筆啓上仕候、秋冷相募候得共

上々様益御機嫌能被為遊 御座恐悅至極ニ奉存候、各様愈御勇健ニ御勤仕与可被成候珍重之御儀ニ奉存候、随而当三ヶ村相替儀無御座候、此段奉申上候

一太左衛門儀、御委細被為 仰聞奉畏候、尤三ヶ村方同人親類江掛合可申様ト之御儀奉畏、則当月七日出ニ而書状差出し為申置候間、此段奉申上候、繁・彦太郎儀者仰之通り甚七方へ預ヶ置、猶又下男儀者惣吉方へ申付置候

一当御收納米御払之所、此節御地米相庭^(場)追々引上ヶ候ニ付、当地御收納米大坂金百廿匁余ニ茂候ハ、半方位

御払可申上様ト之御事、奉承知候、右米相庭之儀、久兵衛為問合候所、瀧野人氣当御知行所米ニ而本郷渡、百拾匁六ツケ敷由、又当辺諸所為問合候所、当月三日本田様御米上銀百廿匁余ニ而、百石御払在之候よし、併是ハ石ニ付八匁位飛上り直ニ而、外ニ続直無之由、又此方様御米為問合候所ニ而、上銀百五匁位方望手無之候間、入相之儀者見合セ申候

一京都近甚御借財御仕法ニ付、私共并稻繼新十郎上坂廻京之儀、潤^(り)八月十七日御認之御状同月廿八日着、難在奉拜見候、当月節句後早々出立可申与奉存候得共、私共儀脚氣差発、日々服薬付薬等仕候処、追々宜敷候得共、未々全快不相成、且稻繼新重郎儀、娘大病ニ而九死一生心配罷在候所、両三日少々宜敷様子ニ相見へ候得共、今少快方急度見立候上、猶予願出候ニ付、少々延引相成候得共、此段御察赦奉願上候、扱新重郎申候二者、京都懸合之儀只一人ニ而、時として不都合之儀在之哉奉存候間、今一人差添致呉候様申聞候ニ付、誰彼ト存候得共、余り昨今ニ而者咄之懸り不宜候ニ付、孫九郎悴庄三郎召連上坂可仕候得共、此段御聞濟奉願上候、取急キ大略御高免奉願上候、委細之儀者不遠差坂之上可奉申上候、恐惶謹言

九月十日

上山治郎右衛門 印

伊藤佐五兵衛様

秋山勝治様

猶々^(ママ)

一筆啓上仕候、向寒御座候得共

上々様益御機嫌能被為成 御座候条恐悦至極ニ奉存

候、各様愈御勇健ニ可被成御勤仕与珍重之御儀ニ奉存

候、随而当三ヶ村相替儀無御座候、此段奉申上候

一先達中秋山勝治様・伊藤鱗之助様御出役被成下、御勞

煩之御儀奉恐察候、乍併御夫々至極御都合克御用済、

五日早天御出駕、七日至り目出度御帰館被為成候様乍

恐察候、右御出役中御厚情被成下、難在仕合冥加至極

ニ奉存候

一当年荒御勘定書之儀、乍延引奉差上候間、御披見可被

成下候

一隱密方惣吉儀、三ヶ村^カ願ニ依而八日出立ニ而、京都・

江州者勿論品ニ寄候ハ、信州迄為尋探差出申候

一大新屋村御土藏先年立替之儀者、弘化三年年ニ而御座

候、然ル処御入用七百目余之所江 御上様方玄米五

石御下ヶニ相成居申候、尤殘納直段石ニ付六拾弍匁ニ

而御座候、此段奉申上候

一去々八月中女子出座候仕候ニ付、右届ヶ書乍延引封入

奉差上候間、宜敷御取計奉願上候

一寒中御機嫌御窺書奉差上候間、宜敷御披露奉願上候

一三ヶ村^カ相州多吉へ為引合之、役人共之内上坂之儀、

彼是延引相成、漸役代ヲ以此度一人差登セ申候間、可

然御取計奉願上候、恐惶謹言

十一月十三日

上山治郎右衛門 印

伊藤佐五兵衛様

秋山勝治様

猶々^(ママ)

猶々^(ママ)

一筆啓上仕候、甚寒之節御座候得共

上々様益御機嫌能御機嫌能^マ 御座恐悦至極ニ奉存候、

各様愈御勇健ニ可被成勤仕与珍重之御儀ニ奉存候、随

当地^(而カ)三ヶ村相替儀無御座候、此段奉申上候

一大新屋村御取納蔵入用之内御助之儀、先年之振合取調、

嘉七ヶ書附為差出封入奉差上候所、御披見被成下、御

省略中御聞濟茂難被成儀ニ御座候得共、格別之御勘弁

を以御別紙之通銀沓貫目御下ヶ被成下、村方一同難在

奉頂戴候、則御請書封入奉差上候、右入用帳先達奉差

上置候得共、御見当り不申由ニ付、此度改奉差上候間、

御披見可被成下候

一寒中御機嫌御伺書狀奉差上候所、御早速御披露被成下

候様被 仰下、難在奉存候

一 女子出生之儀奉申上候処、御承知被成下難在奉畏候
一 相州太右衛門逃去候儀ニ付、夫々咎御申付置之所、差
赦候儀奉申上候所、逸々御承知被成下候段、奉畏候
一 瀧野廻米積下ヶ方延引相成ニ付、心配仕委細奉申上候
所、右者跡々御差支ニ茂相成候間、早々着米相成候様
可仕与之御儀、奉畏候、右着先達中当方方も稻継村并
本郷座へ度々催促申遣在之、且稻継邑庄三郎儀、新町
炭友与者少々廻縁ニも在之候由候得ハ、手拔なく嚴重
申遣し候由候得共、何方諸家様御米一時ニ相成、何方
方茂嚴敷申立候由候ニ付、少々宛為積合差下し候由、
外様割合与者当方御米之儀者過分下り米相成、最早余
程出切ニ相成申候由、此段奉申上候
一 御殘米御直段之儀被為 仰聞、奉畏候、則百三拾三
両五歩ニ取極申候、此段御承知可被成下候
一 惣吉儀、太右衛門穿鑿として京都方江州へ差遣候所、
十六日着坂委細被 仰聞奉畏候、然ル処兼而御内達
被為在太吉江為引合之儀、三ヶ村役人共之内兩人為差
登可申候処、役人共之儀者御上納取立割方等ニ而手拔
ヶ六ツヶ敷、猶又病氣之者も在之、差詰鴨野村弥太郎
与取極在之候所、同人家内出產之由ニ而、俄ニ同村新
九郎ヲ以名代差出し候所、不実意之引合等仕り候由、
不都合之次第奉恐入候、右新九郎廿日早天大坂出立之
所、同日夕方方吐瀉并ニ腹痛甚敷、中山若賊ニ而止宿、

医師相招キ服藥等仕候由ニ而、歸路延引相成候旨、尤
苦殘葉持參漸廿五日未の中刻歸村仕候、右引合方之儀、
同日三ヶ村役人共呼出し相尋候所、私共方内意申聞置
候通り、当三ヶ村儀者前々方心得違之者出来候節、御
上沙汰相成候節、入用之儀者皆其者方差出候先例ニ御
座候振合申聞セ、多吉儀者如何心得居候哉、和尋致見
返答ニ応し、品能為申聞、自得之上入用引請可申答ニ
相成候ハ、宜敷候間、入用書等者遣し不申与返答候ニ
付、翌廿六日右新九郎呼出し内糺候所、同人申聞候ニ
者、弥太郎殿出坂可致候処、家内出產ニ付俄ニ私共被
相願上坂仕候、其節咄ニ、太右衛門儀ニ付入用之儀、
太吉方引合可申、若多吉持參無之ハ 御役所御手形ニ
而も致頂戴引取候様申付候由、尤和ニ引合之様ト者在
之候得共、不弁之私共儀ニ付、不行届之段申訳無之与
申ニ付、早速弥太郎呼出し相尋候得者、実否相分り可
申候得共、幸太吉付添彦左衛門当村へ為来合居候ニ付、
則役人共方前々廿四日委ク為言直自得為致居在之候上
之儀ニ付、只新九郎不弁ニして、無考言語為角立候段、
不都合之次第糺置申候、右彦左衛門儀者、得与事柄承
知仕難在次第与礼謝直置引取候間、此段御安慮奉願上
候
一 御廻米ニ付、田高座運賃米之儀直段引合為見候所、正
銀百五拾目与申ニ付、銀渡しニ而者却而御損ニ付、矢

張米ニ而相渡可申積申付置候間、此段御承引奉願上候
一 御米代之儀、秋山様御承知之通り、米着不着ニ不抱当

廿五日銀納定約之所、古市丸屋吉兵衛儀者兩度二百百
拾石之所、先弘五拾石之内拾石炭友へ分遣し、殘百石
之内漸四拾石、新町着跡六拾石未だ本郷座ニ在之候得
共、廿五日夕着ニ而、翌廿六日早朝右百石代上納仕候、
然ル所新町炭友儀者、廿六日朝至り候而も何之沙汰も
無之候間、早天方立飛脚ヲ以嚴敷催促申遣候所、漸廿
七日未ノ刻夫ヲ以金貳百兩上納仕申候、当年儀金相庭
殊の外高下在之候ニ付、出金方甚た六ツケ敷、廿五日
夕高砂表方為登金無之ニ付、昨廿六日朝方友三郎儀高
砂表へ罷下り候ニ付、不取敢貳百金持参仕候由、跡金
之儀者調次第上納可仕旨申参り候間、是迄引金方之儀
申聞候得共、何分夫之事故返答無之ニ付、引取次第早々
皆納可仕様申付置候、右之次第第二付大ニ延引相成御
嘸々御待兼被為遊候哉与心痛仕候得共、致方無之、御
恩赦可被成下候

右之次第第二付、乍延引別荒勘定書之通差急奉上納候、
着之上御改御入掌可被成下候、跡金之儀者到着次第即
刻可奉上納候、右之段乍恐代筆ヲ以奉申上候、文略乱
筆前後不弁御考続奉願上候、恐惶謹言

十一月廿七日

上山治郎右衛門 印

伊藤佐五兵衛様
秋山勝治様

猶々寒氣押募候得共、折角御厭御勤仕之程奉願上候

以別紙奉申上候、弥外夷御打払被為 仰出候御趣ニ付
模様ニ寄若 奥方様其外御家中向御家内方当村迄御
立退可被成哉難計候間、御当分御手当米三、四拾石用
意仕置候様、尤正銀ニ而百貳拾目位迄ニ而払米候ハ、
買入申置候様被為 仰聞、奉畏候、然ル処米相庭之儀、
先達而御出役御滞留中与者石ニ付三拾目余相上り在之、
買入之儀如何心配仕居候所、庄三郎へ御伝言被成下、
難在奉安心候、いつれ正銀三拾余ニ茂可相成哉奉存候
得共、精々都合能買調申度奉存候、乍併相庭柄之儀御
憐察奉願上候

一 酉年皆済目錄之儀、御見当り候ニ付、御表印被成下御
差下し難在奉請取候

一 先達而京都講一条之節、仕法帳之儀御申越、是者森元
持参ニ付、私共之手二者受取不申候間、彼方御尋可被
成下候、以上

一 筆啓上仕候、甚寒之節御座候得共
上々様益御機嫌能被為遊 御座恐悦至極ニ奉存候、

各樣愈御勇健ニ可^(ト)被御勤仕与珍重之御儀ニ奉存候、
随而当三ヶ村相替儀無御座候、此段奉申上候

一御收納米代銀、廿五日大坂相場を以仕切、此地ニ而も
同様与思召候得共、為御念同日相場飛脚ヲ以被 仰聞
難在奉存候、右者御一通り飛脚ニ付御收納金之儀者例
之通り上納可仕様ト之御儀、奉畏候、仰之通り先達方
相場大下り、御米御払方与申御都合相成候段、幸福之
御儀与奉考悦候

一 大新屋村庄三郎上坂兼而御貸遣し置金子之儀ニ付、延
引願出候得共、御表ニ而御直御聞濟相成候儀ニ者難御
成、いつれニも私共方願上候様御申聞置上候間、願出
候ハ、篤与甚考候上、当人格別為「」ニも相成可申
儀ニ候ハ、委細奉申上候様ト之御事、難在奉畏候、
いつれ篤与取調候上可奉申上候間、宜敷御含置奉願上
候

一 御買米之儀承三郎へ被為 仰聞候ニ付、同人事廿六日
諸処為相尋候得共、最早百姓家ニおいてハ払米無之、
此節ニ而者多ク商人之手ニ相渡り在之、いつれ来春相
待可申心得之由、依而相庭方買上不申而者売呉不申、
心配仕候得共、如何様ニも手を入都合能買調申度心得
ニ御座候

一 平八心得方之儀被為 仰聞、奉畏候、今ニ而者「」
慎方宜敷嚙ニ御座候、此上急度心付可申候

一 村方立木売払之儀、伺之上ならてハ伐払為致間敷旨被
仰聞、奉畏候、然ル処御案内被為在候石戸山道筋字坪
之谷山平八持大林、売払可申嚙在之候ニ付、即刻孫助
呼出し相尋候所、今日相払候者柴并曲木其外小木杯ニ
而、薪ニいたし候方外ニ遣方無之分計相払、又財木ニ
相成分者、跡ニ而別ニ相払候積与申候ニ付、右薪之分
売払之儀差赦申候、跡財木之分者、追而御沙汰在之
「」可為見合旨申付置候

一 御買入御米之儀者、御殘納外ニ平八方方上納金御手当
之積御座候得共、右米代者此節金子無之而者買調相成
不申ニ付、昨日丹金方其外へも借用金頼遣し候得共、
何分当晦日諸家様上納金ニ差詰り居候由ニ而貸呉不申、
心配仕候、若金子出来不申候ハ、買入延引相成共御
勘弁奉願上候、恐惶謹言

十一月廿八日

上山治郎右衛門 印

伊藤佐五兵衛様
秋山勝治様

一 筆啓上仕候、甚寒御座候得共
上々様益御機能被為遊 御座恐悦至極ニ奉存候、各

様愈御勇健ニ可被成御勤仕珍重之御儀ニ奉存候、随而
当三ヶ村相替儀無御座候、此段奉申上候
一
(マ)

2

「文久三亥年

大坂御船手御役所并役向書状下案扣」

(表紙)

「文久三亥年

大坂御船手御役所并役向書状下案扣

正月吉日

上山治郎右衛門

藤原有績」

正月御年頭

一金百匹 殿様江献上、尤長熨斗三本入、扇子添白木足付台ニ而

伊藤佐五兵衛様・秋山勝治様へ金二朱ツ、遣ス、外ハなし

但、江戸御屋敷之時者年始状上ル、尤柏原認之

一筆啓上仕候、余寒退兼候得共

上々様益御機嫌克被為遊 御座恐悦至極ニ奉存候、各様愈御勇健ニ可被成御勤仕与珍重之御儀ニ奉存候、随而三ヶ村相替儀無御座候、此段奉申上候

一先達中上坂仕り、御厚情ニ依而無事相勤、難有仕合奉存候、乍序御礼奉申上候

一庄三郎へ拝借銀壹貫五百目御貸下ケ之儀申聞候所、難在冥加至極与恐悦仕候、乍恐私共ハ宜敷御礼申上呉候

様申出候、此段奉申上候

一平八方上納金之儀申聞候所、承伏仕候得共、当月中ニ者調金六ヶ敷候間、私共方加助仕候而、来月中旬迄ニ右三拾金一時ニ上納仕候積申談置候間、此段御承知奉願上候

一反物之儀、今日売主新郷村又兵衛参候ニ付、相對仕見候得共、反物尺之儀者疋ニ而五丈四尺五寸、壹疋在之跡者五丈五尺、六尺宛在之候ニ相違無之ニ付、今一疋御改メ願上度候由申居候、且旧冬久兵衛へ売渡之節、外方ニ相手在之候ニ付、若御氣ニ不入申御返し相成候而者、難渋ニ付御断申上度与申候由候得者、久兵衛申ニ、入用之儀ニ付返し候儀者決而無之、万一左様之儀御座候ハ、此方方外方へ売捌可申与申候ニ付売渡候由、直段之儀者難引ケ候得共、跡追々御買取ニ相成候ハ、少々之儀者心配可仕候得共、疋ニ付壹朱抔ト申事ハ六ツヶ敷申候、跡之儀者五丈六尺ニ而、先達差上候内之上物計ニ仕立、大坂着當時之金三步位方下直ニ者六ツヶ敷申居候、先方ニも外方引合茂在之候間、道具屋へ御懸合之上御報願上度奉存候

一秋山様方御返し反物之儀、金壹歩ニ相当り可申御残し相成候方少々宜敷候ニ付、壹歩壹朱ニ相当り候様申聞候間、御調之上御報程奉願上候

一相州繁儀、此前方疥癬大ニ発、難渋仕候由ニ而歎願在

之、且先達而上坂之節、伊藤様江御内分申上ケ置儀茂在之、旁私共含ニ而手鎖差赦申候所、本人者勿論三ヶ村一同儀も相州親類之者共江骨折相見へ、難在与恐悦仕候、乍併表向御免与申ニ者無之、勿論慎方之儀是迄ニ勝り候様相心得居可申与申付置候、此段奉申上候、恐惶謹言

正月廿四日

上山治郎右衛門印

伊藤佐五兵衛様

秋山勝治様

猶々余寒御座候得共、折角御厭御勤仕之程奉願上候

一 相州綿屋藤吉方多右衛門へ差越候書状御見当候ハ、何卒此度ニ而も御廻し奉願上候

当月廿一日御認之御状廿八日着、難在奉拝見候、春暖相催御座候得共、上々様益御機嫌能被為在御座、恐悦至極ニ奉存候、各様愈御勇健ニ可被成御勤仕与珍重之御儀ニ奉存候、随而當三ヶ村相替儀無御座候、此段奉申上候

一 正月廿四日認之愚状、御披見巨細御承知被成下候様被為仰聞、難在奉存候

一 庄三郎拝借銀、平八上納金之儀、奉申上候所、御承知之段被為仰聞難在奉存候

一 反物之儀奉畏候、則二月廿四日出立ニ而売主上坂ニ付、

夫々御直談被成下候哉ニ奉存候

一 相州しけ儀、私共上坂之砌御内願申上置候通り、内含ニ而手鎖差免之旨奉申上候所、御承知被成下、難在奉存候

一 太右衛門儀早春仰之通り、旧冬中御菩提所海福寺江自訴歎願ニ付、同寺方御留守宅様江御慈悲願申出、剃髮之上同寺弟子ニ御下御憐愍段々願出候得共、大罪之儀御聞届ニも難被成候得共、当人病氣茂追々大病之様子見届ケ、且者此度

公辺方大赦被 仰出有之、当年

御先若様御年回ニも被為 当、格段之御憐愍ヲ以、当人剃髮之上海福寺江弟子ニ被下候間、右ニ付同人妻子之儀ニも在之、御慈悲之御沙汰も在之、右ニ付太吉親類之者近日上坂呼出候間、着之上妻しけ・忤彦太郎儀も御呼出し相成候間、村役人共之内付添惣吉一統可致登坂、其節諸勘定明細ニ取調、不都合之儀無之様村役人共江申付可置卜之御儀、奉畏候、則翌廿九日三ヶ村役人共呼出し、急度申付置候

一 当節柄御人少ニ付、浅賀部様其外御士分疋人御勤番被為 仰付、此度御着坂被成候由被為 仰聞、奉畏候、

此段三ヶ村役人共へ申達置候、此段奉申上候
一 道具屋大蔵忤送状此度御廻し、慥ニ入手仕、則嘉七へ相渡申候、材木伐払之儀先達中御差留置候所、御差向

御用無之ニ付、勝手次第伐取候様相達可申与之御儀、
奉畏候

一 公辺御差出兵賦・夫人之儀、弥御差出相成候ハ、三
ヶ村ニ而三人者前書奉申上候所、御承知可被下候所、
此度浅賀御氏様御上坂ニ付御談之所、御差急御差出御
沙汰ニ付、関東六ヶ村方都合拾壹人御差出相成候間、
当三ヶ村之所遠路手数不而已、御間ニ合兼候間、前書
之通り御取計被成候間、右夫人足御手当割方、追而御
達可被成候間、其旨三ヶ村役人共江達し置候様ト之儀、
奉畏候

一 御上洛御軍艦ニ而御着坂御積ニ而、海川御船共御種々
ト御取調、是上御旧記「」無之、殊之外御手数御
取調、着坂ニ御出来相成候所、右御軍艦俄ニ御止ニ相
成、去ル十三日江戸表御発駕、東海道方御上京被為在
候旨御達在之、右ニ付

御上洛中三ヶ村取締方、火之元等別而入念候様、役人
共呼出、急度相達可申様ト之儀、奉畏候、右御逸々今
廿九日三ヶ村役人共呼出し委細申付置候、恐惶謹言

二月廿九日

上山治郎衛門印

伊藤佐五兵衛様

秋山勝治様

浅賀部様

猶々春寒未タ退兼候得共、折角御厭御勤仕之程奉申上
候

一 平八方上納金之儀、去十六日取揃三拾両上納仕候ニ付、
早速旧冬買入物代銀差引御勘定可奉差上与奉存候所、
流行之風邪等ニ而引籠り、旁延引相成、今日茂俄之事
故、いづれ節句後御勘定目録一時ニ取調可奉差上候、
延引之段御高免奉願上候

一 稲継村御普請所、積張并ニ荒增多分出来之趣ニ而、願
書差出候間、其俣封入奉入御高覧ニ候、御披見之上宜
敷御報奉願上候、以上

昨廿八日御差出御状、今廿九日申ノ下刻着、難在奉拜
見候、春暖相催候得共

上々様益御機嫌能被為在 御座、恐悦至極ニ奉存候、
各様愈御勇健ニ可被成御勤仕与珍重之御儀ニ奉存候、
随而三ヶ村相替儀無御座候、此段奉申上候

一 鴨野村五郎右衛門与申者、盜賊いたし笹山ニ而召捕相
成候所、他之引合多分在之候ニ付、京都町奉行へ御引
渡し相成候ニ付、別紙御写之通御聞合在之候ニ付、猶
別紙之通り御返報御差出之積ニ御座候間、右ニ而村方
不都合之儀も無之、且五郎右衛門兼而人別之者ニ在之
候哉、又者当分村方江差置候者ニ在之候哉、且身元ハ

いつれの者ニ候哉一通り可奉申上、且又御別紙御返翰
文言下ケ紙之所、相違も候ハ、見込通り認メ加江御
返却仕候様ト之御儀、奉畏候、右者手続承知仕居候得
共、猶又鴨野村甚七・弥太郎・惣吉呼出し、委細取調
左ニ奉申上候

一 去 四月中鴨野村五郎右衛門と申者、同月廿二日頃同
村出旅、尤小鮎売買を渡世仕罷在候、然ル処廿七、八
日頃、笹山辺ニ而土蔵七ヶ所切破盜賊相働申候ニ付被
召捕、笹山表方申来候由ニ而、柏原重兵衛・惣吉同道、
鴨野村江来り相尋候ニ付、同村役人共方尤五ヶ年以前
方田路村萬藏親分ニ而罷来り居候得共、未タ入帳無之
段答置候由届出候、然ル処笹山町奉行所方使者を問合
在之候写左ニ

一 筆致啓上候、残暑之節御座候得共、各様弥御堅固可被
成御勤、珍重之御儀ニ奉存候、然者五郎右衛門与申者、
当領分ニおいて悪事相働候ニ付、召捕遂吟味候処、元
播州船町村善兵衛伴与三郎与申者ニ而、五ヶ年以前午
年十一月頃、同人弟当国氷上郡田路村萬藏与申者媒介
を以、其御知役所同国同郡鴨野村五郎右衛門始、のふ
方江賀養子ニ罷越、五郎右衛門与改名、三ヶ年以前申
年六月男子出生いたし罷在候旨申立候、右五郎右衛門
申立候通り、右のふ賀養子ニ而、当時妻子在之候者ニ

相違無御座候哉、此段及御問合候、為可得貴意如斯御
座候、恐惶謹言

七月廿一日

青山因幡守内

駒澤三九郎

善利（花押）

箕浦又市

正毅（花押）

佐野亀五郎様御内

御役人中様

右返書左ニ

貴札拝見仕候、如来示残暑御座候得共、各様益御勇健
ニ可被成御勤珍重之御儀ニ奉存候、然者五郎右衛門与
申者、其於御領分ニ悪事いたし候ニ付、御召捕被為遂
御吟味候上、委細御申越奉承知候、右ニ付早速鴨野村
役人共呼出し相糺候処、尤五ヶ年前方同村江罷越、右
のふ方ニ同居致居候由候得共、未タ入帳不致罷在候趣
不行届候儀ニ御座候、依之咎申付置候、乍併入帳無之
候もの之儀ニ付、当方ニおいて差構無御座候間、可然
御取計可被成候、右御報迄如此ニ御座候、恐惶謹言
七月廿一日申ノ下刻

上山治郎右衛門

有績（花押）

箕浦又市様

駒沢三九郎様

参人之御中

右者最初村役人方懸合方在之二、依而右様返書仕置候へ共、五郎右衛門与改名いたし在之御儀、且男子在之次第、不都合ニ御座候へ共、不得止事、右様申遣し置候、尤同村役人之内一人為念之上坂為致候間、得与御聞紀之上、可然御取計奉願上候、

一 稻継村庄左衛門拝借金御返納之儀奉畏候、則同人呼出し申聞候所、一向手当無之二付、御地ニ在之候反物代ニ而も、御引取被成下候様申候得共、右様之儀者難申上候ニ付、段々利解申聞候得共、三月朔日与申セは明後日ニ候得者問合無之、聊手当無之由ニ付、御問合不相成候間、右反物銀浅野氏方取立上納被呉候様、願之書状書可遣由ニ付、此段御承知置可被成下候、恐々謹言

二月廿九日

上山治郎右衛門印

伊藤佐五兵衛様

秋山勝治様

浅賀部様

一 御端書之趣難在奉存候

一 御上洛御軍艦御出相成、去ル十三日江戸表

御発駕、東海道筋御旅行ニ而、来三月二日・三日頃御京着被遊候由奉畏候、右ニ付 御上洛中三ヶ村取締、火之元要慎之儀奉畏、則村々自心番為致罷在

一 当月七日御差出之御状九日着、難在奉拝見候、春〔 〕御座候得共

上々様益御機嫌能被遊 御座候条、恐悅至極ニ奉存候、各様益御勇健ニ御勤仕与珍重之御儀ニ奉存候、随而三ヶ村一同不相替、此段奉申上候

一 此年中村預ヶ申付被置候太右衛門、并ニ倅彦太郎儀、同人親類之者近々上坂候間、右妻子村役人共之内老入差添、此御状着次第上坂、宿中嶋屋音右衛門方方着届ヶ仕候様、村役人共江申達候様被為 仰付、奉畏候、則同日呼出し申達置候、

一 昨年御勘定目録之儀、去月初旬方度々催促仕居候得共、村方方差出延引相成、且新庄屋等ニ而間違多ク在之、差戻し仕直し等ニ而、未取揃不相成、近々取揃可奉差上候

一 此度御尊状二者、惣吉儀御記無之候得共、去二月廿八日御認之御文中二者、同人事付添上坂仕様在之候俣、此度御差留無之二付、御前状之通り付添為差登候間、此段御承知可成下候

一 平八儀、上納金先達奉申上候通り相済候間、慎御免被為 仰付、猶又右五拾金御請取書御下ヶ奉願上候

一 旧冬御囲米買、勘定書奉差上候間、御披見可被成候
一 大豆之儀、此節ニ而者直段余程下落候得共、売払可申
哉奉伺候、若赤味噌ニ被成候御積御座候ハ、仕込桶
買調代并ニ手間塩筵料等、其外雜用相掛可申候得共、
御損毛ハ無之哉奉存候、御高考之上御報奉願上候
一 御囲米之儀、銘々土蔵ニ割合囲置可申歟共談合候得共、
何方も 御上様之御米預り置候儀者、心配之旨ニ而断
候ニ付、無扨大新屋村御收納蔵ニ御囲申置、隣家〔 〕
助ヘ夜分心附候様申付置候、此儀昨冬奉申上置候様奉
存居候処、繁用ニ而申上落相成居候哉、下案控帳ニ無
之候間、改メ奉申上候、此段御承引奉願上候、右御囲
米之儀新蔵ニ付、少々手入仕り候ハ、五月下旬迄位
ハ御囲置相成候而も別条在之間敷与一同申居候、乍併
夫迄ニも御払被為成候御積ニ御座候ハ、程能頃御沙
汰之程奉願上候
一 將軍家当初旬無御滞被為在 御上洛候由風評承り、
奉恐悦候、右ニ付候而も必定御繁多之御儀与奉恐察候
一 去月中江戸表ヘイキリス軍艦差向三ヶ条申立候所、い
つれも御聞届難相成筋ニ付、其趣を以応接可相成ニ付、
速ニ戦争相開可申旨御達ニ付、当月八日御手切之由御
座候ニ付、大坂近海御警向日々御嚴重御手配在之、御
屋敷様ニも兼而御用意御武器何時ニ而も御出張之御手
筈被為在 御座候ニ付、為心得被為 仰聞奉畏候、乍

恐御配慮之段、難筆紙ニ候御儀与奉恐察候、乍併御夫々
御手当御行届被為在 御座候段、恐入奉存候、猶此上
御大丈夫御手当之程奉願上候
一 相州太右衛門妻并ニ彦太郎儀、早々上坂為致可申様被
為 仰聞奉承知、則先達中早速上坂仕候様申付候得共、
當時何方も百姓第一之種蒔ニ付、右種蒔相済次第上坂
仕り度段願出候ニ付、太切之儀ニも在之間届申候、弥
十五日方出立上坂ニ付、此段奉延引候段御赦免奉願上
候、恐惶謹言
三月廿四日 上山治郎右衛門印
伊藤佐五兵衛様
秋山勝治様
浅賀蔀様
猶々追々暖氣ニ相成可申、折角御厭御勤仕之程奉願上
候、毎々御端書之趣難在奉存候、御影ニ而無事御勤罷
在候、此上乍御厚情之程奉願上候
一 鴨野村庄屋甚七儀、乍序口上ニ而退役仕り度申出候ニ
付、此段奉申上候儀、宜敷御差図奉願上候
一 大新屋村嘉七儀、此前宗旨仕り候由、先一ヶ年相勤申、
兼而愚物与者承知仕り居候ニ付、何事不寄三役人談事
之上取計候様、度々申付置候得共、人々談事可致与思
ふ程之智慧も無之哉、何事ニ而も輕ク相心得、一了ニ
而即席之返答多不都合而已ニ而、隣村之下草ト相成、

村方一同歎敷申居候ニ付、御出役之〔一〕何卒庄三郎江庄屋役被為 仰付候様奉願上候

一筆啓上仕候、薄暑之砌御座候所

上々様益御機嫌能被成御座、恐悦至極ニ奉存候、各様益御勇健可被成御勤仕与珍重之御儀ニ奉存候、随而當三ヶ村相替儀無御座候、此段申上候

一公方様去月十一日京都御発駕八幡御參詣、同日淀川筋御乗船、夜五ツ時頃大坂御城江御着座被遊候、右ニ付殿様御上乘ニ而、前夜方為御迎被為入 御召船、其外万端御差行被成御船ニ而 御目見被遊、着御之節御後御登城、縮面五ツ卷御拝領被為成、御諸事無御滞被為濟、〔欄外〕「五月九日着御報」御恐悦至極被為 御思召、其後御引続海岸為

御覽御成在之

殿様御上乘ニ而、惣而御差行有之、殊之外大混雜、晝夜御馳行被成候所、去月廿六日

公方様御船屋江被為成候ニ付、當御役宅ニ而御小休被遊候段、俄ニ被 仰出、是迄右様御振合も無之、大〔一〕込、御殿向暈替、障子御張替、御馬立等其外御内外御取繕、御掃除等夜通し簾ニ而人足御遣被成、漸行明まで御片付被成候処、間もなく 公方様被為入、暫く御小休相成、夫方御船之被成 御覽、先ッ無御滞被

為濟、御一統様御恐悦被成候、右ニ付私共初村役人惣代登坂之上、恐悦可申上候所、追々田植ニ茂差懸り候儀ニ付、私共二者恐悦書状為差登、三ヶ村役人共御陣屋迄恐悦可申上旨、被為仰聞難在奉承知候

一兼而御手当米之儀暑氣相成候ハ、虫入等如何ニ付、模様ニ寄当月末二者一ト先ヶ様可相成、當節柄追而御手当米御買入可相成旨被為仰聞、奉畏候

一公方様御儀、去四月中御地御城江御着座被遊候節、御跡方 殿様御登城被成候所、縮緬袴被為成 御拝領之段被為 仰聞、三ヶ村一同無際限恐悦仕候、右ニ付私共并ニ三ヶ村役人共上坂之上恐悦可奉申上候所、植付等ニ差懸り候次節ニ付、格別之御勘弁ヲ以御免被為成下候ニ付、乍恐私共方書状ヲ以恐悦奉申上候間、宜敷御執成ヲ以御披露奉願上候、且三ヶ村方御陣屋迄恐悦申出候間、此段奉申上候

一殿様御儀 公方様為御迎御乗船江引継ぎ、御役宅江被為成候儀ニ付而者、御種々御配慮被為在御座候御儀不能愚察候、各様御心配被遊候段難尽筆紙ニ奉存候、乍併御着坂後御精切此度相頭、世間柄申乍恐御面目之御至与無量奉恐悦候

一植付之儀、三ヶ村共無滞相片付候様、昨々十日届出候、此段御届奉申上候、誠ニ雨水無過不及、三ヶ村共當年之様速成田植与申事近年覚不申、一同難在大悦仕候、

此段御安慮思召可被成下候、右之段以愚札ヲ如此ニ御座候、恐惶謹言

五月十二日

上山治郎右衛門印

伊藤佐五兵衛様

秋山勝治様

浅賀部様

猶々（朱書）「此猶々書奥ニ控ヘ置申候」

三月廿八日出愚狀御報「此三月廿八日ハ」案控落相成

候得共、四月二着御報書ニハ

儀無之ニ付、改扣不申候」

一四月二日御認候御狀三日々着、難在奉拝見候、薄暑之節御座候得共

上々様益御機嫌能被為成 御座、恐悅至極ニ奉存候、各様益御勇健ニ可被成御勤仕与珍重之御儀ニ奉存候、随而当三ヶ村相替儀無御座候、此段奉申上候

一私共并ニ三ヶ村共、昨年御勘定目録并ニ殘金廿兩貳分壹朱奉差上候処、御入掌被成下、御取調之上御裏印被成下御下ケト之御事、奉畏候

一平八方上納金相濟候ニ付、御手形御下ケ被成下、慥ニ奉請取、則同人方江ハ下ケ申置候

一イキリス軍艦一条ニ付、不遠異変出来可申ニ付、江戸表諸家方ニも追々御在所江御引取、御旗本様ニ茂御知

行所江御引取御沙汰ニ付、御留守宅様ニ茂野州真岡村御陣屋江御立退御手当之趣、若御表江渡来相成可申節ニ至り候ハ、当御陣屋江御引越し与之御事、奉畏候、御地頭様ニ者御知行所寄最々々ニ夫々御陣屋御出来ニ付、御都合之御事与奉恐察候、御旗本様ニ者余り無數哉与一同恐悅仕罷在候

一三宝寺凌山和尚遠ハニ付、四月四日葬式相勤度段届出候ニ付、聞濟置候、此段御承引奉願上候

一稻繼村新十郎事、御承知之通り本宅儀者養子新藏ヘ相渡置、始一人召連分宅仕り、右様ニ養子申請相治り居候所、右新重郎昨年夏頃方放心仕り、右病氣ニ付只貧乏仕り候儀、一因ニ心配仕り、家内餐事等之事迄彼是申ニ付、右養子茂終ニ離縁罷成、此様子ニ而者、込茂養子相続之儀無覺束哉与一同心配仕罷在候所、本家新藏家内長病ニ取合罷在候所、二月廿六日死去仕候、右ニ付両家共相続六ツケ敷相成候、親類中談事之上、右新十郎引連居候始ヲ以、本家新藏後妻与直し、右新藏忤成人仕り候ハ、分家新十郎方相続可致筈ニ而、夫迄之所両家共新藏仕配為致候ハ、両家共無相違相続可申ニ付、此儀御聞届ケ為被成下候様、親類惣代文藏方願出候ニ付、此段奉申上候、何卒厚キ御勘弁ヲ以御聞合奉願上候、

一御囲大豆貳石之儀、嘉七・多吉・新助右三人江無理方相頼、赤味噌ニ為致三宝寺ニ囲置申候、尤味噌之中へ沢庵漬大根買集八十五本、塩漬瓜十五、都合數百為漬置申候、此段御承知奉願上候、右桶之儀者一本ニ致候得者、少々〔一〕置ニ而出来可申候得共、時々寄候而者、味噌不出来之事〔一〕之候間、桶數ニ仕込置候方宜敷、貳人之申ニ付桶三本ニ仕込置申候上、出来相成候ハ、〔一〕五年相立候共大丈夫与奉存候、此段奉申上候、恐惶謹言

五月十二日

上山治郎右衛門印

伊藤佐五兵衛様

秋山勝治様

浅賀部様

猶々追々向暑可申候得共、折角御厭御勤仕之程奉願上候

一私共江御端書被成下難在奉存候、御影ニ而無事相勤罷在候

一 大新屋村嘉七儀、不都合之儀在之候ニ付、庄三郎へ替役之儀奉申上候〔一〕、御一統様御評議被為成候所、庄三郎漸借財向法立間合無之ニ付、只今直ニ前役与申付候共、一体氣請之程も御兼念被為成候ニ付、嘉七儀年

来勤ニ茂在之其俣差置、庄屋勤向之儀庄三郎へ諸事引受相勤候様可申付旨、始二郎相談之上取計候様、勘弁之上申付候様被為 仰聞、奉畏候

一 当春御出役之御儀、前前条之御次第ニ付、御見合相成候様被 仰聞、奉畏候

一 稻継村庄左衛門儀、三十人甲積金之内拝借之儀、同村庄三郎、鴨野村弥太郎引受ニ而、三ヶ村へ印書為差入、三ヶ村預り分之内、四月晦日庄左衛門へ分ヶ預ヶ為致申候、右庄左衛門願ニ付右様取計申候、此段御承知〔一行分開披不能〕

一 三ヶ村御普請所、例年之通り見分願出候ニ付、先達中見廻り申置候、此段奉申上候

一 鴨野村御普請所字西奥大土砂留、昨秋中水荒候由ニ而、御出役様江御願申出候得共、夫迄一向私共へ茂何之届ヶ茂無之ニ付、御聞届ヶ不相成罷在候得共、段々願上候ニ付、先達中乍序見分仕候所、凡高廿五尺、横四間計相崩レ在之候、尤右水当之場所植木押流シ在之、其俣差置候ハ、追々植木押流シ可申ニ付、請^{マカ}普仕り置可申様申付置候、此段御承知可成下候、以上

〔朱書〕「右同日認書先控猶々書左ニ」

一 昨冬御囲米之儀、当正月中旬頃重疊石ニ付貳百三十拾目替迄直段引上ヶ罷在候所、同月下旬方追々下落、二月中旬頃方五月初旬迄石ニ付百五拾五匁方六拾四五迄之

所、往退在之候所、七、八日頃方虫入之儀案し候哉、
売人夥、買手一向無之由ニ付、昨日諸所為聞合見候所、
相場之儀者石ニ付百五拾三匁位ニ候得共、百三拾匁ニ
而茂拾石与買手無之由、右者兩昨冬百五拾匁位なれハ、
当地米播州へ下米可相成所、過分高直ニ付、三百目ニ
も可相成哉与当辺商人いづれも囲置候ニ付、近年無之
地米過分ニ而捌方無之、商人共銘々困入之由、大心配
仕罷在候、右ニ付三ヶ村役人共ニも迷惑可存哉難計、
且又当秋直段之儀、如何難計候得共、三ヶ村へ御預ケ、
当秋新ハ一ヲ以替米為積立候様被為 仰付候而者如
何御座候哉御窺奉申上候、御評議之上若三ヶ村へ御預
ケ相成候ハ、私共方申上候儀者、御内分ニ而只御上
様方表向被為 仰付候様、御取計奉願上候、誠ニ当春
ニ而商人共銘々過分之益を見、大悦罷在候所、此節ニ
而者いづれも大損ニ仕而已不成、米捌方無之心配仕居
候由聞及不申事ニ御座候

一 大新屋村庄屋役之儀、嘉七名前ニ而金銀出入ハ一
請、外役之儀庄三郎引受候様申付置候、此段御承知奉
願上候

一 右庄三郎儀、薄身ト申若年ニ候所、厚キ思召ヲ以右様
被為仰付候段、過分之儀難在仕合冥加至極奉存候、忝
端御受申上ヶ置候得共、如何存候哉、此前嘉七一
右役儀多、御断申上度段申出在之候得共、大新屋儀御

承ハ一之通り、外ニ無人候ニ付、右庄三郎へ重而可
申付与奉存候、此段御承引奉願上候、

一 為御手当之蒲団四拾枚計買調置可申様被為 仰聞、奉
畏居候得共、右蒲団之儀為聞合見候儀、近年無之高直
ニ茂在之、且直段高下ニ不抱、買ト売ト二者いづれ御
入用込二者、式、三割御損毛可相立ト奉存候、右ニ付
買入方之儀者為見合置候、若火急御入用之節者、上何
程・中何程・下何程ト御差図被下候ハ、早速私共方
三ヶ村頭立候者共江夫々割合申付ケ、御当分借上ヶ御
差支不相成様可仕候、其上ニ而御入用分御買入被遊候
方可然奉存候、此段御伺奉申上候

一 御囲米之儀最早此節至り候ハ、売相立可在之、尤納
屋米ニ而茂升改メ不申而者、売買不仕候間、若三ヶ村
江御預ケ相成候共、欠米之儀者御弁被下、又上納之節
升改メ請取候様可仕方可然御伺可申上候、以上

一 筆啓上仕候、向暑之節御座候得共

上々様益御機嫌能被為在 御座、恐悦至極ニ奉存候、
各様愈御勇健ニ可被成御勤仕与珍重之御儀ニ奉存候、
随而當三ヶ村相替儀無御座候、今般

殿様御儀、縮緬五ツ卷御拝領被為蒙 仰候条被為 仰
聞、乍恐御開運之御儀与奉存候、依之為御肴料与金百
匹奉献上候、不苦候ハ、御取次奉願上候、右者恐悦奉

申上度、各様迄奉捧愚札候、宜敷御披露奉願上候、恐惶謹言

上山治郎右衛門

有績（花押）

伊藤佐五兵衛様

秋山勝治様

浅賀部様

参人々御中

一 廿三日立飛脚ヲ以御発之御状、廿四日夜着、難在奉拝見候、向暑之節御座候得共

上々様益御機嫌能為遊 御座恐悦至極ニ奉存候、各様愈御勇健ニ御勤仕可被成与珍重之御儀ニ奉存候、随而当三ヶ村相替儀無御座候、此段奉申上候

一 相州多吉上坂仕候由ニ付、三ヶ村役人共之内、登坂仕候様ト之御儀奉畏候、則昨廿六日方出立上坂為致可申候

一 此間奉差上候愚札御披見被成候、則御報書飛脚方へ御渡被成ト之御事、且江戸横浜一条奉畏候、いづれ跡方委細可奉申上候間、大略御仁免奉願上候、恐惶謹言

五月廿五日

上山治郎右衛門

伊藤佐五兵衛様

秋山勝治様

浅賀部様

猶々

一 筆啓啓上仕候、向暑之砌御座候得共

上々様益御機嫌能為遊 御座、恐悦至極ニ奉存候、各様愈御勇健ニ御勤仕可被成候御儀ニ奉存候、随而当三ヶ村相替儀無御座候、此段奉申上候

一 相州太吉着坂ニ付、三ヶ村役人共之内上坂可仕様被為仰聞奉畏候、則今朝三ヶ村役人共呼出し、明廿六日早天方出立上坂候様申付置候

一 三ヶ村ニ而置据銀之内、大庄屋請（一）高割之儀、三役人・組頭中ニ而弁出可申筈之所ニ候得共、利惑割外ニ御檢銀之内、（一）年上納仕候分、高割等ニ而一統難洪之趣ニ而、度々内々願出候得共、聞届不申、利解等ニ而差置候得共、此度書附を以強而願出候ニ付、不得止事奉差上候、御内見之上右高割之儀、私共含ニ而差赦候様御聞濟之程奉願上候

一 暑中御機嫌御窺書状封入奉差上候間、御序之刻御披露奉願上候

一 公方様今度京都方御廻坂被為成、右ニ付御召船其外（一）船之御取扱、無御滞被為濟、且御船屋江被為成御役宅ニ而御小休被遊、御万端無御滞被為濟、御拝領

物等在之恐悦御儀、委細御先便被為

仰聞、右ニ付為御祝儀、別紙愚札ヲ以御肴料金百匹献上仕度段奉申上候ニ付、則御披露被成下候所、念入候様思召被為 下候様ト之御儀、難在奉存候、此度無御滞被為濟御大役之御儀、渡世之上御勤之御規模ニも相成候儀ニ付、為御内祝御家中様方へ御酒御吸物被下、私共へも御同様被下候段、追而御達ト之御事、難在仕合不過之恐悦奉存候、三ヶ村役人共右恐悦、御陣屋迄申出候段奉申上候所、御申上ケ被成下 公方様 御儀、去十一月無御滞御帰京被遊、御万端御取扱向聊無御滞被為濟、御一統様大安心被成候ト之御事、難在奉恐悦候、扨々御粉骨被遊候御儀与奉恐察候、扨此度町奉行様御東西并ニ御定番様御役 御免、御転役相成、如何之訳かハ不相知候得共、御首尾不宜風聞在之、兼而御勤柄御配慮も被為在、世間柄ト申一同難在奉恐悦候 一三ヶ村植付候儀無滞相濟候段、先便奉申上候所、御安心被成下奉畏候、恐惶謹言

五月廿五日

上山治郎右衛門

伊藤佐五兵衛様

秋山勝治様

浅賀部様

猶々大暑御座候得共、折角御厭勤仕之程奉願上候

一稻継村新十郎并ニ養子新蔵、両家共相統之儀奉申上候所、御聞濟被成下段、則文蔵呼出し申聞候所、親類一同安心可仕与難在大悦仕、宜敷御礼奉申上呉候様申出候

一御囲大豆式石兼而被 仰聞候通り、赤味噌并仕込桶等念入出来之儀奉申上候所、御承知被成下、難在奉畏候 一三ヶ村御普請所、例年之通り見分仕り、且鴨野村大砂留昨秋中水荒所願立之所、乍序見分仕置候段奉申上候所、是又御承知被成下、奉畏候

一御表御警衛、為援兵彦根公并ニ播州其外大名衆、御地御警衛被 仰付被成、追々御嚴重ニ相成候様子、兵庫者長州様御警衛俄ニ御免、若州其外三頭御替ニ相成候由、江戸・横浜之外此節応接御手切共噂、何分種々模様も替り、耽与御様子御分り兼、御役向御非常御手当而已御心配ト之御事、乍恐御夫々能も御取計被遊候儀与奉恐察候

一大新屋村庄三郎、庄屋役勤之儀一旦難在御請、如何心得候哉、退役願申出候ニ付、其旨申上候所、當時是与云人物も無之、厚キ思召も在之候所、何か心得違ト之御事、内分呼出し理解可仕与御儀奉畏、即刻呼出し申聞候所、恐入難在仕合ト御請申出候、此段奉申上候 一昨年御囲米之儀、追々暑氣ニも相成、虫喰等出来可申心配、先是迄御囲ニも相成之事、相場之高下ニ不抱一

ト先御程能御売払被成度、御先便御委細ニ為 仰聞
候所、段々心配御報奉申上候之所、具ニ御承知被成下、
三ヶ村之中買入之者も可在之候哉、三ヶ村ニ割合下渡、
迷惑ニ者候得共売捌被成度、尤只今代金ニも不及、当
暮新米を以替り米積立候様申渡、御為筋ニ為取計可申
様、勿論下方ニも不及難渋不相成様、為持合可申ト之
御事、奉畏候、則石之段今日申渡候所、一同承伏仕候、
此段御承知可被成下候

一 右囲米三拾八石

内

米壹石九斗

鼠虫喰欠、尤此節通用商人引渡共見

込欠、但俵ニ式升五合ツ、

同壹斗五升

右囲中米田心附次第わたし

差引

三拾五石九斗五升

右之通り三ヶ村役人共、談事之上割合拝借為致、無利
足当暮上納可仕筈ニ而取極置候間、此段御承知奉願上
候以上

一 筆啓上仕候、残暑之砌御座候得共

上々様益御機嫌能被為成 御座、恐悦至極ニ奉存候、
各様愈御勇健ニ可被成御勤仕与珍重之御儀ニ奉存候、
随而当地三ヶ村相替儀無御座候、此段奉申上候

一 大新屋村荒畑之儀、村役人組頭中心配之上之由書附差
出候ニ付、封入奉入御高覧ニ候、若右之趣御聞濟相成
候ハ、御上様ニ而開発料御心配ニ不及、自分猪鹿之
構ニ茂相成可申与奉存候

一 右荒畑之内、庄三郎方方三宝寺迄之所者、追々新家取
立、幾々ニ者開発申付度奉存候間、夫迄之所竹植御聞
届之方ニ被為 仰付候ハ、可然与乍恐奉存候、御考察
之上御差図奉願上候、恐惶謹言

六月廿七日認

上山治郎右衛門

伊藤佐五兵衛様

秋山勝治様

浅賀部様

猶々未々残暑甚敷候得共、折角御厭御勤仕之程奉願上
候

一 久兵衛儀、何歟番人役筋ニ而、惣吉役儀ニ差抱り候儀
在之由ニ而、同人方久兵衛へ相対及候所、久兵衛不当
之儀申触、今朝同人方へ連なり、尋之序ニ何歟久兵衛・
多郎兵衛同意ニ而取計候様申候歟、右兩人同意与申事
を書加、久兵衛方印紙惣吉へ相渡し候由、然ル処鴨野
村多郎兵衛驚、夜分久兵衛呼寄談事之上、又右兩人同
意仕候儀無之段、書附ニ而久兵衛方多郎兵衛直相渡候
由、右書付持参ニ而弥太郎大新屋村役人共方へ参り、

右之由申候所、大新屋村役人共申者、久兵衛方惣吉方へ相渡在之候書付ニ者証人印在之、弥太郎方へ請取居候書付ニ者証人なし、先ツ咄合之上ニ而書附いたさセ候哉、実虚不相分、依而右惣吉方へ久兵衛方相渡し之候書付之内、同意ト申事為書置可申与申答、為引取候由、依而多郎兵衛方右書附書置之儀、掛ケ合候所、久兵衛書置セ可申与ハ申候得共、只日送り而已ニ而埒不付候ニ付、久兵衛相手取り当方へ願出可申段、多郎兵衛方相對詰、当方迄内分申出、弥可訴出ニ相極り候所、多郎兵衛方へ何之答茂なく、廿五日出立、上坂御屋敷様へ何歟願出候様多郎兵衛方届出候、尤其前久兵衛儀大新屋村役人共方へ毎度／＼罷出、度毎御意共相違之儀而已申出、一向取所難在候間、惣吉へ直相對之上文言為書直可申与、不取敢置候由、然ル処惣吉へ何之相對ニ茂不及、村役人共へ一応之答もなく御屋敷様へ直々願出候様之致方、当御役場を踏付、其上村方不治り之基を相企候ニ付、村方一同難渋之次第而已いたし、実ニ無法者ニ而、一統迷惑仕居候由、右未タ不取調罷在候ニ付、委細承知仕兼候得共、御含迄ニ奉申上候、以上

一筆啓上仕候、残暑御座候得共

上々様益御機嫌能被為遊 御座候条、恐悅至極奉存候、各様愈御勇健ニ御勤仕可被成候、随而三ヶ村相替儀無御座候、此段奉申上候

一 当月十三日願方雨降出し、十四日昼中風、午時頃方夕立ニ而雷鳴嚴雨、火急ニ洪水走出、一同騒立手当いたし、大新屋村儀大土砂留之外、御普請所総崩、其外道并ニ川筋破損所数知れず、且石橋尾山凡長サ式百間、横五拾間計相崩申候、鴨野村川堤切四ヶ所、近年杉苗植付場所字西奥大土砂留始メ不残大小破損、中ニ者総崩出在之、東奥ニも五ヶ所計在之候、稻継村者十四日方水湛、十五日ニ至り船なくてハ隣村へ通ふ者も不相成、漸十六日届出候、破損之儀未タ水深くて相知不申由、いつれ取調之上後便可申上候、

一 稻継村儀、軒別俄ニ水付候ニ付、手当等不行届、諸道具且飯料之米麦等迄押流候ニ付、極難渋人者共へ者御救米等御下ヶ願上呉候様申出候、此段宜敷御差図奉願申上候、右之段御注意奉申上度、如此ニ御座候、恐惶謹言

七月十六日

上山治郎右衛門

伊藤佐五兵衛様

秋山勝治様

浅賀部様

猶々残暑御座候得共、折角御勤仕可成候

一 久兵衛儀、盆前歸り候得共、最早間合なく且多用ニ付差延在之候、盆濟早束取掛り可申与存候所、洪水ニ而所々大荒ニ付、取調之上呼出し相糺可申与奉存候、以上

一 筆啓上仕候、残暑御座候得共愈御勇健与可成御勤珍重之御儀ニ奉存候、然者当月十四日希大雨ニ而火急之洪水諸所大荒之由、乍併其御地儀者如何御座候哉、格別之御障等無御座候哉、奉御伺候、右御挨拶御機嫌御伺、旁愚札ヲ以如此ニ御座候、恐惶謹言

七月廿四日

上山治郎右衛門

水谷六郎左衛門様

大多「」純之介様

猶々秋暑退兼候得共、折角御厭御勤仕之程奉願申上候、早示以参御伺可申上候所、少々不快延引相成候得共、此段御憐赦可被下候、以上

此時吉寶三郎殿へも書状遣し、并ニ菓子遣し申候、乍序稲継川闕地高引普請料も尋遣し申候処、跡方之返事与申来候、右書状返事丁寧ニ在之候

一 筆啓上仕候、秋冷御座候得共

上々様益御機嫌能被為遊 御座恐悦至極ニ奉存候、各様愈御勇健ニ可被成御勤仕与珍重之御儀ニ奉存候、随而当三ヶ村相替儀無御座候、此段奉申上候、

一 去ル十四日希洪水ニ付、御注進奉申上候所、御承知被成下、誠不慮之水難一同難渋之趣、於

上深ク御配慮被為在、右様火急洪水ニ付、稲継村儀、諸道具中ニ者飯料之米麦迄押流候者も在之ニ付、難渋之者共へ御救之儀奉「」候処、御承知被成下、取調之上相当御救米相下ヶ候様取計可申段、奉畏候、扱御地格別之儀無之ニ付、御安心被思召候処、御存外水難ニ付御心痛被遊、外式ヶ所之内ニも難渋人之者在之候ハ、御救米被下候様被 仰聞、奉畏候

一 稲継村水難ニ付、難渋人外式ヶ村極難渋人取調申上、左之通り御救相下ヶ申候

大新屋村難渋人

一 玄米七升 源助跡 玄米四升 安「」郎跡

一同 嘉蔵 同 重吉 同 久助

一同 おてる 右米「」二斗七升

鴨野村

一 玄米四升 忠七 同 藤兵衛 同 新九郎

「」老斗式升

稲継村

一きよ 此者七ヶ年以前夫与兵衛心得方宜敷者二候所、

洪水之節水死仕、其之子共式人右きよ参人暮

居候所、当年姉十二才娘水死いたし、右きよ

ト六才之子共両人ニ相成、極々難渋之儀ニ付、

如此

一玄米七升 久兵衛 同 留藏 同 作助

一同 和助 同 佐平 同 善右衛門 同 清

兵衛

一同 甚平 同 茂平 同 新九郎 同 しか

一同 吉助 同 茂左衛門 同 久助 べ十五人

米 壹石壹斗三升 惣救米 壹石五斗式升

右之通り取調之上相下ヶ候間、此段御届ヶ奉申上候、

御承引被成下候様奉願申上候

一 先達変両儀者、西丹波・但馬境方西播州計り荒ニ御座

候由、先山津治と申方ニ而野辺の荒薄ハ 一之荒

勝ニ而、和田町内ニ而も水深き処七尺計り、壹丈位之

地堀立、御領内牧山谷杯ニ而者、山崩数多在之、六、

七尺之大木根方流、川高ク成、畑道杯又川成御制札・

御收納蔵等迄行方不知、流失之由、其外御油村圓通寺

ト申近末寺五拾余ヶ寺、遠末・孫末寺等迄二者、凡三

百寺も在之、丹波ニ而一、二之大録之所、本堂軒端迄

土砂ニ而埋、堂中へ六尺計大樹根起、岩等崩込在之、

其外寺并ニ在家土蔵・酒蔵・油蔵等、尤酒桶長持筆筒

迄其俣押流、人馬牛迄行方不知相成候次第、尤山中ニ

候得者、庭迄茂水之湛たる堂無之、両者敵敷候得共、

右様之儀在之ト者不思寄、然ル処是ハト申隙もなく、

諸所山崩ニ而一時ハ 一水馳出、尤平地トちがい山

辺ニ候得者、落流同様ニ付、聊之当リニ而水堀出来、

浅きハ式、三尺、深きハ小式丈茂堀申候、又家之建た

るま、床下五、七尺茂堀候所茂在之、希有之事ニ御座

候、中ニ茂御知行所杯者手輕ニ相済候事与難渋ながら

悦居申候、其後日之大小降続中二者、低所水腐仕、且

荒増等出来申候次第ニ付、破損所并ニ水腐場見当

ハ 一付不申ハ 一其内取調長面奉差上候、尤当年

茂当月廿二、三日頃早冷在之候得者、ハ 一可

申与奉存候、乍併何卒格別之障ニ不相成様奉祈候、此

度水難ニ付、和田様ニ者右村々大小共軒別ニハ 一甲

乙御救米御下ヶ相成、御相給稻継村へ者、為一統江与

玄米式石御下ヶ相成候、右ニ而軒別六、七升ニ相当り

候間、右之通り取計奉申上候、柏原領・三田領ニも山

崩・川切多分出来、当辺ニ茂女之步役ニおゐてハ是迄

不承候得共、普請不行届ニ付、処ニ寄候而者、男女共

十五以上六拾迄之者不残御差出普請在之候、右様被成

候而茂、迎秋迄二本出来ト申事ハ不及候由

一大新屋・鴨野土砂留普請候得者、只今御入用米何様〔一〕御下ケ相成候而茂、一時之普請ニ難相成候間、差當リ之場所而已普請致為置、跡者村方ニ而連年ニ普請為致可申心得ニ御座候、稻継村儀火急ニ水高ク相成候ニ付、川堤・橋等茂格別之破損無之候間、御安慮可被成下候一和田町抔茂深水ニ而、諸処荒所出来、尤御相給ニも在之候間、為御見舞与罷出候所、念入候様至極丁嚙ニ被申候

一夏以来方久兵衛・惣吉・多郎兵衛右三人差纏候儀、相糺候所、元来久兵衛重々不埒之儀在之候方起り候儀ニ付、同人儀別段咎可申付筈ニ御座候得共、勘弁を以差免、一同和濟為致申候、則惣方方訖書写左ニ

奉差上候御訖書之事

一大新屋村久兵衛儀、播州龍野喜代蔵与申者刀賃請戻し金、相州太右衛門祈禱料金ヲ以右賃請致可申儀、兼而久兵衛承知乍致、不都之儀申立候ニ付、無拠惣吉方ニ而取調候所、其節久兵衛方惣吉へ相渡し候一札文言之内、相州繁不行届之儀ニ付、久兵衛・繁・鴨野村太郎兵衛右三人同意与申事書加江在之、右ニ付太郎兵衛方へ久兵衛呼寄、右同意与申事書加江候段、久兵衛方不調法之旨〔一〕、又候太郎兵衛方へ書附相渡り候事起り、既ニ多郎兵衛方久兵衛相手取り、御陣屋表江願出候処、此度御取調之上、厚キ思召を以御利解被為 成下、一

同恐入自得仕候、尤久兵衛返答書之内不都合之儀在之、且又六月中拔懸ケ、大坂御屋敷様へ内訴仕候抔之儀、別段御咎メ可被 仰付所、両村御役人衆中ヲ以御訖申上、右久兵衛方惣吉江相渡在之候書附之儀、右賃請銀子等為取濟、右印書両村役人方江預り置、又久兵衛方太郎兵衛方江相渡置候書類見之、差戻しニ相成、惣方無滞和談濟相成候ニ付、右久兵衛不束之儀茂御免被成下候様奉願上候処、深キ御仁慮ヲ以御聞濟被成下、一同難在仕合ニ可奉存候、右ニ付以後惣方意趣遣恨等一切無御座候、依而之連印之書附奉差上置候、以上
文久三亥八月

惣吉

大新屋村

久兵衛

鴨野村

多郎兵衛

同村

年寄

庄三郎

庄屋甚七

大新屋村

惣代庄三郎

年寄 始二郎

庄屋 嘉七

御地頭所様

御役所

一三ヶ村共水腐ニ付、田方畝引帳可奉差上候所、洪水後引続雨中、其上冷寒強、去七月中出穂可致之所、晚稲之分尔今出穂不致、中稲此頃穂見へ候得共、実入無覚束由、大心配仕候由、乍併早稲之分ハ七、八部作二者可相成ト奉存候、右之次第ニ付未タ帳面難出来、稲継村惣高、大新屋・鴨野両村底所右三ヶ村作方早稲之分ハケ成候得共、中稲実入相分り不申、晚稲之分先皆無ト相見候由歎出候、尤書附差出候間、立飛脚ヲ以奉申上候、宜敷御含奉願上候

一大新屋村庄三郎儀、御承知之通り近年田畑荒払候ニ付、暮方相付不申、兎式角心配仕罷在候所、柏原伊勢屋佐兵衛ト申者方ニ奉公致在之、江戸産ニ而梅八与申煙艸入授り職之上手在之、然ル処伊勢屋不実ハ成者故、右梅八彼方退出致度存心在之ニ付、庄三郎方引合候所、右梅八承知致呉、依而庄三郎方内々道具立致居候、其内右伊勢屋方都合能手離相成可申様工風致在之候所、久兵衛横間方右入用

御上方相下ケ、上之御産物ニいたし、柏原差支ニ茂相成可申様致杯与、梅八方ケ様前後無構諸処ニ而口出致候ニ、伊執佐大ニ立腹致、彼是相对ニ罷来り候所、久兵衛引受顔ニハ相对及候儀、庄三郎ハ二者

不相叶由候得共、久兵衛 御上之御元職ニいたし、庄三郎杯其下職ニ相成可申様申ニ付、庄三郎儀者

御上様御聞込之事歟与 御上を恐レ無是悲久兵衛ニ相任居候所、久兵衛儀伊勢屋方へ過言之儀在之、右之次第ニ付伊セ佐大ニ腹立、柏原同心役方へ願込候ニ付、梅八彼方へ召出之上、いセ屋へ不実意之段御ハニ付、一先ッ播州北村与申所へ立退、其方ニ而矢張庄三郎仕事仕り、猶又庄三郎方奉公人へ職教へ杯為致居候所、小屋頭柏原重兵衛・惣吉内談之上、右梅八呼戻し、一端上之御趣意為相立候ハ、大新屋村ニ而職為致可申内約ニ而、惣吉方右梅八呼戻し、柏へ連行候所、乍無利先当辺立退ト申方ニ表を立、右惣吉へ御渡しニ相成、又庄三郎方伊勢屋方へ扱人差入和濟相成、昨冬方当村ニ而職相始メ候所、随分算当相立候様相成候ニ付、庄三郎大ニ悦ハ骨折可申与、漆油等多分買込仕居候所、不思儀ニ柏原表、俄ニ様子替り、去七月十八日梅八御呼立之上、右内約反日ハ繩付ニ而、但馬境江追払相成、右之次第を以村方庄三郎・惣吉へ取懸る勢相見へ候ニ付、同月廿一日庄三郎・惣吉当方へ呼出し相糺候所、其頃迄柏原屋敷御用之仕事、随而御家老方・御目附方之御具足櫃迄梅八江別ニ被仰付仕居候次第、然ルニ同人儀、

当村ニ止居ハ一段、重罪抔ト者難心得存候由、然レ共行成不相分、兩人共心配仕候由、然ル処惣吉申与者如何様相成候共罪之儀者、私共一人引受可申ト之願ニ付、右梅八儀者一条ニ付而者、惣吉引受ニ而、庄三郎方ニ者構無之訳ニ而、同人江者咎不申付、右柏原表次第柄者不相分候得共、先ッ同所江会釈之方ニ而、惣吉江相慎申付置候、右ニ付庄三郎へ者手懸リ付不申候得共、惣吉儀者柏原重兵衛手人之訳柄を申立、柏原方色々手を入、右惣吉を連歸リ可申与手強ク申聞、又惣吉事ハ梅八方重罪御ハ、其上郡中御構可被致ト之事ニ御座候得共、地頭方慎中之儀を以不相渡置候、然ル処右一条柏原表御申上ハ、不通御奉行迄、偽勝申入置、下ニ而右様取計居候ハ、御上躰方同心衆江内御叱在之候由、乍併御上之御趣意ト申上端右様相成候事故、本糺相成候得者、退役之衆中出来可申ニ付、惣吉儀先ッ小頭方江御任与申事ニ相緩ミ申候、依而四ヶ村役代与してハ組頭之者只一度先ッ託ト申方ニ而、小頭方へ遣し候由、（關外）候ハ、晴ニ落罪可致付ハ惣吉儀隱密方ニ不構、御番人職計之所ニ而相ハり候様可致心得ニ御座候、此段御承知奉願上候、誠ニ庄三郎儀立法可相成与老人大ニ悦居候所、一本程之梅八右様相成不便之事ニ奉存候、右之段申上度、如此ニ御座候、恐惶謹言

八月十三日認

上山治郎右衛門

十四日立飛脚ヲ以発ス

伊藤佐五兵衛様

秋山勝治様

浅賀蔀様

猶々当年冷寒強ク御座候得共、折角御厭御勤仕之程奉願上候

乍内分奉申上候

一 鴨野村多郎兵衛・久兵衛・惣吉取調之節、拳田村智山・久兵衛ニ引添白洲江罷出申度ト、手強ク申候得共、村辺ニ無御召無之者連出候儀不相成与村役ハ共不連来、然ル処右智山、拙家門前迄付来、大新屋役人之内下駄ニ而竅門越ハ候得者、智山見咎メ申様法外者畜生同様之ハ続様之悪口大音ニ而申、川口江届可申抔ハ得共、是迄御出役様御白洲之節ニ而雨雪候得者、拙ハ下駄ニ而茂其俛越、御陣屋ハ方草履ニ而通り来り候次第ニ付、役人共申候二者、下駄者おろか、縦此御門馬ニ而越候共、其方可構理無之ト、相手ニ不成通り過候間、無是悲歸り申候、誠ニ智山儀者悪ハヲ以人を苦メ、利通りを以難言伏者おばれ惱候ニ付、ハ恐レ成丈相手ニ不成候様いたし候

一 智山・庄三郎方江罷出申様、大新屋村役

人共之内并組頭之内累人申合セ、鉄砲ニ而智山（一）申候者在之ニ付、早々吟味致呉可申与無実之儀願出候由、然レ共証人ニ相立候者無之ニ付、受付敵不申候所、右僧鴨野村多郎兵衛・甚七兩人江対し、右様大切之儀、今晚（一）大新屋猶予難成儀、然ルニ大新屋役人取敢不申次第、言語同断也、依而同知行所之儀ニ付、鴨野村方取次呉様申候所含置候与答候由、又智山申候ニ者、拙僧何時被打殺可申茂難計、若打果候ハ、川口様江一封、京都御室御所江一封、同所町奉行所江壱封、差出呉可申与、右之通久兵衛宅へ相渡し候由、依久兵衛預り居候与申事ニ御座候、右等合点不行振舞ニ御座候、尤智山方申候事与、久兵衛取次を以申出候儀茂在之、依而村方取調見候由候得共、右様之事申候者一人茂無御座候ニ付、久兵衛江引合、其上智山江相對可及与役人共申候得共、只彼等儀、自分方外申懸ケ人々腹為立、喧咄或者立入を好候族ニ付、其尽捨置相手ニ不致方可然歟、万一理不尽申募候共、心配ニ不及旨申聞、差押置候、久兵衛儀於大新屋ニ百姓与可成無所存分哉、未タ入帳茂不致、又農業茂不致、只智山之様水を火と成し火を水与（一）成事ニ妙を得たる邪僧ニ隨身仕り候而已不成、彼僧之助力を請、渡世を送り候由之次第、久兵衛常々申候ニ者、此方共者元来勅使村稻上氏銀子御借入ニ付、川口方当地江（一）来り居候儀

ニ付、惡敷事ト在之候共、川口へ歸り、川口方龜山江送り被歸サ候計之事与、何事茂一向頓着不仕、役人を役人与不思、村方へ難題相懸ケ候儀、何共不存申候者ニ付、此上如何様之儀工風可致茂難計、前度孫九郎ト平八在役中ニ替り、此節村役人聞及奴落目ニ候得者、極々難渋心痛至極之由、内々歎出候ニ付、内々奉申上候、宜敷御高考置奉願上候

一 御收納米納升、近年御下ケ無御座、大ニ禿候間、是悲当年御下ケ奉願上呉候様、大ニヤ・カモノ両村方申出候間、何卒御下ケ奉願上候

一 七月十四日洪水ニ付、稻継方少し上三田御領分水間下村堤切、普請入用凡弍千両与申事、又和田様御仕配下西谷村与申御高百石計之所、御年貢地荒所直し入用凡百五拾貫目、又小林村同断百貫目（一）懸（一）申事、迎茂十年、弍十五年ニ者出来不申由、又播州三谷村与申所弍百石之御高ニ而、百五拾石成川原ニ相成候由、其外壱ケ村ニ流（一）二十軒、三拾軒茂在之所候由、荒数不知レ、誠（一）咄ニ勝り候次第、前代未聞之事ニ御座候、以上

一 筆啓上仕候、秋冷御座候得共上々様益御機嫌能被為遊 御座恐悦至極奉存候、各様愈御勇健ニ可被成御勤仕与珍重之御儀ニ奉存候、随而

三ヶ村一統不相替、此段奉申上候

一 先達奉申上候七月十四日稀成洪水ニ付、不慮之水難ニ付、稻継村外三ヶ村共御救米之处、難渋〔一〕取調之上、夫々相下ヶ候儀奉申上候所、御承知被成下、難在奉存候

一 右洪水ニ付、諸処大荒之儀、且其後大小雨降続、其上早冷等ニ而見留不相〔一〕段奉申上候所、御承知御承知被成下候段、奉畏候

一 右ニ付、三ヶ村方歎願書差出之儀、并ニ荒所御普請之儀、夏以来多郎兵衛・久兵衛・惣吉、差縄一条濟方之儀、大新屋村庄三郎授職ニ付、柏原表ト〔一〕儀、御收納御納升御下之儀、鴨野村土蔵御普請年延之儀、奉申上候所、御逸々御承知被成下段、難在奉畏候

一 例年御出役之所、十月上旬頃銀主御召連御下りト之御事奉畏候、其段三ヶ村江申達置候

一 惣吉儀、柏原表之所蟄居被申付候得共、大新屋村役人共方引合候所、只番人職限ニ而、隱蜜方二者差構無之所ニ而事済候ニ付、先達申付置〔一〕慎之所、御免致呉候様同村役人共方願出候間、去月十六日呼出し差赦申置候、此段御承引奉願上候

一 稻継村儀、水腐取調帳面持参仕、是悲御捨見願上呉候様申出候、右ニ付村役人老^{（サ）}人上坂候間、委細同人方御聞取可被成下候、大新屋・鴨^{（サ）}兩村低所之儀、誠ニ大水

腐ニ而、難渋至極ニ御座候得共、御高一^{（ニ）}体之儀ニ無之、低所計之儀ニ付、御陣屋細見願上呉候様申出候、右三ヶ村共水腐帳封入奉差上候間、御披見之上宜敷御差図〔一〕例年御〔一〕役十月上旬〔一〕被為 仰聞候得共、当年風雨早冷等ニ而、作方一同中節方十六、七日も達罷在候間、いつれ十月中旬方先向ニ而御発駕不相成而者、納米出来兼可申〔一〕、右之段奉申上度、如此ニ御座候、恐惶謹言

九月二日

上山治郎右衛門

伊藤佐五兵衛様

秋山勝治様

浅賀部様

一 猶々冷冷相募候得共、折角御厭御勤仕之程奉願上候取調之筋之儀者、半紙立帳ニ而奉申上候様ト之御儀、奉畏候

一 稻継村細見之儀、御高右拾石計御用捨被成下候儀なれば、私共へ被 仰付候而も治り可申候得共、左程之御〔一〕御行届キ被成兼候得者、是悲御屋敷様方御出役不被下而者、治り不申候哉奉存候、大新屋村〔一〕田路村江飛地之分、稻継村同様水湛へ〔一〕多分水腐仕、甚難渋之旨候得共、御高一^{（ニ）}体之儀ニ無之、漸式割位之儀ニ付、御陣屋細見願出候〔一〕り御座候、以上

一筆啓上仕候、秋冷御座候得共

上々様益御機嫌能為遊 御座、恐悅至極ニ奉存候、各様愈御勇健ニ可被成御勤仕与珍重之御儀（一）

随而當三ヶ村相替儀無御座候、此段奉申上候

一京都東御役所方当月六日御（一）當ニ而、大新屋村陣屋年頭百姓江御召状御飛脚到来ニ付、如何之儀哉不相分、心配仕候得共、御召ニ付柏原町友七ト申公事功者之仁相頼遣し候由之所、全ク大新屋村而已之儀ニ無之、先年伊藤様御懸リニ而、中川繁右衛門殿江御対談被成置候、御役所ニ而拝借元銀三拾貫目口之儀、嚴重御催促ニ而早々返銀可申様ト之儀ニ付、右友七方段々猶予之儀願上候由候得共、御聞入無之ニ付、漸當廿日迄之御日延申上置引取候段、三ヶ村役人共方申出候ニ付、早速三ヶ村役人共之内兩人上坂御伺之上、廻京可申段申付候得共、何分稲作取入時ニ付、大ニ（一）事六ツケ敷、嘉七ト文蔵兩人上坂為致候間、宜敷御差図可被成下候

一当月五日御認之用、稻繼村へ御引高七拾石之儀、奉畏候、大新屋・鴨野水腐御用捨之儀者、御出役之御上ト之事、奉畏候、則（一）段申達置候

一 大新屋・鴨野兩村役人共罷（一）之様水腐御引之儀、御出役之上与之御事、難在奉畏候得共、先達而下見帳

差上候頃ト者追々見苦敷相成候而已不成、其節穩ニ出在之候分も段々腐落失候ニ付、右帳面三步（一）書上在之分、皆無同様相成、其外水不付上田之分も早冷ニ而大ニ舛付薄ク候ニ付、一同人氣立、是悲一応見分之上御引願上度段申出候、如何可仕哉奉御伺候

一 稻繼村儀右之次第二付、追々存外見苦敷相成様ニ付、御引増願上呉候様申出候得共、一端員数御請奉申上候上之儀ニ付、難取次申聞置候、右之段如此ニ御座候、恐惶謹言（補注）「候得共是悲上坂之上願上度段、能々申出候間、難差許聞取置候」

九月廿二日 上山治郎右衛門

伊藤佐五兵衛様

秋山勝治様

浅賀部様

猶々追々冷氣相増候得共、折角御厭御勤仕之程奉願上候

一 大新屋村再願書奉差上候、稻繼村又候上坂之儀差留致存候得共、左候得者都而人氣 合如何与被存候間、本文之通り聞取置候、御引之儀者給々御引弁も在之候間、御出役迄二者夫々聞調置可申候間、其節御沙汰可然哉、乍恐奉存候、以上

一筆啓上仕候、寒冷御座候得共

上々様益御機嫌能被為遊 御座、恐悦至極ニ奉存候、各様愈御勇健ニ御勤仕与珍重之御儀ニ奉存候、随而三ヶ村一同不相替此段奉申上候

一 御上納金之儀、御収納米御払頃方米直段追々下落仕候ニ付、引請候商人共夫々売捌置候所入銀流、或者彼是出来ニ而金子間違延納申出候得共、嚴敷申聞漸々相調、此度金五百六拾兩植村へ上納仕候、先達八拾金都合六百四拾兩上納仕候間、此段御届ヶ奉申上候
一 寒中御機嫌御伺書状奉差上候間、御序之刻御披露奉願上候

一 十ヶ年千五百兩拝借候儀、三ヶ村共村々五百金宛御請奉申上候間、此段御承引奉願上候

一 先達中上坂之節、御厚情被為 仰聞、且忝同江御理解被成下候段、難在奉存候、右之段申上度、如此ニ御座候、恐惶謹言

十二月 上山治郎右衛門

伊藤佐五兵衛様

秋山勝治様

浅賀蔀様

猶々嚴重御座候得共、折角御厭御勤仕之程奉願上候

一 去月十九日 一橋様御着坂相成候哉、右ニ付而者御用多御配慮被為在 御座候哉与奉恐推候、乍併御夫々無御滞目出度被為御済候様奉存候

一 拝借金之内、大新屋村請五百兩之所、捌方六ヶ敷奉存候ニ付、三ヶ村ニ而積金講銀之内、利足月六朱ニ而私共預り分之処、御屋敷様ニ而御預り被成下候ハ、右此度村方江五百兩拝借金之内、村方ニ而心配相成分、私共引請可申様仕り度旨、伊藤様江御願申上置候段、いつれ来春御年頭之節御伺候へ共、右御聞済被為 成下候ハ、難在可奉存候、以上
一 胡麻二升例年之通り此時相納申候

一 筆啓上仕候、甚寒御座候得共

上々様益御機嫌能被為在 御座、恐悦至極奉存候、各様愈御勇健可被成御勤仕与珍重之御儀ニ奉存候、随而当地三ヶ村一同相替儀無御座候、此段奉申上候、右者寒中御機嫌之程為可奉窺 之各様迄奉捧愚札ヲ候、御序之節御披露之程奉願上候、恐惶謹言

十二月朔日 上山治郎右衛門

寒の入方四日メニ致を例也 有績(花押)

伊藤佐五兵衛様

秋山勝治様

浅賀蔀様

杉原認也

御表封 脇付ハ

御披露と書也

参人々御中

一筆啓上仕候、甚寒之節御座候得共、愈盛福奉謙寿候、然者先達中推参仕り存分御饗応相成、難在奉存候、扨当年御收納米代金之内、此度五百拾兩取調上納仕候間、御改メ御入掌可被成下候、過不納之儀者追而可奉申上候、恐惶謹言

十二月朔日

上山治郎右衛門

植村大蔵様

同 登郎之介様

道具屋弥助様

猶々嚴寒候得共、折角御厭御厭^{うづ}可被成候、以上

一筆啓上仕候、甚寒之節御座候得共

上々様益御機嫌能被為遊 御座恐悅至極ニ奉存候、各様愈御勇健ニ可被成御勤仕与之御儀ニ奉存候、随而三ヶ村相替儀無御座候、此段奉申上候

一当暮御收納金当月二日出ニ而金五百六拾兩、先達御出役中八拾兩、都合六百四拾兩植村へ上納仕候所、承知被成下候旨被為 仰聞、奉畏候

一寒中御機嫌御伺愚状奉差上候所、御披露被成下、難在奉存候

一道具屋出金方之儀、篤与御引合被成候所、委細致承知、

去月中大火ニ而稻荷小屋類焼、本宅向別条無之候得共、近火ニ而殊之外取込^へ 内出金六ツヶ敷、来春二月頃ニ者無相違調金御取極之由、三ヶ村役人共へ申聞候所、一同承知仕候、実ニ御骨折之功相立、恐入難在奉存候

一浅賀氏当春中方御勤番被 仰付罷在候所、御留守御人少ニ付、此度御帰府被成被仰付、当月五日御地御出立ト之御事、奉畏候、右跡御用役伊藤鱗之介様江被 仰付候旨被 仰聞、奉畏候、則別紙御書^へ 三ヶ村江相達候所、一同奉承伏候

一兵夫金千石ニ付三拾七兩之所、三ヶ村ニ而半高出金被仰付、則右割合金拾八兩式歩、立飛脚ヲ以此度奉上納候間、御改御入納奉願上候、恐惶謹言

十二月十三日

上山治郎右衛門印

伊藤佐五兵衛様

秋山勝治様

伊藤鱗之介様

猶々甚寒御座候得共、折角御厭御勤仕之程奉願上^へ 私共江御端書被成候、難在仕合奉存候

一御地出火之儀噂在之候得共、右様ニも承り不申甚た以大火之由御杯^う御難渋被遊候哉与奉察申上候、道具屋儀も本宅如何与申候得者、右金談ニも抱り可申所、先ッ

稻荷小屋位ニ而安心仕候

一 惣吉儀、明子年方為御心附与、去十一月廿六日申達候所、実ニ御宛御下ケ被成下旨、仁慮之程難在仕合、冥加至極之儀与奉恐悦、右御礼私共方奉申上呉候様、
延引此度御礼奉申上候

一 大新屋村久兵衛儀、近年上納不足追々相重り、勿論当年御上納一切不致ニ付、催促候得共、不当申立、一向庄屋宅江不罷在候ニ付、御出役中御願申上ケ、御理解被成下候得共、聊入銀不致由ニ付、又候段々村方方催促引立等二人足遣候由之所、久兵衛申ニ、用事在ハ村役人此方へ可参杯与、過言不当之申張、一円不取敢候ニ付、無例之儀ニ候得共、致方無之ニ付、村役人・組頭断事之上、同人方江罷出相對致候所、同人儀最初之内理不尽過言申張候得共、終ニ者一言之申分無之、隣家紙屋金藏罷出、久兵衛所持之品家建之外、右金藏引受大小筋立可仕筈ニ而、段々断申候ニ付引取候由、尤村方ニ而右様致置候得共
御上様ニ而久兵衛直御拝借も在之候ニ付、聊村方ニ而勝手ニ取計等ハ不仕心得ニ候間、取立之上ハ御差図願上度段届出候ニ付、此段奉申上候、宜敷御含置御差図奉願上候、以上

3

「文久四子年

大坂御船手御役所并諸役向書狀下案扣」

(表紙)

「文久四子年

大坂御船手御役所并諸役向書狀下案扣

正月吉日

上山治郎右衛門

藤原有績」

正月於大坂川口御船手御役所二年頭

一殿様江 金百匹長熨斗三本入扇子 献上

御用人江金二朱ツ、上ル、外ハなし、但御在江戸之時
ハ年始狀上ル、尤暑寒御伺書狀之振合杉原認なり

一將軍家御上洛被為遊 御座候ニ付、殿様御儀去亥年

大三十日方為御印天保山御出張被為在 御座候ニ付、

正月三日御式諸士御年頭御流盃頂戴、御演始等御延引

相成居候ニ付、拙者共江も右同様御礼御流盃頂戴被

仰付候ニ付、難在御礼申上ケ、御流れ盃頂戴仕り、御

演初仕り御酒被下難在仕合奉存候、尤其前如例拙子始

メ三ヶ村御礼申上ケ、御酒御膳被下奉頂戴候所、又右

之通り諸士同様御礼奉申上候様被為 仰付、御盃御手

伝柄ハ御炙鯛等被 下置、重々難在仕合奉存候、且御

礼之儀者御用人御目附之外ニ而初、藤田啓吉殿、浅野

(葉カ)

清之助、高「」常六、清水房之助、上山治郎右衛門、
成内栄之助、隅田兵藏、植村登郎之助、初瀬川鎌藏也

一將軍家御上洛ニ付 殿様御供被為 仰付、難逢仕合仕

候、十三日方出船、十四日曉八ツ時御本丸江登り、五

ッ時御乗船被為在候ニ付御供仕り、初夜頃伏見へ御着

ニ付同所御御役所江御供仕候、委細之儀者役向旧記ニ

載置申候

一筆啓上仕候、余寒退兼候得共

上々様益御機嫌克被為遊 御座恐悦至極ニ奉存候、各

様愈御勇健ニ可被成御勤仕ニ珍重之御儀ニ奉存候、扱

御上洛一条無滞被為 御濟、昨十六日夕刻頃目出度御

帰坂被為遊候与乍恐奉存候、誠ニ私共儀、御引廻ヲ難

逢仕合仕り、子々孫々江申伝、家切ニも相成、難在恐

悦至極ニ奉存候

一昨十六日四ツ時、京都若狭屋多郎兵衛方へ着仕り、早

速近甚始メ「」平七方へ扇子持参候所、宜敷御

礼申上呉候様家内方申聞「」、右三人共 御上洛ニ

付、此前方始終御城并ニ御諸外淀様出入家ニ付、御所

所御用多ク在之、町用等ニ而昼夜罷出候由ニ而居不申、

依而翌十七日又々参候得共、早天方出張候由ニ而居不

申、店之者申候二者、全三四日之所者迎も睨々御咄可

申上隙無覺速申候ニ付、無益ニ御入用遣捨滞留之儀も

如何存候間、委細店之者へ申聞置、全日昼頃より引取可申積ニ付、此如御承知奉願上候、尤酉戌兩年勘定書之儀者、近日可奉差上様願置候、恐惶謹言

正月十七日

上山治郎右衛門印

伊藤佐五兵衛様

秋山勝治様

伊藤鱗之介様

一筆啓上仕候、春暖御座候得共

上々様益御機嫌克被為遊、御座恐悦至極ニ奉存候、各様愈御勇健ニ可被成御勤仕与珍重之御儀ニ奉存候、随而当三ヶ村相替儀無御座候、此段奉申上候

一置振銀之内、大新屋村五石高以上ニ而弁出銀之儀、当

二月相片付ヶ候様申付候所、一統自得承伏仕候間、此段奉申上候

一赤味噌三樽、去正月廿八日送りを以本郷座へ差出候間、着之上御改御入掌可成候、尤自分ハ廿三貫樽ニタツ、廿式貫八百目樽一、都合三樽也、為念之奉申上候、此如御承知可被成下候

一浪士一条申達置候所、一統承知仕候、此段奉申上候

一久兵衛立退之儀、正月廿一日呼出し始末理解申聞、御拝借随而村方上納残銀之内江、居宅并ニ諸道具退刻御

取上之上立退申付候所、自得御請仕、弥廿三日早天出立仕候、此段御届奉申上候

廿一日退刻

右取上候品物左ニ

一居宅壹軒 腰高障子九本

一并障子 六本

一戸 三本 外ニ大しまりの戸不残

一半戸 貳本 中障子下貳本

一畳 六丈 表敷 七枚

一古筵 七枚 杉板 半間

一古板壹間 外ニ貳間、都合板三間半、尤敷板也

一小長物 壹ツ 米船 壹ツ

一二升鍋 壹ツ 少々損し在 五合枡 壹ツ

一膳二枚 少々損在 茶碗 壹ツ

一椀壹ツ つるべ壹ツ

右之通り取上ヶ、村方へ為預置候、此如御届ヶ奉申上候、宜敷御差図奉願上候

一大新屋村庄屋役之儀、右庄屋給米五石三斗之所、四石三斗嘉七江遣し、庄屋役為相勤、玄米壹石丈ヶ庄三郎へ遣し、右庄屋役筋要用而已庄三郎相勤候様申付候処、

一同承知御請仕候、此如御承知奉願上候

一鴨野村庄屋役之儀、追而御出役之上可被成段、是又達置候

一 蛭子甲山田代銀割方之儀、四ツ割ニいたし、一ツ分御陣屋へ納、跡三ツ分久兵衛跡・孫右衛門跡・重吉右三人へ割渡し可申段申付置候

一 当年宗旨帳可奉差上年番ニ付

御諱字被為 仰聞候様奉願上候

一 大新屋村庄三郎儀、孫九郎与替名仕り候間、此段御届奉申上候

一 挙田村ニ在之候三宝寺所持田讓ニ付、差縫候儀先達而上坂之節奉申上候通り、智山方内願在之ニ付、大新屋・鴨野両村役人共出勤之序内糺之上、智山呼出し申聞候次第、右地所之儀内糺候所、全ク三宝寺什田ニ而、譲り等之儀一切難相成筈之所、先住恵貫子者勿論、挙田村役人共兼而者心得可有之所、四ヶ村へ一応之念合も無之、譲り状調印相渡候段、不埒之簾ニ相違無之様聞届ヶ候間、右田地讓渡之儀者難申付旨理解申聞候所、智山致平伏、成程尤之御儀与申得仕候、誠ニ右様之儀是迄川口表并ニ当御陣屋へ願出候儀者、筋違ニ而御座候得共、此段御免可被下、全ク挙田村役人共不念方差縫候儀与自得、願下ヶ引取申候、此如奉申上候

一 久兵衛居宅代凡五百目、外ニ前書取上候戸・障子并ニ惣諸道具代凡三百目余、惣べ凡七百目余与相見へ申候、此如奉申上候

札式百目

万年二酉年農具料并ニ農業元^ノ銀之為御貸下ヶ、但御陣屋取扱銀之内かし、无無利足^{十ヶ}年^ノ済

札七百七拾貳匁四分

文久元酉年麦代之由、壹貫貳百目拝借之内、文久二戌四月差引、残銀月かけ御積金之内ニ而かし元

同三百三拾八匁八分七厘

御屋敷様ニ而御貸下ヶ分之所、文久二戌十一月御陣屋取扱銀之内ヲ以立替、秋山様御上納仕候ニ付、依御陣屋取扱銀之内^ノ貸下ニ成ル

べ壹貫三百拾壹匁二分七厘

一 銀三百四拾目計

庄屋并ニ難渋人吉助江年貢不足在之候

右之外、久兵衛ニ懸る村方損銀、上納不足銀ニ茂勝り候程之儀ニ御座候故、何卒同人諸道具并戸・障子等、何卒御憐愍ヲ以御下ヶ被為成下候様、書付ヲ以願出在之候ニ付、此段奉申上候、乍併御陣屋御貸銀多分在之候儀、いつれニ茂宜敷御差図奉願上候、恐惶謹言

二月四日

上山治郎右衛門印

伊藤佐五兵衛様

秋山勝治様
伊藤鱗之助様

猶々

前以目■番等為致罷在候所

一 大新屋村組頭多吉子、心得方宜敷仁物ニ御座候得共、去正月廿八日辰刻出火仕候ニ付、呼出し相糺候処、外方為知呉候迄、家内ニ茂存不申次第、誠ニ失火か屋ねが焼物候由ニ相違無之、尤類焼茂無之ニ付、差赦し跡為片付申候、此如奉申上候、以上

一 正月廿八日村多吉出火之所、多田村陣屋細谷三左衛門出張ニ付、礼状左ニ

一 筆致啓上候、弊子他行中昨廿八日、拙村多吉方出火之由歸陣之上届出、早速呼出し相糺候処、全ク失火ニ相違無之由、然ル処其節貴將御出張被下、御入念之御儀、且御仕配下人々江御差図等迄被下候由御願ニ而、無類焼鎮火之旨承り、安心仕候、御配慮之段大悦仕候、右御礼而已愚札ヲ以如此御座候、恐惶謹言

正月廿九日

上山治郎右衛門

有續（花押）

細谷三左衛門様

参人々御中

一 筆啓上仕候、春暖御座候処

上々様益御機嫌能被為在 御座、恐悦至極ニ奉存候、各様愈御勇健ニ御勤仕可被成与珍重之御儀ニ奉存候、随而三ヶ村相替儀無御座候、此段奉申上候

一 大新屋村蛭子甲、中間山田之売払不申而者、夫々割方出来不申ニ付、売払願出候間、此段聞届置候、御聞濟奉願上候

一 鴨野村甚七儀、相州多吉相手取り書付を以願出候ニ付、相尋見候所、尤繁御預ケ中小遣銀多分貸遣し候儀、且又一端証紙乍受取居申、返済金無之内右書付差戻候儀者不埒之事ニ御座候得共、御呼立ニ付上坂之節立替之路用金迄踏捨候様之儀者、不得其意候ニ付、右願書取次奉入 御高覧ニ候間、宜敷御取計奉願上候

一 大新屋村紙屋善右衛門并金藏儀、不一通り不埒之儀在之、去二月廿七日呼出し相糺候処、誠ニ恐入候与而已ニ而、何分委細言上不仕ニ、御糺中手鎖宿預ケ申付置候所、書付之通り兩人共病氣差起り候由ニ而、翌廿八日御糺延引願出候ニ付、難聞届段申聞候得共、何分上焦強ク、無理方引連出候共、夫々御返答得申上兼候間、是非延引願上度段申立ニ付、一日猶予いたし遣し置候所、心痛故歟実ニ大病之由ニ而、村預ケ願出候得共、聞届ケ不申、いつれニ茂召連出候様申聞候得共、又候右書付を以強而願出候ニ付、如何存候得共、不遠御出

役可被為在候ニ付、養生中村預ケ為慎置申候、何卒御出役之上宜敷御差図奉願上候

一 去戌十一月、柏原重助へ御米御下ケ之儀ニ付、大新屋村平四郎・市助兩人共不埒之儀在之候様子承り候ニ付、正月月中下坂後、村役人呼出し為相糺候処、全ク紛敷儀ニ而者無之様相見候間、差赦申候、則右書付先便可奉差上与存居候所、失念仕候ニ付、此度封入奉差上候間、御披見可被成下候

一 蛭子甲中間物買払為致候所、当地通用ニ而売上銀高六貫目余ニ相成申候、尤売払ニ付、入用銀相懸リ在之候得共、六貫五百目計ハ可在之ト奉存候、右立木売払ニ者相成候得共、自分入用木之外、代取中間敷旨申付置候、此段奉申上候

一 御陣屋御普請之儀、出来仕候得共、造作者未タ片付不申候、風呂桶茂出来申居候、此段奉申上候、恐惶謹言

三月六日

上山治郎右衛門印

伊藤佐五兵衛様

秋山勝治様

伊藤鏐之助様

猶々春暖御座候得共、折角御厭御勤仕之程奉願上候

一 当郡稲畑村酒屋金左衛門儀、酒切手与名付郡中江融通札差出罷在候、然ル処、元因州浪士之由、近年柏原町ニ而印彫渡世罷在候者在之、其者方大新屋村紙屋善右

衛門江仙過紙相頼候由之所、右紙同人手ニ而出来不申ニ付、同村同職金藏ト申者江右紙為漣、柏原印師江遣し候処、其紙を以右稲畑村金左衛門似札相拵、右為右紙代与多分ニ差越候処、其俣受取、請所ニ而遣候処、右似札露頭及懸ケ候ニ付、本人柏原印彫師家内同道致逐電候、右ニ付当村紙屋兩人共同様逃去可申様子相見候ニ付、惣吉驚き、内々右兩人留置、早速番人小頭柏原重兵衛并ニ稲畑番人政平等江相談いたし、柏原屋敷并ニ当方稲畑地頭安藤様陣屋江茂、不表立様内済取計申度段内々申出候ニ付、先ッ任其意ニ候、乍併御陣屋ニおキて茂、右紙屋其俣差置候而者、世間柄ト申御制治不相立候ニ付、本文之通り未タ筋柄不相分俣、乍糺中為養生之村預ケ為慎置候、当地儀給々入組候場所柄ニ付、右兩人本糺相成候上者、其次第柄ニ依り御手切御取計不相成申、是悲京都江差出不申而者難相済、若右様相成候而者、兩人絶家之儀者無是悲候得共、村方一同大難洪相成ニ付、大心配仕、右様取計置候、(依当)月下句迄二者御出役被成下、宜敷御取計奉願上候

一 昨戌年春以来方、柏原屋敷足立直右衛門発起、同町人住屋勘左衛門元方ニ而、其他三、四人組合在之、紙屋職相始可申与、諸道具有増出来、楮迄買込相済、当村紙漣人仮住市左衛門并ニ長二郎兩人共、内々相進め、柏原へ引寄可申内約取極り候様子承り候ニ付、右兩人

呼遣し理解申聞、自得為致、柏原表へ断為及候所、甚
た六ツケ敷候へ共、漸断相立、治り罷在候所、久兵衛
家内昨年中少々紙漉手習罷在候ニ付、久兵衛儀昨冬中
方右柏原足立直右衛門・住屋勘左衛門方へ手筋を相求
メ、昨年中右市左衛門・長二郎兩人柏原へ罷出可申所、
私共差止候儀、是を以大ニ讒告及、同人等ニ立腹為致、
又候久兵衛頭取ニ而紙屋相始メ申候、右ニ付久兵衛手
引ニ而、右市左衛門・長二郎兩人共江、無割合高給差
出し、弥去二月中柏原表へ引取可申旨相聞候ニ付、右
兩人共内々呼遣し、厚理解申聞候所、兩人共理ニ伏し
止心相成申候、依而柏原表へ段々詫申入候得共、昨年
違約之上、又候当年違変相成候而者、足立直方役儀ニ
相抱り候旨ニ而、段々理解ニ付、尤之儀而欠も在之、無
拋長二郎一人奉公同用ニ而差遣し申候、依市左衛門儀
者当村ニ止置候、既ニ大新屋紙屋中不残退散難計次第
ニ相成申候、右様相成候而者、世間柄与申甚心配仕候
得共、右似札一条内済相成候ハ、ケ成相治り可申哉
ト奉存候、右久兵衛儀、長見村産大屋満真孫助与申、
近年龜山様江取入、昇士官格ニ常々絹布着用身分ニ相
成候所、昨冬中惡計露顯、逃歸り候旨を以、久兵衛之
親分ニ頼ミ、右柏原紙屋相始メ罷在候ニ付、いつれ一
花為咲可申候得共、長クハ難保奉存候、以上

善左衛門・金藏方差出候書付之写左ニ

乍恐奉願上候口上書

一当村方善右衛門・金藏兩人儀、心得違之儀在之趣達御
聞ニ、当廿七日御召出し之上被為在 御糺候得共、事
柄言上不仕ニ付、御糺中手鎖宿預ケ被為 仰付、奉御
請、慎罷在候所、善右衛門儀、同日七ツ頃眩暈差起り、
夫方熱発夏中同様、且又金藏儀、当月廿日前方風熱内
身ニ入、少々腹痛致居候所、廿八日卯ノ中刻方追々腹
痛甚敷、立居難致、尤兩人儀、同日早天方御召出し御
嚴重御調可被 仰付候所、右之次第ニ付、御猶予御願
申上置、医師呼寄為相見、服薬候得共、其驗無之、何
分御手鎖中ニ而病体相分り兼候得共、兩人共大病ニ付、
其俣ニ而者養生難行届様申聞候ニ付、一同心痛仕り、
番人等困入候次第ニ付、格別之御憐愍を以、病氣養生
中手鎖御免、村方へ御預ケ被為 成下候様奉願上候、
右御聞届ケ被為 成下候ハ、広太之御慈悲難在仕合
冥加至極ニ可奉存候、以上

本人

善右衛門

親類

久兵衛

組頭

多吉

本人

文久甲子二月

御地頭所様

御役所

金藏

付添

又七

組頭

兼帶 始二郎

惣代

孫九郎

年寄

始二郎

庄屋

嘉七

一筆啓上仕候、薄暑之節御座候得共

上々様益御機嫌能被為遊 御座、恐悅至極ニ奉存候、各様愈御勇健ニ可被成御勤仕与珍重之御儀ニ奉存候、随而三ヶ村一同相替儀無御座候、此段奉申上候

一昨亥年御勘定目録、私共方式通、三ヶ村方六通、跡八通奉差上候間、御披見可被成下候、御改之上相違無御座候ハ、御裏印奉願上候

一宗門御改帳、三ヶ村方三冊、私共方一紙奉差上候間、宜敷御取計奉願上候

一大新屋村紙屋一条奉申上候、右三ヶ村取^(ママ)謗ニも相抱り
ハ 御出役前内済取計置可申様ト之御儀、奉畏候

一稻継村川除御普請帳、封入奉差上候間、御披見可被成下候

一追々農事闇相成候間、願^{可成者}クハ早々御出役被成下候様、奉願上候

一大新屋紙屋善右衛門・金藏儀、先達中奉伺候所、御出前内済仕置候様被 仰聞候ニ付、早速惣吉呼出、柏原表内済方為致、稻畑儀茂故障無之様為取計置候所、右善右衛門・金藏儀茂病氣全快ニ付、呼出し相糺候所、全ク柏原新町ニ借宅罷在候彫物師定助ハ 取計、仙過紙漉遣し、為右紙代与稻畑村金左衛門酒手形偽札差越候を無ハ 請取、外方へ遣ひ候而已ニ而、右定助江荷胆等之儀者毛頭覚無之旨、返答及候ニ付、猶又理解相糺候得共、右之趣ニ相違無之与申候、乍併本人柏原定助召捕不相糺候内者、善右衛門・金藏申状証拠ニ不相立、依^(兩人)兩人儀此上拷問不致而者難相成、若夫ニ而茂不相分候得者、本人定助罷出候迄入牢申付可置旨、理解仕候所、右様相成候而者、本人儀者無是悲候得共、難洪人之儀ニ付、妻子共飢死及候ニ付、何卒憐愍致呉候様、村役人方段々願立候、尤本人定助逃去居候得共、存命ニ而可在ハ 如何様之儀ニ而不都合之儀

出来茂難計、依〔一〕濟共不致、只御憐愍を以、此上御糺之儀御延引与申簾ニ而、一ト先相治、夫々書付取置申候、此段御承知奉願上候

一 鴨野村西方谷亡者敷堀隠亡之儀、其類法但馬ニ式ケ村計在之候所、右村一条笥与改名相成候ニ付、是迄重縁之方ニ而茂、村方故障申ニ付、表向突合差支、右ニ付新規取組一切不致呉、甚た難渋ニ付、改名之儀近年村役人迄度々願出候得共、不取敢置候之所、実々難渋之次第相違無之ニ付、右隠亡を一条笥与改名之儀、御聞濟被成下候様、五ケ村役人共方書付を以願出候ニ付、取調候処、改法ニ者候得共、本山替ニ而者無之ニ付、本山京都空野寺ニ茂承知之事ニ付、外方故障出来可申儀聊無之ニ付、右御聞濟被成下候ハ、西方谷永統可仕候間、何卒御取成を以、右御聞濟之程奉願上候、一 鴨野村庄助方借財多分出来ニ付、地角力興行願出候間、差赦申候、此段乍序御届ケ奉申上候、恐惶謹言

四月九日

上山治郎右衛門印

伊藤佐五兵衛様

秋山勝治様

伊藤鱗之介様

薄暑御座候得共、折角御厭勤仕之程奉願上候

一 大新屋村始二郎儀、寝伏而已ニ而者無之候得共、氣病ニ而、追々差重ク年寄役儀勤リ不申ニ付、病中休役願

出候間、此段御聞濟奉願上候、然ル所、跡年寄役之儀者、孫助方外ニ無人候得共、同人儀御承知之通り不才ニ付、平八後見ヲ以、右始次郎休役中孫助へ年寄役被為 仰付候様奉願上候

一 大新屋村善右衛門・金藏兩人儀、柏原・稻畑にも穩便被相好候様子ニ付、本文之通り一略相治メ申候、然ル処、近年佐治似札三品、龜山札・三田札等ニも偽札致出来在之、札分り処も在之候得共、未々相知不申分、右柏原定助、偽札地紙善右衛門・金藏方遣し候惡評高ク候ニ付、いつ方茂疑念相懸リ、惣吉方迄諸処方尋等在之ニ付、相調候所、外々之儀者聊覺無之趣ニ候得共、右之次第ニ付、諸人疑念相暗不申、心配仕候、雖然、今更表向出他ト申事〔一〕不相成候得者、村方含ニ而、両三年他拵為致、弥故障無之候得者、引戻し可為申、若此上難題相懸り候様子なれば、破帳之簾ニ取計候方、如何御座候哉、乍極内御窺奉申上候、乍恐早々御差図奉願上候、以上

一 筆啓上仕候、向暑之節御座候得共

上々様益御機嫌能被為遊 御座恐悦至極奉存候、各様愈御勇健ニ可被成御勤仕与珍重之御儀奉存候、随而当三ケ村相替儀無御座候段、奉申上候

一 去ル四月中伊藤御氏様御出役被成下、御勞煩之御事奉恐察候、乍併御夫々御用向無御滞相濟、廿六日御免駕、

廿八日目出度御帰館被為成哉与奉恐察候

一当地日吉山王社江御奉納猿之儀ニ付、御地佐吉江添状之儀、乍延引封入奉差上候、恐惶謹言

五月二日

上山治郎右衛門

伊藤佐五兵衛様

秋山勝治様

伊藤鱗之介様

猶々向暑御座候得共、折角御厭御勤仕之程奉願上候

一隱蜜^{ヒメ}方惣吉儀、分限不相応大借出来ニ付、退役仕り度段、去四月廿一日孫九郎を以願出候得共、当春方玄米三俵ツ、被下置候様、昨冬中被 仰渡茂在之次第、其御恩沢厚ク相心得、精々勤切相励ミ可申所、無其儀多借ニ付退役とハ、右御下ケ米不足ニ相心得候様ニ相聞江、心得違之事ニ候、得与理解候様孫九郎江申付置候所、同日昼後、惣吉罷出、右孫九郎方願之儀直ニ相尋候ニ付、右之次第猶又得与理解申聞候所、惣吉申候ニ者、私儀誠ニ大借出来ニ付、諸処方追々敷敷催促在之、最早猶予断等、申方思案尽、甚心痛仕罷在候旨、一図ニ申立候ニ付、私共方申聞ケ候ニ者、其方儀最早番^{ハカ}職退役いたし候得者、自分不働而者渡世六ツケ敷候、乍併隱蜜方与申、夫程之用多与申ニ者無之候得者、内職を始メ渡世可仕、借財之儀者、世話人を頼ミ、有体を申片付可為致、其内又々法立茂出来可申敷与理解申

聞候所、自得之様子ニ而引取、其後何等之儀茂不申出候間、御出役中ニ茂言上不仕、差置候得共、右願方は迄ニ事替り、不審ニ被存候間、伊藤様御引戻り後、早速極内取調居候所、未々委曲不相分候得共、挙田村智山ニ内々心を合セ、近頃工風を以金銀を望ミ候様子ニ付、無夫与理解申聞候得共、止心無覺束、心配仕候、委細之儀者追而取調、御注進可申上候、以上

一筆啓上仕候、甚暑之節御座候得共

上々様益御機嫌能被為遊 御座恐悦至極奉存候、各様愈御勇健可被成御勤仕与珍重之御儀ニ奉存候、随而当地三ヶ村相替儀無御座候、此段奉申上候、然者、永々御船手無御滞被為在 御勤、御立派御退坂、御道中無御滞、廿一日頃 御帰館被為在候哉与、目出度奉恐悦候、誠ニ御出帆前打続キ雨中心配仕居候所、天氣立直り、御道中御都合能奉恐悦候、乍併暑炎甚敷、御撫々御辛勞被為成候哉与奉恐察候

一京都住倉御役所江罷出、上田勘介殿江致対面、仰之通り挨拶申述、金二百匹差出之所入念候次第、此儀^ハ外取扱候役人在之候間、其方江披露可及旨被申候、此段奉申上候

一長州方昨年中何敷京都江願立在之候由之所、御返答無之二付、精兵千四百人計、京都并ニ近辺諸所ニ致屯、

右御返事押而承り度段申立、次第ニ寄如何様之乱荒難計様子ニ付、京地老幼立退之御触在之候嚙、尤長公命ニ而者無之由候得共、諸所御大名追々御登り被成候、大坂御引取り誠ニ御幸福之御事与、三ヶ村一同恐悦罷在候

一 京都東御役所拝借銀之儀ニ付、六月初旬又々丹州江飛脚御差出在之、此度者別段嚴敷仰立在之候ニ付、中川三九郎方江参り相願候処、同人方ニ茂甚嚴敷被申候得共、段々相願置、又候三ヶ村役人共を以、御役所江書付を以爲致歎願、漸十一月、元銀之内江沓貫四百目、利足之内江百五拾目相立可申筈ニ而相治り、引戻り申候、尤中川氏方年長之儀者、当時御聞濟難相成、御飛脚度毎、村役人を以、品能歎願書差出之方可然与被申候

一 大新屋村植付之儀、御在坂中御届ヶ奉申上置候通り、度々洪水ニ付、数十ヶ年無之大延引罷成在之候所、漸当月十二日植仕舞申候段届出候、此段奉申上候、右洪水ニ付、荒所出来之儀、先達御届ヶ申上ヶ置、引取後早速見分仕候所、殊外大荒ニ而、辻茂御普請難出来場所茂在之、心配仕候、いつれ当十一月、道具屋出役之節、談事之上委細植付方其節可奉申上候得共、右之次第乍序奉申上候

一 御預り金之儀、帰邑早速夫々身元賃地等、吟味之上分

限ニ応シ分預爲致、猶又数通書付取之、御陣屋ニ納置候、且表向者大新屋村上山治郎右衛門・孫助・嘉七右三人ニ而三百三拾四両、鴨野村弥太郎・嘉七兩人ニ而三百三拾三両、稻継村庄三郎・新藏兩人ニ而三百三拾三両、都合千両御預り証文大坂御用場へ差出置候、此段奉申上候

一 扱、御帰館後御夫々御用向御繁多之御事与奉恐察候、乍併、追々御片付相成候ハ、御安慮可御成与奉恐悦居候、右者御道中御機嫌之程奉伺度、旁愚札を以如此ニ御座候、恐惶謹言

六月廿四日

上山治郎右衛門印

伊藤佐五兵衛様

奈浦岡右衛門様

秋山勝治様

伊藤鱗之介様

浅賀部様

猶々嚴暑之節御座候得共、折角御自愛御勤仕之程奉願上候、扱御在坂中、不御一通り御厚情相成、殊ニ先達中全ク御引廻を以、私共江結構被爲 仰付、難在冥加至極奉存候、帰宅退刻、亡父陣前江申聞候、定〔 〕方大悦可仕哉与、同性一統奉恐悦候、猶此上不相替御憐情之程、伏而奉願上候

一 伊藤御大老様御事、御退坂之程少々御不例被為在候所、別而暑氣甚敷折柄、乍乱心傷仕罷在候、乍併、御道中無御障御帰府被為成候哉、末筆二而奉恐入候得共、右御機嫌之程奉窺 之、此如二御座候、以上

一 筆啓上仕候、甚暑之節御座候得共

上々様益御機嫌能、御道中無御障被為在

御帰館、恐悦至極二奉存候、随而各様愈御勇健二被成御勤仕珍重之御儀与奉存候、然者御退坂後、炎暑甚敷、長途御嘸々御勞煩之御儀奉恐察候、乍併、御安全御帰館被為成候哉与奉存候、右者御機嫌之程為可奉窺 之愚札を以如斯御座候、恐惶謹言

六月廿四日認

上山治郎右衛門

有績（花押）

目附役

藤井小善様

静間光介様

参人々御中

杉原認

猶々、嚴暑御座候得共、折角御自愛御勤仕之程奉願上候、長々御厚情相成、不淺難在仕合冥加至極奉存候猶不相替御深情之程、奉願上候

一 御堅息様方江別段書状可奉差上筈候得共、乍恐宜敷御伝達奉願上候、以上

右同文言、猶々八時候而已二而、給人格藤田啓吉殿江遣ス

一 筆致啓上候、甚暑之砌御座候得共、愈御勇健可被成御勤仕与珍重之御儀二奉存候、然ハ先達御退坂後炎暑甚敷、殊ニ長途御嘸々御辛勞之御儀、奉察痛候、乍併御安全御帰府被成候哉与奉存候、右者御機嫌御伺申上度迄如此御座候、恐惶謹言

上山治郎右衛門

有績（花押）

御近習

浅野清之介

清水房之介

長谷川鎌藏

中小性

右三人江連名二而一封 猶々ハ時候而已

御近習

中小性

一 右同文言 高橋恒六 成内栄之助 御勝手役也

右兩人連名、時候并家内へ添筆いたす

一 右同文言 中小性

植村登郎之介 猶々時候而已

一 右同文言 中小性

隅田（ハ） 猶々事項而已

一 右一段（ハ） 文言

中川萬介 御徒士ニ候得共、至而拙子江心節致吳居候ニ付、如此

右之内江戸座之人々江者、帰府・帰館与書、又大坂ニ而御召抱相成候人ニ者、着府与認メ置候、尤右者、いづれも入魂合ニ付、右様書状遣し候得共、魂意ニ不非者、御用人以下江者、遣スニ不及事也、若此後京坂辺江御勤ニ被出候共、日頃出動入魂ニ不相成方へハ、遣スニ不及、併外遠国ニ而も、若御出張相成候節ハ、御用人御目付迄ハ書状差出スへし、併御目付之名前不知位之事なれば、御目付ニ而も遣スニ不及、御用人限ニ而（一）

一筆啓上仕候、甚暑之節御座候得共

上々様益御機嫌能、御道中無御障被為遊 御帰館、恐悅至極奉存候、各様愈御勇健被為成御勤仕珍重之御儀ニ奉存候、然者、御退坂後暑炎甚敷、御道中御嘸々御勞煩之御儀奉恐察候、乍併御安全御府着被為在候哉与、各様江奉捧愚札候、御序之刻宜敷御披露奉願上候、恐惶謹言

六月廿四日

上杉原認

上山治郎右衛門

有績（花押）

伊藤佐五兵衛様

秋山勝治様
伊藤鱗之介様

参人々御中

一筆啓上仕候、甚暑之節御座候得共
上々様益御機嫌恐悅至極ニ奉存候、各様愈御勇健ニ可被成御勤仕与珍重之御儀ニ奉存候、随而當三ヶ村無別条、此段奉申上候、右者暑中御機嫌之程為可奉窺之、各様迄奉捧愚札候、御序之刻宜敷御披露奉願上候、恐惶謹言

土用入方三日メ日当

六月十八日

上山治郎右衛門

有績（花押）

伊藤佐五兵衛様

秋山勝治様

伊藤鱗之介様

参人々御中

杉原認

表抱ニ者披露卜書也

一筆啓上仕候、甚暑之節御座候得共

上々様益御機嫌能被為遊 御座、恐悅至極ニ奉存候、貴方様愈御勇健ニ可被成御勤仕与珍重之御儀ニ奉存候、随而當三ヶ村相替儀無御座候、此段奉申上候
一殿様御儀、首尾克御退坂、御道中御都合能、最早御帰館被為在候哉与御同意奉恐悅候

一 去ル五月、田植前々大雨降続、度々洪水ニ付、大新屋村低所植付等不相成、前代未聞大延引罷成候処、漸当六月十二日植付相片付申候、右之次第ニ付、字松田ト申所堤切在之、夥土砂入場所出来、御普請自力ニ不及旨ニ而、帳面書付等差出候ニ付、見分致見候所、如何ニ茂普請方心配いたし候、いつれ当冬御出役御見分被下候上、御談可申上、此段御承知置可被下候

一 江戸行書状壺封ニ入差上候間、御達可被下候

一 京都東御役所ニ而拝借銀之儀ニ付、四月初旬御飛脚到来ニ付、五月前村役人一人為差登、田植後迄猶予いたし置在之候ニ付、拙者共先達帰国之節廻京、右御組同心中川三九郎殿方江参、森本氏江談事置候通り、菓子料持参相願候所、此度儀者別段嚴敷、又々当初旬丹州江飛脚差出在之候次第ニ付、甚六ツケ敷候得共、段々委細申込候所、いつれニも村役人一応御役所へ差出可申様内意ニ付、其旨ニ而村役人を以歎願為致候所、同氏骨折ニ依、十一月元銀之内江沓貫四百目、利足之内へ百五拾匁相立可申筈ニ而相治申候、尤同氏内意ニも、此後逆も催促不致年延与申事、当時柄之儀者、諸貸付口々共御聞濟者難相成、依而御飛脚御差出、每村役人を以程能歎願書差出候旨、可然与被申候間、其旨森本殿へも宜御伝達置可被下候、右之段申上度、如此ニ御座候、恐惶謹言

六月廿四日
植林太蔵様

上山治郎右衛門印

猶々炎暑難絶候得共、折角御自愛御專一願度奉存候、乍末筆御館内御一統様江宜敷御鶴舞奉希候、扨登郎之介様事御出府之所、誠ニ甚暑ニ付、御道中嚙々御辛煩被成候哉与奉察痛候、乍併、最早無御障目出度御着府被成候哉与奉存候

一 大新屋村・鴨野村、外ニ御他領式ヶ村、右四ヶ村番人、大新屋村仮住惣吉儀、近年御取立ニ寄、隱蜜方兼役被仰付罷在、同人儀究竟之悴兩人在之候所、一人茂家名相続不相成、剩長子心得方不宜、當時他出致在之、然ル処、長子良助儀、惣吉愛子之所、右之次第惣吉最早年五十二及、無妻与申、相続人も無之、旁心痛之余り致狂気候哉、諸品ニ而法外之儀申立候由、乍併拙者共、役先江向候儀者無之候間、其俣差置在之候得共、隱蜜御用之儀者余り不申付、見合置居候、右者乍序御含迄ニ奉申上置候、以上

七月六日御認之御状、同日十三日到着候所、拜閱

一 筆啓上仕候、残暑難絶御座候得共、上々様益御機嫌能被為在 御座、恐悦至極奉存候、其元様愈御勇健被成、御在務珍重之御儀奉存候、随当

地三ヶ村相替儀無御座候、此段奉申上候

一 殿様益御機嫌克、御道中無御滞去ル六月廿三日夕御帰府被遊候趣、江戸表方御発状、七月三日昼時頃坂着之旨御申越、難在安心恐悅至極奉存候、依而恐悅為可奉申上、三ヶ村方惣代一人御用場迄差出可申様ト之儀、承知仕候、右二付、私共方恐悅書状迄通差上候間、御達可被下候

一 先便申上候京都公金之儀、去ル五月霖雨ニ付植付延引、且土砂入場所之儀申上候所、御承知被成下候段、再答ニ付略ス

一 御用場御取建御出来ニ付、去ル六月廿一日吉辰ニ付、御移徙御祝式相調候段、御へ越、目出度奉恐悅候、右ニ付御用場御印判御出来之旨、承知仕候

一 江戸行愚状之儀、御可被下之儀、忝奉存候

一 六月三日方潤無之ニ付、大新屋・鴨野両村儀、田畑共大ニ旱魃ニ付、当初旬方両度歎願申出、勿論郷内村方等、日々重願雨乞、日夜無怠懈抽丹誠候由候得共、更ニ無其驗、昌作ハ勿論、田面ニ而も水懸り悪敷、端々九步枯稻同様之所も出来在之、誠ニ難渋心配之旨、何卒上ニ而雨乞致呉候様、段々歎願出候、尤柏原様杯ニも、先達方雨乞被成居候間、当十七日未ノ刻方十八日朝迄、山王坊ニおいて拙者并ニ三ヶ村役人共、月待兼

居籠り等仕、猶同坊法印を以祈念為致申候、此段奉申上候、宜敷仰立奉願上候

一 稻継村新藏養父新十郎儀、去ル六月十九日夜致死去候ニ付、翌廿日届ケ出候、則其旨盆前御届可奉申上候所、失念仕、乍延引此度御届ケ申上候、右二付、同人儀差控居候所、当七月十八日忌明仕候旨届ケ出候、此段御届申上候

一 右新十郎事、度々献金も在之、名字帶刀御免被為、仰付置在之候所、前文之通り相果申候ニ付、右同様養子新藏へ御免被為、仰付置候様、書付ヲ以願出候ニ付、取次奉申上候、宜敷御取成を右御聞濟相成候様、奉願上候、恐惶謹言

七月廿一日

上山治郎右衛門

植村大藏様

猶々、当年ハ別而暑氣甚敷候得共、御館内御揃御安健御座候哉、奉訊問候、当辺儀中暑ニ而病人多ク、拙子儀も去六月下旬方少々不快、盆前三日計寝伏候得共、強而服薬候所、此頃ハ九步全快相成申候

一 六月三日方照上り、尔今潤無之、心配仕罷在候、尤大新屋・鴨野両村儀、先年之様溜無之候得ハ、最早過半枯稻同様之場所も出来可在之所ニ候得共、愚父共代々至り右両村共、夫々溜地出来ニ付、本文之通り水懸り悪敷場所々々枯稻同様之所も出来候得共、未タ一体之

愁ト申ハ忝刻位之事ニ御座候、併今方五八日も照拔候ハ、多分早損可及ト心傷仕罷在候、急キ潤奉祈念致候、右両村儀貴所様御高風、随而拙子骨粉を以、此上溜地出来為致、後世早損之愁無之様致度奉存候、以上別「」以奉申上候、此度為恐悦、三ヶ村惣代を以、一人御同所迄為差登可申本意之所、幸孫九郎登合候ニ付、御内慮ヲ以別段上坂之簾ニ而、御勘弁被下候旨、三ヶ村一統難在恐悦仕候、乍内分私共方宜敷いづれ申上呉候様、申「」候、此段奉申上候

一 隱蜜方惣吉儀、御含迄ニ内々奉申上候所、御報之旨承知仕候、遷路之所

一 「」月初旬方於東国ニ、水戸浪士及乱戦候由候得共、未タ実否不承申、且此頃京都大変之由、昨夜承り驚入、御地之程如何哉心痛仕故、急御伺申上候

一 但馬銀山昨年浪士一条治り居候得共、又候再乱難計、引続キ丹州江乱入之取沙汰在之ニ付、織田ニも深ク御心配被成居候、右ニ付、奉行役人方迄菓子料持参、右御挨拶申出置候、此段御承知置可被下候

一 当地儀、若乱騒出来候共、当陣屋手切之防方不及身力ニ、依柏原屋敷相頼置候而者如何御座候哉、御相談申上候、扨、当陣屋付法被忝枚も無之、若右様之儀出来ニ而、人足差出候節、無印ニ而者不都合候ニ付、法被拾枚計り与、晒布ニ蛇の目付たる手拭三十筋計も拵へ

置、願卷ニ而も為致差出候而者如何御座候哉、御伺申上候、宜敷御差図可被下候、以上

京 廿八日出

一 筆啓上仕候、残暑難絶御座候得共、愈御壮秀奉恐候、然者去ル十九日、御地変事出来、且大火災之由、廿一日午時頃承候得共、委細不相分候ニ付、諸所ニ而為聞合候所、如何ニも珍事出来、右ニ付、洛中七、八歩焼亡之由噂区驚入、大ニ心配仕り候、翌廿二日曉寅之刻方飛脚差出候所、「」ニ而高評乍承り、同日七ツ頃、老の坂迄右飛脚罷越候所、諸所御出張嚴重通行六ツヶ敷、猶又京地へ返候儀、覺語不極而者難被行抔申者在之候由ニ而、恐怖候哉、得参不申、廿三日立歸り申候、誠ニ心配之無甲斐、残念奉存候、乍併堀川方西之方無難之由承り、大ニ安心仕候、右ニ付延引相成候得共、御機嫌御伺申上度而已、書中を以如此御座候、恐惶謹言

七月廿八日 上山治郎右衛門

近江屋甚兵衛様

同 新七様

同 平七様

猶々、右騒乱之節者、必至御配慮被為成候哉与奉恐察候、乍併御無難ニ而、目出度恐悦奉存候、以上

八月（一）日

一 筆啓上仕候、秋暑未々難絶候得共

上々様益御機嫌能被為遊

御座、恐悦至極ニ奉存候、（一）様愈御勇健ニ可被成御勤仕与珍重之御儀奉存候、随而当地三ヶ村相替儀無御座候、此段奉申上候

一 早魃之儀先便奉申上候、其後矢張潤無之、必至難洩奉申上候ニ付歎願申出候、依而去ル七月廿五日、日吉山王社江諸寺院招請、為雨乞之大般若転読為致申候、此段御届申上候

一 右様希成大早魃、最早二百十日及候ニ付、此後潤在之候共、時節相遅レ候得者、いつれニも御細見不被成下而者相成間敷、右御含願上度旨書付差出候ニ付、取次奉差上候、宜敷御計可被下候

一 去ル五月洪水之節、字松田土砂入荒所出来之節、川堤切所堰留入用、大新屋・鴨野・北山、右三ヶ村ニ而、凡式貫五百目計相懸り、難洩ニ付御助成願出候間、願書封入差上申候、宜敷御取計可被下候

一 鴨野村西奥土砂留、昨年中洪水ニ付、大崩罷在候所、当五月洪水之節、川々江流出土砂浚入用、多分相懸り候ニ付、御助成願上度旨、并ニ当年柄ニ付、御收納蔵

立替、明年迄延引願出候、則願書封入奉差上候間、宜敷御取計可被下候

一 先便申上候稻継村新蔵方差出候願書、取急キ封落候間、乍延引此度差上申候、御入掌可（一）、右之段申上度此如ニ候、恐惶謹言

八月二日

上山治郎右衛門

植村大蔵様

猶々、去ル七月十九日、廿三日頃、大ニ御心配御騒被成候得共、御無難ニ而目出度奉恐安候、以上

一 筆啓上仕候、秋冷相催御座候得共

上々様益御機嫌能被為在 御座恐悦至極ニ奉存候、貴方様愈御勇健可被成御勤役珍重之御儀ニ奉存候、随而当地三ヶ村相替儀無御座候、此段奉申上候

一 大新屋村惣吉儀、病氣ニ付休役願度段、当月八日庄屋嘉七方書付差出候間、取次差出可申与預り置候所、翌々十日鴨野村甚七罷出申様、惣吉私方へ参り、昨年五郎右衛門一条ニ事寄、相州多右衛門儀ニ付、同村多郎兵衛・弥太郎親子不行届之儀在之候様故障申懸ケ、心配仕候趣内分局出、其後廿二日甚七・庄三郎罷出、右一条書付を以願出候ニ付、早速鴨野村役人并ニ多郎兵衛・惣吉等召合セ可申所、右惣吉儀、狂気同様ニ而、何等理解申聞候而茂聞分ケ可申体相見不申、未不召合候得

共、外方方内々聞調候処、相州一許^⑤ニ付而者、多郎兵衛不実意之儀茂在之候得共、最早事濟候上之儀、且又五郎右衛門一条儀者、入用差遣し候得者可相濟儀、然ルを彼は申廻し、相分り候儀を片付不申、日々村方江参り、衆人を持遊候儀、不埒之次第、右利悲者格別病氣届置、無間合右様之次第、不応其意ニ、言語同断^⑥、依而呼出し糺之上、弥重罪極り候ハ、入牢歟立退ニ而茂可申付歟、但惣吉方願立茂在之候ニ付、任其意ニ退役為致可申哉、御相談申上候

一 稲継村儀者、昨年大水腐ニ而、過分之御引、御掬米等被下候得共、当年儀大豊作ニ而、安悦仕候

一 大新屋・鴨野両村儀、早魃ニ付、先達中願面差上置候所、当月三日小夕立、八月中雨在之候ニ付、夫より之早損相止候得共、潤時節遅^⑦レニ付、見直候迄二者無之、畑作者勿論、田方水懸り要敷場所々々皆無同様、其外大二損毛相立、猶又晚稻之分、当月初旬出穂可申順当之所、漸此節花吹候次第ニ付、毛付之程相分り不申、其内帳面可奉差上候間、御用場御細見ニ而も願上度申出候、尤其前、拙者為心得抜かけ内見分致見候所、尤畑方者勿論、田方端々皆無同様之所在之、其外右ニ順シ候得共、上田之分格別之儀無之処茂在之、依而村役人共江、近来御省略中其上当年殿様御帰府ニ付、御臨時御入用多分相懸り在之候得者、

縦御細見相成候共、是迄振合之御引等者御行届キ被成間敷、且又御細見相成候得共、是迄振合之御引等者行届キ被成間敷、且又御細見相成候得者、村方ニ御多分入用相懸り可申儀ニ候得者、御出役之節、可成御引等御願可申上遣候間、其心得ニ而一同相治り候様取計可申置旨、理解申聞置候間、此段御承知可被下候、恐々謹言

八月廿二日

上山治郎右衛門

植村大蔵様

猶々、去ル戌年春、隱蜜方惣吉居宅普請之節、入用之内少々者惣吉足銀も可在之候得共、銀三百目御下ケ置在之候得者、家代之儀者十分在之候、然ル処、惣吉若退役候へ者、右居宅御取上ケニ相成候哉、但無役ト一端御下ケ切相成居候儀ニ付、同人勝手ニ為引取可申哉、御相談申上候、右同人一条宜敷御差図可被下候、右居宅御取上ケ相成候ハ、其旨別紙御書付御越可被下候、以上

一 惣吉方差出候病身退役書付写左ニ

乍恐奉差上候歎願書

一 (マヽマヽ) 私儀、厚以思召穩蜜方御用被為 仰付、難在仕合奉存候、乍不調法相勤罷在候所、近年追々病身御座候間、御憐愍以暫之所休役御聞濟被成下候ハ、広太

之御慈悲、何卒右之趣御聞濟被為成下候ハ、難在仕合ニ奉存候、以上

大新屋村

隱蜜方

惣吉印

御地頭様

御役所

乍恐奉愁訴候口上書

一去年来、村方五郎右衛門儀、当国於多喜郡不宜儀相働候ニ付、御心配相懸ケ恐入奉存候、右ニ付、其節惣吉彼是世話仕り候ニ付、右五郎右衛門跡のぶ方方早速挨拶為致可申所、惣吉方方事済之儀、并ニ入用之儀不申出、旁右挨拶延引相成居候所、右惣吉儀、長々四ヶ村番人職相勤居候得共、組中一統不請ニ候哉、扶持方米等追々薄ク相成、右ニ付大借相嵩、難勤存候哉、退役願出候ニ付、去ル七月、四ヶ村談事之上退役申付候、然ル処、当八月十日頃、惣吉罷出申候ニ者、右五郎右衛門儀ニ付、入用差出シ延引相成候段、村役人不相濟候杯、其外数々故障ケ間敷儀在之候様申出候ニ付、當時下役帶兼田路谷屋、右両村番人呼寄、右惣吉心底聞糺呉候様頼遣候所、惣吉儀申候様、右者五郎右衛門一条而已ニ無之、相州太右衛門一件茂在之候間、一連事

済候様取扱呉候ハ、御任セ可申与返事候得共、相州一儀不相弁申ニ付、右番人兩人共、自力ニ不及旨ニ而断申出候、依而村方組頭之内、兩人下方之者一人、都合三人差遣し、右五郎右衛門入用之儀、何程二而も相懸り候分書付差出候ハ、相渡可申、右相州一条之儀者、村方ニ不存申、多郎兵衛殿江小前ニ引合可申旨申聞候得共、右一緒之済方ならてハ得承知不致杯与、難題申掛ケ候ニ付、甚た心配迷惑奉存候、右ニ付、多郎兵衛方へ茂談事仕候所、右相州一条之儀者、去ル亥年四月御呼立ニ依、繁并ニ私共稻継庄左衛門杯上坂之上、厚キ御憐愍を以、御赦免被為 成下、其後多吉当地へ下り、夫々無滞御事済相成候ニ付、一同故障無之様存居候所、又候昨亥年夏中、惣吉方意様ケ間敷儀申懸ケ候ニ付、御陣屋表へ御願申上ケ、御調之上事済相成候、右之次第ニ付、惣吉方故障可申出儀者在之間敷旨被申候、然ル上者、惣吉方申条一向不相分、猶又村方ニも不相済儀在之様申ニ付、当月十八日・十九日夜通村方寄合談事仕、且惣吉江も引合来候得共、同人儀数々故障申立候得共、何も簾立儀無之、然レ共、種々申出候ニ付、村方相治り不申、誠ニ心配仕ニ付、無拠奉愁訴候、何卒厚キ御慈悲を以、右之趣御含被為 置、村方一同安心相成候様、御賢慮之程奉願上候、以上

八月

鴨野村

組頭忠二郎 郎助

三役人

一 八月十三日御認之高墨、同月廿五日着、辱拝閱、如命秋冷御座候得共

上々様益御機嫌能被為在 御座候条、恐悦至極ニ奉存候、隨而貴所様愈御壯安被成御勤奉珍重之御儀与奉存候

一 稻継村新十郎死跡、養子新藏方願之儀、柏原川堤普請入用之儀、鴨野村土藏之儀、大新屋・鴨野早魃之儀、追啓惣吉儀、逸々承知仕候

一 八月廿二日御発御染筆、九月六日到着、即刻戴見、然ル所、当陣屋用具之儀、関東向御振合、并ニ当地締方之儀、且織田様御屋敷江頼込見合之旨、承知仕候、

一 稻継村新藏身分之儀、三ヶ村ニ而重立候三、四軒之列ニ而、志無媚諂して、人情能者ニ御座候、尤御重役様方御承知之事ニ而可在御座哉奉存候

一 鴨野村御收納藏立替延引書付、此度差上候間、御入掌可被下候

一 昨年中、瀧ヶ谷御普所土砂留大崩ニ付、早速手当致在之候得共、長流之分、字草場川江なかれ打寄、川床高

ク相成、御田面江水溢れ、甚た難渋ニ付、八月中普請致候ニ付、御下ヶ米願出候ニ付、則願書封入奉差上候一 大新屋村・鴨野村儀、大早魃ニ付、八月中細見も願出候得共、当年柄之儀利解申聞ヶ、差押置候得共、稻刈取見候所、存外舛付薄ク候ニ付、又候村方一同難渋申立、押差兼候間、無扨村役人共上坂差許候間、宜敷御取計可被成下候、恐惶謹言

九月廿三日

上山治郎右衛門

植村大藏様

江戸行

七月廿九日御認之御尊紙、八月廿三日着、難在即刻奉拝見候、秋冷之砌御座候得共

上々様益御機嫌能被為在 御座恐悦至極ニ奉存候、各様愈御勇健ニ可被成御勤仕与珍重之御儀ニ奉存候、隨而當三ヶ村相替儀無御座候、此如奉申上候

一 殿様 御惣容様益御機嫌克、六月廿三日夜、無御滞御帰府被為成候条被為 仰聞、難在恐悦至極ニ奉存候、各様始、御供下々迄、無別条御帰着之由、奉恐安候、御早速為御知可被為成御思召之所、御帰府御前後御混雜、御殿向御長屋等御建出し御取込之御中、野州筑波山浪人騒動ニ付、非常御警衛御厳重
殿様ニ茂非常御人数御操出被 仰付被成候ト之御事、

扱々、御引取無賢合御混雜ト之御事、難尽筆紙ニ御配慮之段奉恐察候、未た御役向御沙汰無之候得共、評判ニ而者、大坂御帰役御奉行・町奉行兼被 仰付茂可在之哉、御当節柄御除キ被成度候得共、上之儀難御計心配ト之御儀、御尤奉存候、乍併右様相成候ハ、御精切相願願度御儀奉存候、扱庄左衛門儀、静間妻子御差戻し、右婦人付添兼、出立延引相成候儀、同人外ニ惣助へ御渡金、并ニ三ヶ村方少々勘弁為致可申旨等、御委細被為 仰聞、奉畏候

且同人儀、遠路御用向相勤候ニ付、格別之被 仰付茂御座可在所、是迄御出役之節、御聞込之次第篤与御理解申聞、此度之所ニ而 思召ヲ以御陣屋御用之節、帶刀御免被 仰付候ト之御儀奉承知、則三ヶ村役人共江申達置候、偕、御退坂前、私共始役人共出張之所、骨折之旨被為 仰聞恐入、役人共江も申聞、難在奉存候

一 御帰着後、愚狀奉差上候所、御報之儀奉畏候

一 御仕法御預ケ金之内、百六拾兩余、元利十一月御下ケ思召之所、同前条御物入ニ付、当暮御下ケ金御行届キ難被成ニ付、右利金庄左衛門江御渡ニ而、同人方十二月上旬御陣屋江相納可申旨、尤初年之事故、別而延引不相成様、千兩利金無相違上旬ニ相納可申様ト之儀、奉畏候、則夫々江申達置候、右百六拾兩余、御内々御

借上ケ儀、他言申間敷ト之御儀、奉畏候、表向道具屋江者、三ヶ村三十人講之内上納之積、御取調書御遣し被成候ト之御儀、奉畏候

一 御在坂中御委細御達之通り、三ヶ村段々御改正ニ相成候儀、此上遠路罷成候得共、別而手緩ニ不相成様、三ヶ村役人共江急度可申達様差懸り候儀者、大坂御用場江談之上取計可申様ト之御儀、奉畏候

一 大新屋村例之低所、雨天ニ而度々出水候得共、其後天氣ニ立直り、当年関東六ヶ村近来ニ無之豊作ト之御儀、大悦奉存候

一 兼而非常御預ケ金之儀ニ付、当節柄之世上、此上異変茂候節者、夫々他借等為致候而茂、御間合相成候様、精々可仕候

一 三ヶ村方公辺江差出可申兵賦、三人三步四厘之儀被為仰聞、奉畏候、いつれ秋後ニ相成候ハ、丹州方人歩為差出候様可仕与、三ヶ村役人共申居候、乍併未亡人不取極候間、追而可奉申上候

一 当年儀、大坂表江申立置候通り、六月三日方照上り、八月十日頃迄潤無之、六十日余之照ニ而旱損甚敷、御用場御細見も願上度段、去ル八月中申出候得共、近年御仕法中、別而当年儀殿様御帰府被為在、多分御入用相懸り、御当惑被為在候得者、仮令細見相願候共、格別之御引等御行届難被成、且御細見ニ付而者、多分入

用茂相懸り可申間、御引等之儀者、御收納之節、植村氏出役之節談事之上成丈御用捨可致遣立而止り可申旨、理解申聞差押候所、尤両後八月中旬頃、蘇生孫生等迄出穂、一端花吹候二付、大小実入可申見込、旁自得承伏差控罷在、右二付鎌入糶摺等少々宛致見候由之所、右稻時節遅、且早冷等二而一同不熟、舛搗薄ク候二付、又候願出候二付、猶又利解申聞候へ共、承伏不致、差押兼候間、無扨村役人共、当九月廿四日方上坂差赦申候、此段乍序奉申上候、大新屋・鴨野両村儀、先前之様溜池無之候へ者、近郷武田領稻塚辺之如、平均式、三步出来位ニ茂相成可申所、池影ニ而両村方付上高百四拾石計ニ而相濟候二付、昨年方御引鮮ク、米直段者石ニ付三、四拾目ハ宜敷哉奉存候、関東六か村豊作ニ茂候得者、先々御都合能奉恐悦候

一 非常御預ケ金、相場違等格別之儀茂在之間敷候、金御預りニ仕り置候所、六月頃ト七月下旬ト者、壹両ニ付三拾目計茂相場引上ケ、夫方往退乍在之、追々下落、此節ニ而者壹両ニ付拾五匁計茂高ク御座候、又此上引上可申噂も在之、左候而者 御上様御益ニ者聊不相成候儀ニ、近年追々高割出金等多、一同相敷申居候、三ヶ村ニ而相場違見込廿匁之積を以、壹ヶ年ニ付貳貫四百目宛年々損銀相立、壹ヶ年銀ニ無之、一同難渋大潰ニ可相成哉心痛仕、依元御預り申上候節之代銀ニ御引

直し被成下候様、既ニ此上ニも御願申上度抔申者在之候得共、初年之儀氣請ニも相懸り候間、差控居可申段理解申聞、差控置候得共、いつれ明年ニも相成候ハ、銀拝借ニ御願申上度旨申居候由、可成者五ヶ年之間ハ此尽ニ而差置度奉存居候、此段乍序奉申上置候、宜敷御高考置奉願上候、恐惶謹言

九月廿四日

上山治郎右衛門印

伊藤佐五兵衛様

松浦岡右衛門様

秋山勝治様

伊藤鱗之介様

猶々、秋冷弥増候得共、折角御厭御勤仕之程奉願上候、扨御退坂後引統暑炎甚敷候得共、御道中無御滞御帰着、其後御障等も無御座御勤仕被為成（ ）居候様被為 仰聞、難在奉恐悦候、隨而、私共江御端書之趣、難在恐悦至極ニ奉存候、御影ニ而無事御勤居候間、御安慮奉願上候、扨私儀、此度跡取締等在之、御供見合相成候得共、両三ヶ年之内ニ者出府可仕様、被為 仰聞、難在奉畏候、以上

影筆を以演上仕候、追日冷氣弥増候得共、急御盃秀奉讓賀、然ハ大新屋・鴨野早魃之儀ニ付、度々申上候通り、八月中方細見願出在之候得共、近年御省略中、別而当年儀 殿様御帰府格外御物入、御中御当惑被為

在候得共、仮令細見相願候共、多分之御引等者御行届
キ難被成、且細見相成ニ付而者、村方ニも入用相懸リ
候儀ニ付止リ呉可申、御引等之儀者御收納御出役之節
御談申上ケ、可成丈御用捨致可遣ト理解申聞、何卒当
年之所者老石も御引鮮ク取計申度ト差押之所、尤其節
照中霑居、稻共蘇生孫生等仕り、一端花吹候ニ付、大
小実成可申見込、旁漸承伏為致置、右ニ付早稲方之分
銘々鎌入、粃摺等追々致見候由之所、右蘇生孫生等時
節遅、早冷等ニ而実入不申、右之次第ニ付一同准し候
哉、存外舛搗薄ク、見込大相違ニ付、一同人氣立不治
申候由ニ而、又候願出候ニ付、猶又理解申聞候得共、
承伏不致、是悲共細見願出呉候様強而申立、差押兼候
間、無抛添書を以差出候儀ニ御座候、尤役人上坂ニ付
委細申上、是迄重役方ヘ「」候振合を以、只一通
り申上候所、御心配被成候由、御初年之御事御尤之儀
与抑覚仕候、然ル処、来十月五日頃方御出役可被成、
依帳外之稻ハ勝手ニ刈取居候様御達之旨、今廿九日七
ツ頃承り、承知仕候、御出役御延引相成而者、第一御
收納ニ相抱り、且来麦作大ニ不出来可相成、此上難渋
候間、御繁多之御中申上兼候得共、一同も早ク御出役
願上呉候様申出ニ付、又々飛脚差上申候、委細之儀者
御出役之上内外御承答可申上候、恐惶謹言

上山治郎右衛門

(日付欠) 植村大蔵様

一筆啓上仕候、甚寒之節御座候得共

上々様益御機嫌被為遊 御座恐悦至極ニ奉存候、各
様愈御勇健可被成御勤仕与珍重之御儀ニ奉存候、随而
当地三ヶ村相替儀無御座候、此段奉申上候

一寒中御機嫌相窺書状封入奉差上候間、乍恐御披露奉願
上候

一米相場之儀、十月中諸家御払之頃、筑前米直段石ニ付
三百三拾匁位ニも相成、其上四百目ニも可相成勢御座
候所、十一月初旬俄ニ下落、右同国米式百九拾匁方式
百八拾六匁ニ相下り候ニ付、御払米如何与談事仕候得
共、何分人氣大ヘ「」、追々下落候様子ニ付、金式兩
三朱余リ「」御払切相成候処、夫方追々下落、只今
ニ而筑前式百三拾匁余ニ相下り、先御都合能御払ニ御
座候、人氣相庭者日々之「」者乍申、格外之事ニ
奉存候

一稻継庄左衛門、是迄兩度 御上様御労ニ相成「」
候処、去々十月中隣村安藤熊吉殿知行所谷村重兵衛宅
ニ而、掛勝負及手合候所、去十一月下旬、右地頭陣屋
役人高橋保五郎取調之上、右重兵衛并ニ重立候者「」
人入牢、外四人手鎖宿預ケ被申付置候上、右庄左衛門、
当役場ヘ御懸ケ合相成、右身柄之者と申無面北不

〔一〕事ニ御座候、依而呼出之上、大坂表へ申遣し置候通り取計申候

一同村百姓利助与申者、去々十月廿九日曉明六ッ時前、同村字上うすわと於申所ニ、被^レ切倒死去候段届出候ニ付、早速手当申付、下調之儀者庄左衛門へ申付為致置候上、十一月二日大新屋村孫九郎、番人小頭柏原重兵衛・同下役田じ村喜之八等召連出役仕り、右利助疵口并倒所等相改メ置、右家族并ニ親類、次ニ村方一統、其外相組一統、此外利助馴染之女稲垣若狭守殿百姓黒田村清助娘こまと申者迄、委細取調候へ共、何之懸りも不相付候間、一ト先取治メ、右利助仮埋メ申付置、同日未ノ下刻帰陣仕候、是迄右様之次第、御知行所者勿論、当辺ニ一向承り不申、心配仕候

一利助変死ニ付、同人弟忠兵衛与申者、甚た風聞不宜候ニ付、植村弥助・森本庄助出役中呼出、相糺可申与存居候所、右忠兵衛近年内借多分出在之候所、銀主方^方嚴敷催促在之、断兼候様子ニ而、十一月十二日〔一〕家出候段届ケ出候ニ付、早々尋申付候所、行衛不相知之由ニ付、同月廿一日、利助家族并ニ親類呼出し相糺候得共、弟忠兵衛儀、兄利助を如何致候様之儀者睨与不相見申ニ付、又三十日尋申付置候

一同村組頭源二郎ト申者、相応之百姓ニ而御座候所、如何哉大借出来之由ニ而、十一月廿日夜家出仕候、此段

乍序奉申上候、恐惶謹言

十二月十三日

上山治郎右衛門印

伊藤佐五兵衛様

奈浦岡右衛門様

秋山勝治様

伊藤鱗之介様

一猶々、甚寒御座候得共、折角御厭御勤仕之程奉願上候、

随而私共御影ニ而無事相勤居申候、此段奉申上候

一当春追立候久兵衛儀、拳田村智山同道罷出、先年勅使^{勅使村}孫三郎方ニ而御借用被成候銀子口入料之儀、度々申来候得共、御重役方方久兵衛直々被相頼世話致候儀ニ付、

当方并ニ三ヶ村ニ存候訳ニ而者無之、勿論咄出時過候儀、難取敢段度々申切候得共、京都本光院之宮御内正三位黒田治部卿罷越申様、右口入料致賃与、久兵衛へ取替銀在之趣ニ而、彼は申来り候得共、宮家へ相手ニ可成利益之段申募、不請付候得共不聞入、強而彼是申立未不立退、困入申候、夫而已不成、智山・久兵衛・惣吉右三人方、治部卿を頼、色々工風無体之悪計相止^止ミ、尤三ヶ村之内腹合不相分者も在之、甚た心配仕候、誠ニ貴将様方遠ク候得者、万事不任思ニ、愚才病身之私共御勤続不覚速^速、当惑仕候、以上

一筆啓上仕候、甚寒之節御座候得共

上々様益御機嫌能被為在 御座候、恐悦至極ニ奉存候、各様愈御勇健御勤仕可被成与珍重之御儀ニ奉存候、随而当地御知行所相替儀無御座候、此段奉申上候、右者寒中御機嫌之程為可奉窺 之、各様迄奉捧愚札候、恐惶謹言

寒の入方四日目実日也

十二月十一日

上山治郎右衛門

有續(花押)

伊藤佐五兵衛様

奈浦岡右衛門様

秋山勝治様

伊藤鏐之介様

参人々御中

一筆啓上仕候、甚寒之節御座候得共、愈御壮秀奉賀上候、然者御收納米代金左ニ奉差上候

覚

一六百四拾両 正金 又証文ニ而五十両

べ六百九拾両 右御收納米代金也

外ニ 七拾両也 千金利足 但六月方十二月迄

べ七百六拾両也 上納

右之通り上納候間、へ 改御入手可被下候

一稻継村庄左衛門儀、去十月十六、七日、隣村安藤熊吉殿知行所谷村重兵衛宅ニ而、掛ケ勝負及手合候所、右地頭陣屋表御取調相成、右重兵衛并ニ重立候者入牢、外四人手鎖宿預ケ被 仰付置候上、右庄左衛門儀御懸ケ合相成、尤身柄之者ニ茂在之候得者、無面目不都合之事ニ御座候、依而去十一月廿九日庄左衛門呼出し、同人帶刀預リ置、於 白洲ニ相糺候所、右聊無相違、一言之申訳無之ニ付、廿九日・晦日両日之間、手鎖宿預ケ申付置候所、改心之趣及歎願候ニ付、差赦申候、尤同人儀、此度ニ而三度上之御苦勞ニ相懸リ、其願上候余数度右様之場所へ携候者ニ付、入牢ニも可申付咎ニ御座候得共、身柄之者ニも在之、考弁を以理解差赦申候、尤御定法料金之儀者、此度員数不申付、以後心得方ニ応し追而可申付段申聞、則請書為差出置候、右一条相済候上、又以前之通り御陣屋御用之節、帶刀御免申付置候、此段御承知可被下候、扱、稻継村儀重立候者、右様之次第ニ付、当春以来方茂大ニ風評悪敷候得共、見廻リ之者折能無難之節相廻リ候哉、一人も手ニ入不申罷在候所、右之次第出来ニ付、以後稻継村之儀者、別段村方ニ而睨与為取極、規定書差出候様申付置候

一稻継村利助变死一条ニ付、弟忠兵衛風聞如何敷候ニ付、呼出相糺可申与存居候所、十一月十三日致家出候ニ付、

同月廿一日、右忠兵衛母并ニ親類清右衛門呼出し候所、
睨与留たることも無之候得共、右家出時節悪敷、風聞
も不宜ニ付、三十日尋申付置候、右ニ付番人小頭藤吉、
其外手入方之者共呼出し、右忠兵衛儀ニ付、家族并ニ
親類呼出し相糺候得共、差而故障無之様ニ者申候得共、
右忠兵衛尋出し、相糺、明白相分り候迄、手入探索方
之儀者見合置候様申付置候、此段奉申上候
一同村組頭源二郎儀、大借ニ付法立不相付、心配候哉、
去十一月廿日夜、致家出候段届出候ニ付、早々借財方
相片付呼戻し候様、申付置候

一 上納方金子不揃之分、弥助殿へ御頼申上可置候通り、
拙者借受証文差上申候、甚た不相濟儀ニ御座候得共、
此段御承知奉願上候

一 寒中御機嫌御窺書状封入候間、江戸表へ御達可被下候、
恐々謹言

十二月十一日

上山治郎右衛門印

植村大藏様

右大藏殿へ寒中見舞状遣候、外ニ弥助・森本へ出役之
節之挨拶状遣し申候

一 筆啓上候、甚寒之節御座候得共、弥御勇健ニ可被成御
勤仕珍重奉存候、然者其 御領分稻継村又助始メ都
合十三人、不宜風聞御聞取ニ付、被及御吟味候所、当

地行所於角兵衛宅ニ、利助・忠兵衛・惣兵衛 御領分
又助始メ都合六人、其外打寄、御法度之博奕再三及手
合、其後角兵衛方其御領分安二郎・久左衛門へ、強而
相頼右宿為致候趣、此外庄左衛門始三人之者共、風聞
不宜様一同方申立在之ニ付、右八人之者共取調之上、
申口封合候ハ、家法之通り咎申付候様被成度段、御
重役方御達ニ付、御掛合之旨致承知、早速角兵衛始右
之者共呼出し相糺候所、右角兵衛方 御領分安二郎・
久左衛門江強而相頼為致宿候様之儀者、不相分候得共、
此儀最早不及御調ニ、右角兵衛始八人之者共、博奕及
手合候儀者相違無之ニ付、家法之通り咎申付置候、其
御領分右十三人之者共、咎被仰付在之候ハ、御赦免
御座候様致度、右御報迄如斯ニ御座候、恐惶謹言

十二月廿一日

上山治郎右衛門

名前書判

水野肥前守様

中野喜馬太様

野添兵作様

猶々、右角兵衛方 御領分安二郎・久左衛門江相頼為
致宿候様之様之儀者、本文之通り不相分候、乍併右簾
合御承知被成度候ハ、御領分役人共、出勤序之節御
尋可被成候、以上

附たり、角兵衛が相給之者共へ相頼、博奕為致候様相成候而者、甚た不相濟事ニ付、急度嚴重咎可申付儀ニ候間、嚴敷相糺候得共、右様之儀覺無之段申候ニ付、柏原重兵衛呼寄拷問可致段申聞候所、猶予願候ニ付、為引取候所、右角兵衛が如何ニも安二郎・久左衛門を相頼候儀無之ニ付、村役人が相給へ段々掛ヶ合及候所、全ク安二郎・久左衛門が和田表ニ而申立候所、偽言ニ無相違段相分り候間、相給が村役人之内栄次郎、乍内々当役場へ参り、右安二郎・久左衛門が粗骨之儀和田役所ニ而申上候得共、右有体御返翰相成候而者、右両人和田表ニ而又候嚴重御咎被 仰付候様相成ニ付、何卒勘弁を以不角立様返翰いたし呉候様内願いたし度段、書付を以歎願候間、右書状之通り、不相分ト返事いたし置候

一 織田山城守様、長州浪人之儀ニ付、御差控御座候ニ付、為御見舞先達奉行迄罷出候所、御返紙到来ニ付、報状左ニ

一 筆啓上仕候、先達而御心配被為在(一) 御座候御儀ニ付、為 窺参上候所、御披露被成下、右ニ付御厚詞之旨被仰下、御念入候御儀恐入難在奉存候、右御報与如此ニ御座候、恐惶謹言

十二月廿五日

上山治郎右衛門

永田傳左衛門様
藤田六左衛門様

有續(花押)

一 筆啓上仕候、甚寒御座候得共
上々様益御機嫌能被為在 御座恐悅至極ニ奉存候、各様愈御勇健ニ可被成御勤仕与珍重之御儀ニ奉存候、随而当地三ヶ村相替儀無御座候、此段奉申上候

(この簡条の上部)

「江戸行」

一 久兵衛口入料一件、相對書大坂へ差出置候間、相廻り候ハ、御披見置可被下候、同人儀御地江者得参間敷奉存候得共、治部卿事御地能案内之事ニ候間、為念右書御廻し申上置候

一 稻継村儀、博奕風聞不宜候ニ付、水野様并ニ当方共手入いたし候得共、手ニ掛り不申、依而当月十日和田表へ、御相給又助・安二郎・久左衛門右御召捕、段々手荒キ拷問日々被致候所、右三人之者方御相給(一) 十人、都合十三人当御知行所ニ而、角兵衛夫婦・和助・忠兵衛・惣兵衛・庄左衛門・庄三郎・治郎吉、都合八人白状及候由、十八日御掛ヶ合相成、右ニ早速呼(一) 差出候所、庄左衛門・惣兵衛他行、庄三郎腹痛ニ(一) 其余相糺候所、全ク相違無之ニ付、手鎖宿

預ケ申付置候得共、村役人并ニ組頭付添（ハ）迄節季ニ而難渋候ニ付、村預ケ申付置候、いつれ来正月七五三明候ハ、夫々取調可申与奉存候、いつれ大坂表へ相談取計可申積候得共、右様村長之者度々心得違在之候而者、村方一同不相治申、心配仕候、いつれ大坂表へ談事之上取計候得共、此段奉申上置候、恐惶謹言
十二月廿七日
上山治郎右衛門

伊藤佐五兵衛様

松浦岡右衛門様

秋山勝治様

伊藤鱗之介様

右正月年頭之節、乍序遣候得共、春早々右様之申遣候茂如何与奉存候ニ付、十二月与日付致置候

一筆啓上仕候、甚寒御座候得共愈御壮栄奉欣喜候、然者、稻継村儀博突風聞不宜ニ付、当月十月頃御相給又助・安二郎・久左衛門等、和田表江御召取相成、棒責・屋ぐら責、其外手荒く拷問被致被致候所、相給ニ而都合十三人、当御知行所ニ而角兵衛夫婦（ハ）和助・惣兵衛・忠兵衛・庄左衛門・庄三郎・治郎吉、都合八人右白状及候旨、同月十八日水野肥前守殿和田陣屋方御懸合相成候ニ付、早速呼立候所、庄左衛門・惣兵衛他行、庄三郎腹痛等ニ而不罷出、其余取調候所、全ク相違無

之ニ付、手鎖宿預ケ申付置候得共、何分節季押詰り候儀、村役人・組頭随而付添人等迄打懸り居候隙無之、旁猶予相願候ニ付、来正月七五三明迄村預ケ申付置候、いつれ正月十八、九日至り候ハ、呼出し、夫々取調可致積奉存候、右様村長之者心得方不宜ニ付、利助変死、忠兵衛心得違、源二郎家出等、若哉出来ニ而者無之哉与、深痛察候、中ニも庄左衛門儀、巧言令色ニ而奸妄深キ人物ニ付、蜜々人^{（密）}を以内心為探見候所、此度儀博突致居候所、召捕候ニ者無之候間、米相場勝負位ニ申立博突致候与者、身カ粉ニ相成候而も白状不被致、急度博突ニ相立候而者 御上江者第一是迄度々異見受候人々へ不相済与、一心ニ申居候由、右辺ニ而勘弁致遣し候而者、和田表方被掛合候違文意ニ、勿論是迄度々御出役様方被咎置候儀茂不相守、右之次第仕出し候様之族、又候緩き所ニ而治置候ハ、本人改心之儀者申ニ不及、村方一同相治り申間敷、併身柄之者ニ候得者、可成者拷問入牢等之儀除き遣し申度、去迎御制治不相立候簾ニ者相成間哉、致心痛候、少々ハ返答方ニも寄候得共、如何仕候哉、御相談申上候、恐惶謹言
十二月廿五日
上山治郎右衛門

植村大藏様

一金六両貳步壹朱、十二月出ニ而金為差（ハ）節、替金此度封入差上候間、御入掌可被下候

一 当年兵賦金之儀、先達弥助殿、森安殿御出役之節御咄無之二付、員数不相分二付、差出不申置候所、御申越二付、此度為持上候

一 拝借金五月利足之儀、当辺之振合を以無何心差上不申置候所、御申越二付、則此度為持上候、御入手可被下候、以上

右書状丑正月八日立、鴨野村甚七へ為持遣し候得共、久兵衛一条、稻継博奕一件在之候二付、余り早々状ニ申遣し候儀も如何存候間、十二月与日付いたし遣し置候

一 公儀献上胡麻、右正月八日出シ遣し申候

一 久兵衛口入料之儀二付、京都本光院之宮岡村式部名代正三位黒田治部卿、一条院智山・久兵衛三人同道相對シ、十二月九日参り、誠ニ六ツケ敷儀ニ候得共、都合能言負し歸し申候、則相對書別紙ニ認遣し申候、御披見之上江戸表へ御廻し可被下候、以上

右相對書左ニ

(上部空白部分)

「久兵衛儀ニ付京都本光院方役人来候節相對書」

一 十二月七日、大新屋庄屋嘉七方江、拳田村ニ在之候三宝寺庵仮住一条院智山并ニ久兵衛兩人参り、先年勅使孫三郎方金子世話致候節、口入料不請取申在之候ニ付、此度請取度由ニ而、彼是掛ヶ合及候ニ付、嘉七・

孫九郎兩人方色々差答候得共、中々聞入不申、右ニ取交色々六ツ敷申掛ヶ、致方無之二付、嘉七・孫九郎兩人方申候ニ者、当時太切之御上納取立勘定最中ニ付、無寸隙候間、得相手ニ不成与言捨、右置去りニ致置、座敷へ引籠候所、大ニ立腹過言候得共、不罷出^(候久カ)ニ居候得者、右坊主・久兵衛等、座敷へ通り彼是申得共、相手ニ不成候ニ付引取、同日未之刻当方へ参り候得共、他行与偽り不逢候所、翌八日辰之刻右兩人来ル、未タ不歸ト偽り不逢申、又同日巳ノ刻来ル、同断不逢、又未之正刻京都本光院御内岡村式部代正三味^(也)黒田治部卿并ニ智山・久兵衛同道罷越候得共、取次迄治郎右衛門儀、公用者相勤居候得共、官家用向候儀者勤居不申ニ付、不得逢与申差置候得共、不引取申、剩勝手へ通り、拙者参り候ハ表向之用事ニ無之、只頼度事在之内々参り候与、不動退候ニ付、無拋私共罷出致對顔候所、黒田言ク、京都町奉行所ニ而当三ヶ村拝借銀在之儀ニ付、大新屋村為役代与、久兵衛上京之砌拝借致度段相頼候ニ付、返済方相尋候所、当三ヶ村へ同郡勅使村孫三郎ト申者方、去ル安政七申年十二月金貳百七拾八両、翌文久元西四月・七月兩度二百五拾金、都合四百廿八兩致世話在之、右口入料壹割ニ而も四十貳兩余取分御座候、是を致賃ト拝借仕り度段相願候ニ付、拝借金大新屋村久兵衛証印、一条院智山認印、岡村式部ニ而御堤

介代金之内貸付在之、然ル処返済不致ニ付及催促候処、久兵衛儀浪々之身与成、剩右口入料未タ請取不申様申之而已、一向事柄不相分、依而彼等召連致推参候也、右久兵衛儀、当三ヶ村へ、勅使方金子致世話儀在之哉、又口入料之儀如何相成居候哉、承り度ト、久兵衛言、私共へ先年段々相頼ニ付心配仕、右勅使より金子御世話仕候ニ付、早速口入料御渡候様可相成与存居候所、御渡無之〔 〕与存候得共、何分当村ニ住居仕、永ク御世話ニ預度心得ニ付、差控居候儀ニ御座候、然ル処、此節大ニ困窮仕、最早妻子共及飢死候様相成候間、右口入料〔 〕其節方利足相掛ケ候ハ、六拾兩ニも相成候間、右都合可申請心組ニ而、智山方迄罷出候所、不計黒田氏被来合、先年拝借仕居候金子此度嚴重之御取立ニ預り、重々難渋仕居候間、右口入料之所、是悲此度御渡被下候様御願申上候、尤私共、当村住居仕居候節、居宅并ニ一人扶持頂戴仕居候得共、是ハ口入料之替ニ而者在之間敷様奉存候、併若口入料之替ニ思召候ハ、右口入料被下候ハ、其内ニ而右扶持方米并ニ拝借銀共御返上可仕、私儀も難渋仕居候得共、左而己無理計申上候ニ者無之、幾重ニも宜敷取計頼度候、智山云ク、拝借之節拙僧証印罷在候ニ付、同卿方厳敷相對在之、誠ニ困入候間、右口入料御渡相成候様相頼候、拙者云ク、久兵衛・其方儀、素方此方存居候

者ニ無之、元大坂ニ而其方重役方被相頼、右孫三郎金子致世話候ニ付、川口方当方へ被申達、此方方三ヶ村へ申達候所、村方ニ者不承知之由ニ而、段々断申立候得共、此方方押而理解申付候次第、然者、右口入料之儀者、其方被相頼候方方可申請儀、勿論都而口料・世話料等之儀者、前以相對致置、金子貸渡之節、其内ニ而引取可申当法之所、然ルニ其節、当方并ニ三ヶ村へ何之咄も無之、右孫三郎方出金分不殘重役方差送り、其後酉三月・同十二月、〔 〕先刻返済、夫方当年至四ヶ年ニ相及候而、左様之儀可申出理無之、最初川口表ニ而如何様之對談致居候哉、此方不存申、若口入料可相渡約定ニ候ハ、最早重役方ニ而頂戴相渡候与被存候、久兵衛云ク 御上方御挨拶在之候覚無御座、尤三ヶ村御借銀ニ候ハ、三ヶ村方右口入料可申請筈ニ奉存候得共、前申上候通り、義理合を思差控居候ニ相違無之、尤三ヶ村へ御相談被下候ハ、稻継村坏ニ者此儀御承知之方も御座候与、拙者云ク、右金子之儀ニ付、重役方方此方承り不申儀、村役人承知致居候簾在之間敷、且久兵衛、当村住居之内、仮令遠慮差控居候共、当春以来追立被申付候上者、只今同様義理相含ニ不及、何ニとして其節駈与相對不致、遂引取候哉、久兵衛曰ク、当春正月晦日、当役場へ御呼出し、只一日之仕度を以立退被申付候ニ付、取周障前後不弁立退申候、拙

云、其方立退之儀者、去亥十一月方達置在之、何か非火急、然ルを何事おも不申立退、且川口表五月末迄御在勤在之候ニ、其間何等之儀も得不申出候者、全ク重役方ニ而右口入料請取相濟候ニ相違相違無之所、重役歸府候を見込、己レ二重取ニ来候歟、不埒之族押而云ハ、了簡在與叱付候所、黒田云ク、其儀当前ニ候得共、右孫三郎方出金証文之儀者、村方方質地差入、役人共借受ニ而者無之哉、左候得者、右金子上^上返濟無之節者、金子方方 亀五郎殿を相手取訴訟可致哉、其時至候ハ、借請村方を相手取り訴訟可及、左候得者、右口入料も是ニ可准、若未タ右料相渡無之ハ、早々被渡候事、大法可成、尤若危き時ハ仰立ニ代る、上心配在ハ下之ニ苦む事又是順なり、役儀太切也、貴殿一人引請候ニ不及致世話候ハ、久兵衛借受ハ村方ニ候得者、村方へ被振向候而可然、此方先年江戸浅艸二十七ヶ年居候節、老中会合之席へ度々罷出候所 公儀於決断所ニ茂掛物ニ中ハ、正直左ハ慈悲、右者堪忍之台目在、此方も若き時者、任勢ニ無法計致居候得共、最早八十才ニ及候得者、渡世為土産、右正直慈悲堪忍を第一に相守申度心得ニ候得共、趣意不立事ニハ不相成、趣意立候上者、頼ニ寄ハ負ても遣、懷るても助ケ可申、必心配御無用与、智山曰、誠ニ御繁多之中へ御心配相懸ケ候儀者、呉々御氣之毒之間、右治部卿被申候通り、

拙僧久兵衛方三ヶ村役人かたへ引合仕り度候間、此段御承知可被下与繰返し申之候、拙者曰ク、〔一〕有本末事在終始、右金子借入候儀者、重役者始ニして、此方へ中村方ハ終也、何ク始意を不知して、終理を計ふを不触、黒田云ク、然者貴殿方村方へ談事可被致呉、拙曰、不及其儀ニ、黒田云、右口入料之儀者、久兵衛ト村方ト之事ニ而、此方ハ不構事ニ候、併此方方大新屋村久兵衛江、御堤竹代銀之内貸付在之、段々及催促候得共、尔今勘定不致ニ付、久兵衛儀宿預ケニ而も申付被置、早々濟方可致様取計願度候、拙者、久兵衛儀春以来追立相成、最早当村住人ニ無之間、其儀不相成、黒田云、於京師、或者三条通住宅之者へ金子貸付置候所、其者七条通へ転宅致居候共、及訴訟候得者、元三条町へ引戻し置、御裁許在之候事、公儀御大法ニ候、尤当国も京都御仕配ニ候ハ、右御法御用可在筈、然ルニ久兵衛追立候迎、右願之簾取用無之ハ、公儀之御法被破候与可申歟ト、荒々敷春立候、拙者、其儀素方承知之事ニ候得共、久兵衛儀入帳ニ而者無之間、其儀不相叶、黒田云、入帳ニ無之者何トして役代ニ被遣候哉、拙云、代人之儀者、不限所住ニ、頼遣事通例ニ候、既ニ町奉行所於門前ニ、代人渡世之多ク在之候、黒田云、久兵衛儀、当地住人ニ無之儀共不存金子貸遣候儀、全ク此方之不調法ニ而候、又右様之者之証人ニ立候、

智山不相濟、且又右様不埒成者、久兵衛江御扶持迄差遣、当村ニ被置候儀者、御誤リニ候間、持合趣意立候様、御取計相頼申度候、右何ント歟簾立候まで、何日ニ而も滞留之積ニ而罷出候、尤日も暮ニ及候間、御差宿相頼ト再三申之、拙云、当村ニ宿無、黒田云、何国ニ而も於陣屋元ニ無御宿無之、郷宿ハ可在之、拙云、郷宿ハ在之候、是ハ郷方役人共会合之所ニ而、余人之止宿ニあらず、黒田云、縦無宿村方ニも、勸化者、其外旅人ニ而も行暮候節、庄屋方相頼候ハ、一夜被為明可申ニ無隱、本光院方来候、此治部卿ハ野宿候共、宿貸不申哉、拙云、宿不貸ト申ニ者無之候得共、斯山中ニ而、行儀不知仁物而已、官家・高位之御方へ差宿申置、若不都合在之候而者、申訳無之ニ付、断申候、黒田云、如何様粗略在之候共、故障申間敷間、是悲差宿相頼ト、拙云、仮令故障ハ不被申共、此方方差宿いたし置、若喰当り等御座候而者、此方方申訳無之間、是悲断申候、黒田云、然ハ自分ニ煎焼可致間、当館之端ニ而も被貸給ト、拙者云、今晚方村役人共、当方へ宿集、明十日・十一日両日之儀者、收納米代銀差立ニ而、大取込ニ而、御貸席ハ勿論、何咄何思案致間も無之、右様手詰御相对被下候而者、逸々難及、是悲御引取、来ル十二日迄返答猶予願度候ト、黒田云、ケ様ニも可致ト申事在ハ引取可申、無左ハ不引与、拙云ク、

ケ様ニ可致ト申事、心浮在之ハ、只今返答可及、其心得無ニ依、返答猶予ト申也、右二日之猶予さへ聞入無之ハ勝手ニ可被致、言切候所、黒田云、勘考致置、追而返事ト之事ならば致承知与、漸引取申候、此余数嘶御座候得共、文繁か故、大略如此、依翌日柏原屋敷懇意二、三人の方へ致談事候所、先年柏原儀、摂州西之宮某方ニ而、金子借用罷在、其方ニ取次証文在之、然ル所、右家追々貧窮及、右証文を以、京都九条殿役人谷垣始メ与申者来り、時之家老生駒主水（一）へ通り、心配被致候節、右役人江者かけ合不及置、京都町奉行所江御伺被立候所、町奉行方伝奏江御掛合、伝奏方九条殿江御沙汰在之、同殿方急飛脚を以右役人引戻し相成候、又奉行所方柏原（江）右役人召捕へ、奉行所へ可差出御沙汰在之候例在之候間、若此上黒田彼是申候ハ、当屋敷方京都御親類桂宮柳原殿、所司（マ）町奉行所へ近々寒中見舞席在之候間、此方相頼、乍序為伺可申与返事在之、致安心候、笹山ニも先年右様之事在之、此節ハ内々金子為握被差退候事在之由、誠ニ官家ハ面倒成者ニ御座候、右之外、久兵衛・惣吉方落文一条、鴨野五郎右衛門一条等、黒田へ申含、工風致居候旨、先日相对中頭居ニ付、柏原小頭重兵衛呼出し、勘弁を程能申聞候所、同人儀、徳実成者ニ而、早速承伏、同下役田路村喜惣八、谷屋政四郎を以手当為致置、

十二日相待居候所、同日巳ノ刻過治部卿名代として智
山来候間、拙云、右一条幸三ヶ村役人共銀掛ヶ二付、
一同出勤候間、勘考を以無何ク委細申聞ヶ、心低相尋^底
候所、村役人儀者、仮令二条役所へ罷出候而も、右等
之儀不存ト申候、然ル上者、此方儀重役江無窺、押而
村方へ申付候儀不能、役前ニ致方無之ニ付、治部卿勝
手ニ可被致様与、智山云、御尤ニ候得共、当役場二者
御存無之所ニ而、拙僧久兵衛方成不成一応村方へ掛合
申度候、拙云、此方方相尋、右様答置候上、貴僧如何
様被掛合候共、返答在之間敷、若相違出来候ハ、此
方方役人共へ咎可ハ付、然者、無益之事ニ候、智
山云、然者江戸表へ御伺ハ度ト、拙云事、可窺時
節在、最早不応其場ニ尤此前ハ手詰之相对故、
不能愚了ニ柏原屋敷へ及談事ハ様々被申候
間、若此上彼是被申候ハ、京都町奉行所へ伺可申候
間、可被相待与申所、智山云、拙僧人夫之事候間、追
而其由黒田へ可申聞与引取、其後何之沙汰も無之、右
柏原重兵衛方方手入在之様子聞取候哉、久兵衛逃歸リ
申候由、惣吉儀者得不罷出候、右ニ付、柏原屋敷其外
重兵衛杯へ挨拶料忒歩式朱計入用候得共、先相治リ候
間、此段御安慮可被成下候、右之段奉申上候、以上

4

「慶応三年

江坂并諸所要書扣」

(表紙)

「慶応三年

江坂并諸所要書扣

卯正月吉日

藤原在績」

改暦之吉慶不可在際限日出度申納候

上々様益御機嫌能御越歳被為在 御座恐悦至極ニ奉存候、各様愈御勇健ニ可被成 御越年与珍重之御儀ニ奉存候、随而当地三ヶ村相替儀無御座候、此段奉申上候、依(「御扇子料与金百疋各様江金壹朱宛奉(「候、右者年頭御祝詞申上度、各様迄奉捧愚札候、御序之刻宜敷御披露奉願上候、恐惶謹言

正月十一日

定日也

上山治郎右衛門

有績(花押)

秋山勝治様

伊藤鱗之介様

藤井小膳様

参人々御中

外ニ高橋成内へ遣ス、尤二日書在之候

改暦之吉慶不可在際量、先以其

御館内御揃、益御安泰被成御越歳珍重御儀奉存候、依

為御扇子料金一封奉進覧候、右年始御祝詞申上度、猶期永日之時候、恐惶謹言

正月十一日

上山治郎右衛門

有績(花押)

植村大藏様

植村登郎助様

参人々御中

猶々在

右之外菅弥助・森本庄助へも遣ス 京近甚へも遣ス

一筆致啓上候、春寒候得共愈御壮安奉喜寿候、然者昨寅年献上胡麻、乍延引奉差上候間、御達可被下候

一近年人氣変、内心六ツケ敷相成、折々諸所ニ騒々敷儀在之、兎角物事不安候ニ付、柏原屋敷へ度々罷越、何歟御世話相成事も在之、其都度挨拶等も致在之候得共、春而年頭計も相勤、同所奉行兩人方へ為扇子料金弍朱ツ、位持参仕度奉存候、右御承引被下候様、御取計奉願上候

一千金之内、江戸表内御(「之儀、毎度御下金願出在之、猶又右利足立替納之儀も、是迄者段々理解為相納候得共、前条之次第二付、以後之儀者立而断置、差困候間、毎度申上兼候得共、幾重ニも宜敷御憐計奉願上候

一村方必至難渋及候ニ付、夫人之内御容免之儀〔 〕願上在之、此度願書貴將様方迄差出可申候間、宜敷御取計可被下候、以上

一筆啓上仕候、春寒退兼候得共

上々様益御機嫌能被為遊御座、恐悦至極ニ奉存候

貴將様益御勇健可被成御座珍重之御儀ニ奉存候、隨而当地三ヶ村相替儀無御座候、此段奉申上候、然者去正月三日御着坂被為在候条、目出度御儀奉存候、右ニ付、御機嫌為 窺廿四日御陣所迄參上仕り候所、折惡敷御出張御留守中ニ而、不奉 得拜顔、滯留可奉御待候所、御收納米代当晦日御上納取立ニ付、猶御用向差掛り在之、浅賀・中山両氏江御伝言願置、委細之儀者御用場へ申置、不顧 恐茂帰邑仕候得共、此段御仁免奉願上候、誠ニ此度御出張之御儀、深ク御配慮被為在候哉ト乍恐奉存候

一大誠院様為御遺物与、結構之御花器御箱入疋具被為下置、難在頂戴、冥加至極奉存候、乍恐御渡之刻、宜敷御礼仰上被為 成下候様奉願上候、恐惶謹言

二月二日

上山治郎右衛門

伊 鱗之介様

参人々御中

以手紙演上仕候、春寒退兼候得共愈御安康奉喜寿候、

然者先達上坂大ニ御厚情相成、難在奉大悦候、扱御米代之儀、正月廿八日米相庭大下落ニ付、商人共方壳先多ク、入銀流ニ相成、俄之調金、心力ニ及不申由ニ而、段々歎願申出候得共、嚴敷申聞ケ、漸今日請取候分、外ニ三ヶ村方上納・夫代金ニタ口共不取敢上納候間、御改メ御受取可被下候、猶跡金精々取立次第上納可仕候、右ニ付、延引相成候得共、此段御仁赦可被成下候、一此度御遺物御礼愚狀奉差上候間、御取次可被下候、以上

二月二日

上山治郎右衛門

菅弥助様
森本庄助様

粗毫を以啓上仕候、春寒退兼候得共、愈御壮栄奉觀喜候、然ハ御米代金精々取立候得共、都合不仕、右ニ付不納之分金子為入増御米不渡置候間、此段御安心可被下候

覚

一金七百拾兩三步式朱 永五拾八文九七 正月上納分

外二

金六拾兩

大坂御出張

夫人代

同式拾兩

兵賦四拾金
之内半方分

七百九拾兩三步式朱

永五十八文九七

内

金子百廿五兩

卯二月二日納

同 百拾五兩三步三朱

同月五日上納

残而百五拾兩

不納

右不納金步附書二而、当晦日上納之筭約定候間、此段御承知可被下候様、御執成願上候、恐惶謹言

二月五日

上山治郎右衛門

菅 弥助様

森本庄助様

一筆致啓上候、春暖御座候所愈御勇健被成御勤仕珍重御儀奉存候、然者其 御領分母坪村清助・本郷村瀧助右兩人、当知行所於稲継村和助宅別紙名前之者博奕及手合候段露顯二付、右和助召出、遂吟味候所、相違色之段及承伏候二付、家法之通り咎申付候、依之其御領所之者共御呼出し、御糺明之上、中江御付合候ハ、御領法通被 仰付候様致度、併可相成丈御手輕之御取計被成候様致度奉存候、右之段、為可得御意如斯二御座候、恐惶謹言

二月廿四日

上山治郎右衛門

有績(花押)

柏原

地方

御役人中様

右之文言二而、水野肥前守様御役所

水谷六郎右衛門様 大多和純之介様江遣ス

〃 稲垣若狭守様役所成松田中四郎次郎様へ遣ス

〃 井上寿一郎様御知行所本郷村和田へ遣ス

右同文言 但鴨野村林兵衛宿

博奕手合名前

当二月廿日

佐野豊太郎 知行所

稲継村

和助宿

水野肥前守様御領分

同村定七

井上寿一郎様

御知行所

本郷村 作助

織田英太郎様御領分

同村 瀧助

母坪村

清助
稻垣若狹守様御領分

柿芝町

石助

右同日

佐野豊太郎様御知行所

鴨野村

林兵衛宿

同村

利兵衛

大ニヤ村

喜助

杣裏格之進様御知行所
(杉池)

朝坂村

安藏

一筆致啓上候、春暖御座候得共各様愈御勇健ニ可被成御勤役奉觀喜候、然者、村方風聞不宜候ニ付、度々見廻り差遣し候所、去ル二月廿日夜、於鴨野村林兵衛宅ニ、同村利兵衛、大新屋村喜助、杉浦格之進様御知行所朝坂村安藏、於稻繼村和助宅ニ、同村御相給定七、井上寿一郎様御知行所本郷村瀧助、織田英太郎様御領分同村作助、同母坪村清助、稻垣若狹守様御領分柿芝町石

松、右両村ニ而都合十人博奕及手合候間、右御地領之者共、夫々領分役人方へ及掛合、当知行所三ヶ村ニ而四人之者嚴敷紀明之上、手鎖村下ヶいたし置候、右之者共度重り居候ニ付、昨年中達置候通り、応罪二年月無給夫役相勤可申筈之所、いづれも子供幼少ニ在之、米高直ニ付、妻子共餓死可仕ニ付、何卒猶予願度段書付差出、其後村役人共方、乍内分口上ニ而可相成者、少々代料ニ而勘弁願度段申出在之、如何可仕哉、差図願上候

一嘉七儀、風聞不宜候ニ付退役申付、後庄屋之儀者、村方応人氣ニ、孫九郎へ取極メ申候、此段御承知可被下候

一稻繼村新藏儀、度々退役相願居候次第、如何ニも難勤候間、乍内々庄屋用向庄三郎、年寄用文藏、惣代用新藏ト、操替相勤候様取計置、此段御承知被成候様、御取成可被下候

一和田森二郎、銀七拾石代金四百五拾五両、去ル寅年十一月晦日上納分、為元利与此度四百七拾五両壹歩三朱上納候間、御改メ御入掌可被下候、且正月晦日上納殘金当節上納可仕候所、毎々申上候通り、金詰調金不相成候間、当三月晦日迄猶予いたし遣し候間、来四月初旬上納可申、此段御承知可被下候

一鴨野村風分不宜、右両人外取調可申候所、段々歎願ニ

付、村下ヶ致遣し候、右ニ付、為御趣意金与壹両上納候間、預置候、右之段如此御座候、恐々謹言

三月二日

上山治郎右衛門

菅弥助様

森本庄助様

一筆啓上仕候、向暑御座候処愈御安勝奉賀寿候、然者鴨野村庄屋役儀、念二尋候、替役いたし候様届出候得共、先大坂表伺之上沙汰可及旨申聞置候間、宜敷御答可被下候

一 大新屋嘉七役儀御免之儀、先例茂在之、右様取計候得共、以来仰之通り取計可申候

一 弊館養子之儀、当郡小畑村植木孝之助二男格之助与申者、当四月十五日申請候約定候間、此段申上候

一 織田出雲守様領分当郡池谷村、用水不足ニ付田面養兼難渋之趣、然ル処、当郷大新屋村鴨野・北山・田路・拳田、右五ヶ村入相字石戸山ト申所ニ、当郷不用之出水在之、依右、出水を以池谷村江応し、田面養水ニ致し度旨、柏原屋敷方之頼書、并ニ右村方願書を以願出候、尤五ヶ村聊難渋二者不相成候間、右溝敷地料〔 〕之願ニ応し候而者如何哉、五ヶ村役人共江談事致居候、委細後刻可申上候

一 筆啓上仕候、追日暑炎相募候得共愈御壯安奉讓賀候、

然者過日上坂御厚情相成〔 〕奉存候

一 先日御咄之勘定目録、拙者并ニ稻継分共、〔 〕此度御申達、高反別一条并ニ山薪人別家数共取調書為認、別飛を以差上申候、御入掌可被下候、早々頓首

五月十三日

上山治郎右衛門

菅弥助様

森本庄助様

六月朔日

一 筆啓上仕候、追日暑炎弥増候得共愈御安全奉喜寿候、然者此度金百四拾七両壹步差上候間、御入掌被成下、昨年差上置候証求御通達可被下候

一 先達反別取調之儀被仰聞候間、御雛方之通り申付、帳面為致、且ツ当陣ニ御竿帳無御座ニ付、村々帳面取寄せ、吟味之上両三度ツ、為仕直候上差上候所、少々不行届簾合在之由被仰聞、驚入、猶又竿帳数冊取集吟味為致、鴨野・稻継之儀者、猶又帳面仕直し奉差上、其外三ヶ村書付式通共為持上候間、宜敷御取成可被成下候

一 田植之儀、鴨野・稻継両村共、五月廿四日迄ニ無滞相済候由届出候、大ニや村儀、五月廿日迄ニ上田之分ハ相済候由申出候得共、低所之分ハ未タ水ニ而根付不致得罷在候、此段申上候

一 三ヶ年割合御下ヶ御借上ヶ金百両上納候間、差上可申

所、仰ニ随預り置申候、此段奉申上候、先達御内歎申上置候、御下ケ金御差図被下候ハ、早速相下ケ申度奉存候、恐々謹言

六月朔日

上山治郎右衛門

菅弥助様

森本庄助様

猶々、御地者如何哉不存候得共、当辺儀冷氣強ク、多中勝困入申候

一筆致啓上候、秋冷相催可申所、未残暑難絶候得共各様愈御安全奉賀寿候、然ハ去々六月、在坂中〔 〕御厚情相成、難在仕合奉存候、後刻拝眉之節可奉深謝候一当年早魃ニ付、願紙之通り申出候間、七月廿七日月待兼参籠候間、此段申上候

一鴨野村甚七儀、七月十四日中風発病候旨届出候、此段申上候

一千金之内、江戸表へ内御借上証文、此度進上候間、御達可被下候

一御陣屋御積金之内、別紙之通り上納候間、御請書御下ケ可被下候

一御借上金百七拾両、元利割合年下ケ書付御越可被下候
一千金初半利足七月中上納可仕積之所、調金相成兼、札相交上納候ニ付、少々引替候得共、不行届在金高五

拾両、此度上納仕候、跡金拾両之儀者、当月方利足相添後便上納可仕候、此段御承引可被下候

一兵賦金廿両之儀、願面之通り調金不相成、段々利解候得共、強而歎願候間、彼是日数大延引候上、調金不相成候而者、猶々申訳無御座候間、取次差上申候、宜敷御執成可被下候、恐々謹言

八月十一日

上山治郎右衛門

菅弥助様

森本庄助様

一筆致啓上候、不応残暑甚敷候得共、各様御安壯奉觀賀候、然ハ京都迄近甚并ニ掛屋仲間ニ而御借金三口証文下書持参候様、御申聞ケ候得共、西発証文下書、孫九郎分ニ御座候得共、近年諸道具万端売払之節、如何相成候哉相分り、当方儀者、川口御屋敷へ相送り、別段留置無御座、其後右三日共、当時証文ニ相替り候ハ、木村正吾取扱ニ而、私方二者一向不存申候、此段御答申上候

一早魃之儀毎々届出、猶又此度書付差出候旨封入申候、宜敷仰上ケ被置度候、中ニも稻継村儀者、近年無之大豊作ニ而、一同悦居申候、以上
八月十六日

上山治郎右衛門

菅弥助様

森本庄助様

一筆啓上仕候、秋冷候得共愈御壮栄奉欣賀候、然ハ去八月晦日大風ニ而御陣屋西門危ク見ヘ候ニ付、手当致候ニ付、例ハ不致候得共、屋根吹飛シ、垣坏倒候間〔御届ケ申上候

一 大新屋大早魃ニ而、凡て概し三、四部作位ト存居候所、八月十七日頃潤致ニ在之、近年希成^カ雨候ニ付、存外見直し六分作位ニも見直候様相見、悦居候所、同月三十日大風在之、尤大新屋儀、郡中忝^カト申風荒之村柄故、家并大破既ニ潰家等出来候次第ニ付、作方大ニ吹損、右ニ付当陣ニ而見分致呉候様願出候得共、余り年毎之儀ニ而、甚た申上兼候間、御断之儀御出役之節、御相談可申上候、先々無見分爲刈取候様利解申聞置候、右願書封入差上申候

一 鴨野村儀、七月十六日初夕立ニ而、大新屋方多分降候ニ付、早損薄ク、其上八月風損も大ニや半荒ニも無之候間、いつれ少々之御用捨ハ不致者難治り候得共、格別之儀無之様存候、大新屋儀も八月初旬申上候様二者無之様子、拙者儀、追々全快候得共、未タ本快不相見、見廻り不申ニ付、委細不存候得共、大新屋引概し、凡昨年同様之噂ニ候

一 御収納御出役、十月下旬方御発足可被致候、恐々謹言

九月十八日

菅弥助様

森本庄助様

上山治郎右衛門

一筆致啓上候、寒冷相催候得共愈御壮栄奉賀候、然者此度江戸表方御達在之ニ付、拙者并ニ村々役人共〔一〕坂之旨、当十月十二日御認之御状十八日着、早速村役人共召寄申付候間、明廿一日出立上坂可申候、拙者儀、八月中時候病ニ持病兼、床伏候得共、服薬強ク養生ニ付、大ニ快方候所、十月初旬方、又々日二三、四度ツ、服痛在之、其上上焦強ク、足取弱ク、歩行致兼候間、甚た恐入候得共、上坂之儀御断奉願上候、委細村役人共ヘ御聞達可被下候、

一 鴨野村儀、稲作刈取見候所、相違之旨ニ而、九月下旬内見願出候得共、大新屋さへ如此与理解申聞ケ候所、いつれニも御出役之節、御引願上呉候様申置、引取申、此段申上候

一 拙家長女良儀、当年十九才ニ候所、忝兩日病氣急症ニ而、当月四日晩相果候間、此段御届ケ申上候

一 当郡中一統近年無之疫病共大流行ニ〔一〕、未タ赦免不致、右ニ付、作方取入れ手遅候間、御出役之儀者、十一月十日頃御着丹之積、御発駕可被成候、恐々謹言
十月廿日
上山治郎右衛門

菅弥助様

森本庄助様

一筆啓上仕候、寒氣御座候得共愈御安榮奉賀候、然ハ御米代金之儀、米大下落、金相庭引上ケ、其上金詰リニ付、商人共歎願候得共、理解而已不聞入居候得共、諸家様へも同様申出、御心配被成居候次第ニ付、御伺申上候処、押而理解申聞候上、是悲（「」調金不相成（「」当方計ひニ而、利足付差延し遣候様ト之事、承知仕候、右心得を以、未タ引合中候得共、一向商人共不参、催促ニ而已急談行届兼候間、先ツ去晦日方当月二日夜半過迄、拙者取付等候金高三百四十七両、不取敢上納候間、御入掌可被成候、猶跡金精々引合、委細後便可申上候、恐惶謹言

十二月二日

上山治郎右衛門

菅弥助様

森本庄助様

一筆啓上仕候、甚寒候得共愈御壮榮奉欣喜候、然者村々庄屋共、当十五日頃着坂候様御申越、則其旨村々へ申付候所、近年村方段々困窮及候上、当年も不作ニ付、引合甚た六ツケ敷相（「」ニ而（「」入組候儀不行届ニ付、庄屋出坂候ハ、上納取立春延ニも相成可申

哉、左候ハ、取立仕方無之様相成候間、成丈冬分取立置、来春早々御年頭兼上坂候様願上呉候様申出候、此段御伺申上候

一御米代之儀御払頃ト者、石ニ付式百目相下り候ニ付、商人共売先夫々へ返約相成、右ニ付買請人当惑、尤当辺商人多く（「」薄者候故、金子調達自力ニ不及ニ付、皆納者入式入増等不得致、然其ながさせ（「」御上、随而商人共後々之差支ニも相成候間、情々相對（「」正月晦日迄延納願聞届置候間、此段御承知可被下候、同当月廿日頃上納金之儀ハ、正月迄延納願出候得共、不聞届罷在候得共、如何可相成哉、如何心配致居候

一和田表金子一条、段々為引合候所、中々聞入不申、是悲百両口元利外二年利金共相立可申談申張之由、左も不致候ハ、公訴可及気色相見、一同心配ニ付、書付を以歎出候、宜敷御答可被成候、恐々謹言

十二月十一日

上山治郎右衛門

菅弥助様

森本庄助様

猶々和田一条年賦金、并百両返済約定口半（「」位差入候ハ、相治り可申哉、左も不致候ハ、公訴可相成様子、若公訴相成、村役人共被召候ハ、村役人共公辺向之儀者（「」候而已ニ而、至而不案内者

計ニ付、公辺之儀心配仕候間、公辺相成候ハ、御
「」御引受可然御取計被下候様願上度、右甚た
恐入候得共、多分入用金相捨、其上大不調「」候
ハ、御上表御損毛相立、猶々申訳「」候間、右
乍内分願上「」奉存候

一 御米代延納之儀も如何心配仕候得共、何程嚴重催促候
共、入金不得致、右ニ付、入金「」な「」セ候ハ、
怠御上様、御損毛ニも相成候間、不止事、右「」延
聞「」致置候、此段御承知可被成下候、以上

一 筆啓上仕候、甚寒候得共愈御勇健奉恐賀候、右者寒中
為御窺書中以如此ニ御座候、恐惶謹言

十二月十五日 寒四郎当日

上山治郎右衛門

有續（花押）

植村大藏様

植村登良之助様

一 筆啓上仕候、「」寒之節候得共

上々様益御機嫌能被為在

御座恐悅至極ニ奉存候、各様「」御勇健可被成御
勤仕珍重之御儀ニ奉存「」当地三ヶ村相替儀無
御座候、此段奉申上候、右者「」御機嫌之程為

可奉窺^{（マア）}也、各様迄奉愚札候、御序之刻御披露奉願
上候、恐惶謹言

十二月 いつ二ても

十五日

寒四郎

上山治郎右衛門

当日

有續（花押）

秋山林之丞様

伊藤鱗之介様

藤井小膳様

猶々追々寒氣押募申候得共折角御厭御勤仕之程奉願上
候

一 筆「」候、甚寒候得共愈御平安奉賀候、然者三
ヶ村殘納米代并千金利足之儀、当廿日上納可申所、金
相庭前代未聞大上リニ付、入金一切無之、通用ハ札計
ニ而、調金難出「」ニ付、来春御年之「」迄猶
予願出候間、段々利解申聞、色々心配為致候得共、い
つれニも出来不申ニ付、是悲春延申出候、未聞「」
置候得共、右之次第ニ付急キ奉申上候、右数人ニ而調
金之事故、人々ニ而者聊之儀ニ候得者、是悲調金可致
旨申聞置候間、冬分調金候ハ、早速差上可申候得共、
「」兼候ハ、来春年頭之節迄御猶予可被下候
一 成松京善請八十石之内、廿日かけ四拾石代之内、当廿
日かけ金不致、右ニ付善助諸所銀立へ相願之由候得共、

調金不相成趣ニ而、先達中^方度々春延申出候、右ニ付、正月至り候ハ、米金相庭ニ不抱、無相違上納候哉之段引合候所、米計之相庭違ハ、元^方覚悟ニ候得共、金相庭之儀者御米御下^ケ頃^方高直成儀者無御座候間、上下在之候共格別之儀ハ無之様存候所、當時当辺ニ而者、兩ニ付五拾目も相違在之、方角を失候次第ニ付、買請候時之相庭を以銀勘定ニ被成下候ハ、右廿日かけ四拾石之内、成丈上納可仕、右御聞濟無御座候ハ、入金損ニ而、御引戻し被下候共無是悲次第与申出候、右ニ付段々引合候得共、右之外返答不致候、実ニ大心配仕候得共、愚計ニ不能、宜敷御答可被下候

一 右惣商人儀、段々引合候得共、御出役中入金之外、入増等之儀一切不致呉、只来正月晦日迄延納ト而已願出候、右ニ付正月晦日至り候ハ、金米相庭ニ不抱、無遲滞ト急度上納可致、書付ニ而も差入可申哉与引合候得共、左も不致〔 〕延納而已願立候、右者商人^方入金ニ而捨候ハ、明年^方其者入相場へ進入不相成候様相成候間、其儀を心配存候哉、返米ト者不申出儀ト相見ヘ、然レ共先書申上候通り、御地ト違、当辺商人共格別身元無之者ニ付、多分損金相弁候儀者、利悲^{（用）}ニ不抱、不及自力ニ候故、無余儀相捨候儀難計、乍併、此^方無儀合利戻し候ハ、当前者相濟、買請人之外共商人申合セ、明年^方入札不致呉様子、実ニ当辺場狭之

所故、商人共一度ケ様之儀在之候而者、利悲不抱差困り候儀難計、心配候間、御考察之上、宜敷御答可被下候、近年迄ト者違、金米共相場大高下在之、付而者事六ツケ敷候間、明年^方ハ御弘御法御立替可被下奉存候、右取急キ御伺迄如此御座候、恐々謹言

【お断り】

本書は、原所蔵者との申し合わせにより、調査・研究目的に限り二次利用（本書を用いた調査・研究）が認められています。上山家文書のうち、本書収載史料の原本およびその他の史料の閲覧・学術利用を希望される方は、利用許可申請が必要となりますので、その際は丹波市教育委員会文化財課までご連絡ください。

丹波市オンデマンド史料叢書2

上山治郎右衛門 幕末用状控帳

2017 年 3 月 1 日 初 版

編 集 前田 結城

発 行 丹波市教育委員会

神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター

神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターのお問合せ先

〒657 - 8501 神戸市灘区六甲台町 1 - 1

e-mail area-c@lit.kobe-u.ac.jp tel.078-803-5566

<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/~area-c/>

印 刷 神戸大学生生活協同組合

